

---

# 悪魔の御子

子義

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔の御子

### 【Nコード】

N4406U

### 【作者名】

子義

### 【あらすじ】

悪魔憑きとして目覚めてしまったウエスペルティアの王子は魔法球に封印されてしまう。

魔法球の中で悪魔憑きとして完全に覚醒した彼は様々な個性的な仲間を喚びだした。

そして仲間達の力で外の世界の出来事を知る。

大戦。滅んだ祖国。散り散りになる民。捕らわれる妹。姿を消す義理の弟。悪魔に村を襲撃される甥。

仲間の協力の下外に出ることに成功した彼は何を想いどう行動して

いくのか。

主人公はアリカの双子の兄。本来居ない人間が加わった物語はどう変化していくのか。

## 御子の目覚め（前書き）

転生でもトリップでもないオリ主ものです。

主人公最強ではないですが最終的には上位クラスになる予定です。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## 御子の目覚め

忌み子というものは以外にも多く存在する。

それは部族特有のものであったり、村の伝承に関係するものだったり、様々だ。

双子を禁忌とする部族もあるだろう。例えばアルビノなど、自分たちと違った身体的特徴を持つものを禁忌とする事もあるだろう。そうした忌み子達は総じて辛い運命を辿ることが大半だ。

両親は愛してくれても他の人間が迫害する、両親からも何かしら危害を加えられる事もあるだろうし、生まれ落ちた瞬間に殺されることだって特に珍しくはないだろう。

近代化が進んだ現代社会ではこういった風習は根絶されたと思う無かれ、閉鎖的な独自の風習を持つ村や近代化が進んでない国々ではまだまだこういった悪しき風習は根付いている。世界はそんなに優しくはないし平等でもない。

その他にも先天的な能力を持った、後天的に目覚めた者を鬼子、悪魔の子などと呼び恐れる例もある。

霊能力があつたり、超能力があつたりと、ペテンではなく本物のそれは本人と周りの人々をも巻き込み騒動を起こす。

本人が制御できる、力を隠せるのならいい。しかし、大半は制御できず何かしらのトラブルをまねく。そのトラブルを起こすのが総じて幼少期だから悪魔の子と周りから迫害されるのだ。

霊障を起こしたり、無意識のうちに人の心を読んでいたたり、常人には見えない者と会話していたり……本人は至って普通のつもりだが、周りの人々は恐怖する。

元より人という集団は自分と違った者を迫害するものだ。

秀でた才を持つ者は嫉妬から。

人より覚えの悪い者、運動能力が劣っている者などには嘲笑い、見下し、後ろ指を指す。

そして自分よりも力を持つ者には恐怖や嫉妬から。

忌み子、悪魔の子と呼ばれる者達はほとんど三番目の理由から迫害される。本人には何の罪もない。彼らは生まれ持った理不尽な運命に抗うことも出来ず、翻弄され続ける。

運命に翻弄されるのは何も忌み子だけではない。

強い力は強い力を引きつける。異能は異能を呼び寄せる。

魔法世界において忌み子として扱われる悪魔憑き。

その力が覚醒してしまつては、もはや平穩は望めない。

それがましてや王族となれば尚更だ。

「よもや我が王家から悪魔憑きがでるとはな」

目の前には憤慨する初老の男性。

威かで貫禄のある姿、風格あるその男性の頭には煌びやかな王冠が輝いていた。

「父上……」

兵士に組み敷かれた少年は眼に涙を浮かべて父王を見る。が、そんな息子を見る父王の眼はどこまでも冷たく、その眼差しが少年の恐怖心を煽る。

「今まで息子の姿を装って私達を騙していたのね！ ああ本当の息子はきつと既に殺されているんだわ……。息子を返せ！

「この悪魔！」

ヒステリックに喚き散らす女性はこの国の王妃、つまりは少年の母親だ。

まるで汚物を見るかのような眼で息子を見下し、息子を返せ、悪魔め滅びよ、と呪詛を吐く。実の息子に呪詛を吐き続ける。

「母……上……」

少年の受けた衝撃は大きい。

優しかった母がなぜこうも呪いの言葉を自分に吐くのか。息子を返せ？ 息子ならここにいるのに……。

「アリカ……」

少年の顔が歪む。遂に涙が流れた。

目線の先には恐怖に染まった顔をし、怯えている妹。大切な半身。

理解した。味方はいない。

理解した。もう自分は助からない。

父母は完全に敵意を剥き出しにし、妹は恐怖に取り憑かれている。壊れた。家族は、完全に壊れた。

「そんな眼で見るな悪魔め。汚らわしい、虫唾が走る！」

つま先で頬を蹴り上げられる。

父に暴力を振るわれた、その事実には頭が追いついていかない。

頬は紅く腫れ上がり、口の中は切れ、鉄の味が口内一杯に広がり  
気持ち悪い。

「殺してはどんな災厄があるかわからんな。．．．．．よし、あれを持ってこい」

王は近くに居た兵士に命じた。しかし視線は息子．．．．．組み敷かれ、頬を赤く腫らし口の端から血を流し、涙をこぼしている王子から外さない。

「父上．．．．．何故ですか。僕が、一体何を．．．．．」

「喋るな悪魔が！ 息子の顔で！ 息子の声で！ この．．．．．！」

王妃の狂ったような叫びは止まらない。

そんな狂気に満ちた母を見ていられず、妹を見る。

「あ．．．．．いや．．．．．」

小さく呟くように悲鳴を上げる妹。その声を聞いた瞬間に何かが悪れた。

心底怯えきつた妹を見て、色々どうでもよくなった。

妹が化け物を見る目で自分を見る。

物静かで聡明、冷たい印象を受けるが心は誰よりも温かい。将来は立派な王女としてこの国を支えるであろう大切な半身。

愛している。妹を愛している。そんな最愛の妹が、自分に怯える、恐怖する、拒絶する。

耐えられない。耐えられなかった．．．．．心が折れた、完全に。

「づう．．．．．ひぐう……」



ついに声が漏れた。

我慢できずに嗚咽が零れる。声を出して泣いたのはひどく久しぶりだ。

「しかし近くに『これ』が居たことは僥倖だった。しかし、『これ』を連れ出して何をする気だったのだ？」

王が『これ』とい言い見た先には青い顔をした少女が一人。

年の頃は王子や王女と同じくらい。長い髪をツインテールにしているのが特徴的だ。

「…………お姉ちゃんを、これとか、物みたいに言わないで下さい……………」

涙を零しながら王子が初めて怒りの表情を露わにした。

お姉ちゃんと呼ばれたツインテールの少女、同じ王家の者だが王子の実際の姉というわけではない。その実年齢は王子や王女どころではなくその両親をも越えている。

「ふん、『これ』で十分だろう。この者は我が国が誇る兵器なのだからな…………幽閉していたのを連れ出すとは、何を考えていたのか悪魔め……………」

「それは、外の世界を見せたくて……………」

王女は知的で物静かだが王子はやんちゃで悪戯好き。二卵性双生児だが、外見は瓜二つで性格は正反対。

王子は好奇心に負けて立ち入る事を禁じられた部屋に忍び込み、お姉ちゃんと呼ぶ少女に出会った。この時実に三歳。かなりの行動力と言えるだろう。

それいらい二年間、二人の秘密の時間は続いた。

感情の欠片も表に出さない少女だったが、王子と過ごしていく中、段々と感情を表すようになってきた。まだ笑顔を見ることは出来なかったが、いずれこの少女に向日葵のような綺麗な笑顔を浮かばせること、それが王子の目標だった。

思えば初恋だったのだろう。少女と過ごす時間は、特別な、大切なものだった。

「何が兵器だ！ 訂正しろ！ お姉ちゃんは、人間だ！」

怒りのまま叫ぶ。

好きな人を兵器扱いされたのだ。怒るのも当然だろう。

「アルカ……」

ぼそりとツインテールの少女が呟く。

自分のために怒る幼き王子に何を想っているのか……。

少なくとも、悪い感情ではない。

しかし、この感情がどういうものなのかは知らない。誰も、誰一人として彼女にそういった事を教える人間が居なかったからだ。一人の例外を除いて。

兵器に感情は不要。故に、少女は空っぽで何も無い。

王子、アルカ・テオゲヘナ・エンテオフユシアとの時間が続いていたのなら、もしかしたら感情を取り戻し、元気で快活な女の子になったかもしれない。

しかし、それはIFの話。

全て最悪のタイミングで歯車が狂った。

アルカの目覚めた力は悪魔憑き。

精神病の一種とされる悪魔憑き、犬神憑き、狐憑きなどとは違う本物。

真祖の吸血鬼と同程度に危険な存在とされる禁忌。

魔に墜ち、悪魔を際限なく召喚し、血と殺戮を好む魔人。 . . .

・伝承ではそう伝えられている。

その存在はここ数百年は確認されていなかったが、アリカは本物の悪魔憑きだった。

力が目覚め、コントロール出来ずに勝手に現世に現れた下級悪魔達。

そのどれもが悪戯好きの他愛のないものだったが . . . . . 悪魔には変わりはない。

その悪魔達はツインテールの少女が触れた瞬間に送還されて被害は出ていない。

が、騒ぎを聞きつけ駆けつけた兵士達に取り押さえられ、今に至る。

「陛下、お持ちしました」

「ご苦労。さて、はじめるとするか . . . . .」

王が受け取ったのは白い宝石。一見すると真珠に見える。サイズはビー玉よりやや大きいくらいだ。

「これは重罪人を閉じこめる魔法球、ある意味死刑よりも辛いものだ。悪魔には丁度良い」

王は宝石を掲げる。

「今生の別れだ。消える、悪魔」

「 . . . . . 父上っ! 」

宝石が光るとアルカは中に吸い込まれた。アルカの姿はこの城から、いや、この世界から完全に消失した。あまりにあっけない。

「父上……兄上……は？」

怯えきっていたアリカが初めてまともに言葉を発した。

「いいか、アリカ。アルカ・テオゲヘナ・エンテオフュシアは五歳で病死だ。間違えるなよ、お前に兄は死んだ」

「……ああ、悪魔が消えてせいせいするわ。お前達、姫御子を元の部屋に戻しなさい。警戒も怠るんじゃないですよ、あの悪魔は二年もの間姫御子に接触していたのですからね」

兵士達は敬礼すると、この世の終わりのような顔をした姫御子と呼ばれた少女を元の軟禁部屋へと連れもどす。

部屋に連れ戻されるのを確認すると、王と王妃もこの場から離れていった。

一人残されたアルカの双子の妹、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアは、床に転がる最愛の兄を封じ込めた魔法球をそっと胸に抱き静かに涙を零し続けた。

アルカ・テオゲヘナ・エンテオフュシア王子、病気で死亡。病名は明かされていない。享年は五歳。これが、公式記録だ。

「何を見ているのじゃアリカ？」

「テオドラにタカミチか……………」

それは完全なる世界に反撃を開始してからの慌ただしい日々の中のちよつとした一コマ。

美しい女性へ成長したアリカは手にしていたロケットペンダントを机に置き、小さな訪問者達に顔を向けた。

ヘラス帝国の第三皇女テオドラに紅き翼が保護した戦災孤児の一人であるタカミチ。仲間内でも年少組の二人だ。

「そのペンダントを見て普段からは想像出来んほどに優しい顔をしておったからの。タカミチなんぞ見とれて顔を赤くしておったぞ？」

「ちよつ！ テオドラ様！」

からかうテオドラに慌てるタカミチ。なんだかんだ言っ二人は仲が良いように見える。

「そうか、私はそんな顔をしていたのか」

「ああそうじゃとも。ちよつと見せてみるのじゃ」

ひょいっとアリカの手からペンダントをかすめ取りまじまじと見る。

ロケットの写真には二人の男女。笑顔の少年少女が写っていた。

「あ、小さい頃のアリカ様ですね。すごく可愛らしい……………隣の方は？」

「私の隣に居るのは兄上じゃ。よく似ておるじゃろっ？」

「主の兄君は確か……………」

テオドラが言いよどむ。ウエスペルタティアの王子が病死したことはまだ記憶に新しい。当然テオドラもタカミチも知っていた。

「そう暗い顔をするな二人とも。厳密に言つと、兄上は死んでいない」

そう言い眼を閉じるアリカ。

テオドラとタカミチは、え？ 何言つてんのこの人？ といった表情を浮かべている。

「そうじゃな……この戦争が終わりゆっくりとした時間が出来れば、兄上を助け出す方法を探してみるか……うん、必ず助け出す」

アリカは優しく人差し指に付けている指輪を撫でる。

そこには真珠によく似た白い宝石が輝いていた。

母

そこは白い地獄だった。

アルカが封じ込められた魔法球。異界と違って間違いいではないその魔法球の中は、正しく地獄であった。

白、白、白。

辺り一面の白。白以外の色は皆無。色彩が失われた世界。

無いのは色だけではない。

風が無い。

臭いもない。

壁も、天井も、床も分からない。

果ても無い。地平線も見えないが、決して狭くは無いだらう。

歩けども歩けども進んでいるのか分からない。

進んでいるのか、後退しているのか、登っているのか降っているのかも分からない。方向感覚は機能していない。

正に地獄。

よく持って数日、悪ければもっと早く発狂しているだらう。

時間の流れも分からない。

この虚無の白き地獄に閉じこめられてどれだけの時間が過ぎたか。

.....

数日？ 数週間？ 数時間？ 数年？ 数百年？ 時間の流れも

めちやくちやだ。

空腹や喉の渇きは無い。どうやらこの白い世界から生命力が供給

されているらしい。

餓死の心配はないが、それはこの地獄の日々がいつまでも続くという事、素直に喜んで良いのか分からない。

つまり、死ぬまでこの地獄から出られない。なるほど、確かに死刑よりたちが悪いかもしれない。

まだ五歳のアルカに舌をかみ切る勇気も無く、この地獄に捕らわれ続けた。

永遠とも感じられる時間の中、五歳とは思えない強靱な精神力を以て狂わずに耐え続けた。

成長する事も無い五歳の未熟な体のまま、停滞した時間の中を彷徨い歩き続けた。

しかし、常に際限ない孤独がアルカを襲う。

誰も居ない。自分以外の誰も居ない。

寂しい寂しい寂しい。

話し相手が欲しい、一人は嫌だ……………。

もう、果てのないこの世界を歩くのにも疲れ、仰向けに寝転がり太陽のない、空と言えないただ白だけの空間を見つめる。

「……………寂しい」

あれからどうなっただろう？

アリカはどうしただろうか？ 父と母は？ 兵士達は？

国は？ 民は？ 何も分からない……………。

「お姉ちゃん……………」



そして何よりお姉ちゃんの事。

彼女は笑うことが出来ただろうか？

あの人には、もう二度と会えないのだろうか？

「……………く」

涙が込みあげてきた。

もう人目もない。

恥じることもない。

ならばいつそ、思いっきり泣いてやろう。

「……………うあ」

一度涙のダムが決壊したらあとはもう涸れるまで泣き続けるだけだった。

寂しい、寂しいと、知らず知らずに魔力をまき散らしながら泣き叫ぶ。

しかし、この魔力を力の限りまき散らすという行動を取ったおかげでアルカは孤独から解放される事となる。

魔力を力の限り激しく発散させることで偶然にも本当に悪魔憑きとして覚醒したのだ。

元より捕らわれる原因となった召喚は偶発的な暴走によるもの。

まだ噛みあつていない歯車が誤作動を起こし、低級な悪魔を呼んだに過ぎない。本来、アルカの持つ力はこの程度のものではない。力任せに魔力をまき散らしたおかげで、しっかりと歯車が噛みあつた。

真に覚醒したアルカは、その規格外な潜在能力を持って、知らず知らずのうちにその悪魔憑きとしての力を行使した。

王家の魔力、生まれ持った魂の異質さ、そして孤独に耐えられず

他者を望む純粹な願い。

これらの要因が混じり合い、知らずに覚醒したアルカは無意識のうちに召喚した。それも、規格外な召喚を。

「あらあら……これは可愛らしい召喚師さんね」  
「……あ」

いつの間にか目の前に現れた、異質な存在。  
それは美しい女性だった。

ラクダに乗り、頭には小さな王冠。艶やかで長く美しい赤い髪に透き通るような白い肌。

まるで名画にかかれた美の女神のような、そんな現実離れた女性<sup>性</sup>。

「あ……う……」

しかし、アルカの頭は他人が居る、一人じゃない、この事実で埋め尽くされた。

「よいしょ……それにしても驚いたわ。『完全召喚』だなんて何千年ぶりかしら」

ラクダを降りて辺りを見渡す女性。

「それにしても何も無いわね。異界のようだけど……あら？」

アルカは嗚咽を噛みしめながら女性の元に走り、抱きついた。

「うぐ……ひっく……ぐす……」

「ふふ、困った召喚師さんね？　大丈夫よ、安心しなさいな」

女性は泣き震えるアルカを優しく抱き返すし頭を撫でる。

その慈愛に満ちた表情はまるで聖母のよう。本来の属性と間逆に位置するはずだが、女性には何の悪性も認められない。泣いてくずる我が子をあやすように、静かにアルカが泣きやむのを待つ。

「あなたが私を呼んだのかしら？」

「はい、多分そうです。僕は悪魔憑きですから」

「なら、悪魔憑きが呼び出した私が悪魔ということはわかるわね？」

「はい……………」

抱き合っ たまま会話を続ける。

だいぶ涙も収まってきた。

「怖くないの？　私は悪魔よ？」

「別に貴女は怖くないです。優しいですし、何より会話が出来るなら悪魔でも幽霊でもなんでもいいです。一人は嫌だ、寂しいのは……………いやだ……………」

よりいっそう強くアルカを抱きしめる女性。

気に入らない者なら召喚師だって躊躇無く殺す。

この女性のような最上位の悪魔ならこれくらいのことには平気でやる。そもそも彼女ほどのクラスになるとそうやすやすと人間程度が御せる存在ではない。

しかし、殺しはしない。

興味を持った、この小さな召喚師に。

「私を喚んだのは偶然みたいだけど……………このまま還ってほだめかしら？」

「いやだ！ 一人にしないで……そばにいて……」

とたんに涙を溜めて首を振るアルカ。

召喚師と召喚された者である以前に、こんな状態の子供を放っておくなんて彼女にはできなかった。悪魔らしからぬ悪魔。ていうか、お前ってどうして悪魔なの？ などとよく呼ばれる彼女はそれこそ、そこらへんの天使何かよりよっぽど慈悲深い。

「ふふ、わかったわ、還ったりしない。あなたの名前は？ 可愛い召喚師さん？」

名前の交換は重要な儀式だ。

事、契約を結ぶのには必要不可欠と云っていい。

契約や約束事を重んじる悪魔達にとってはとても大切なことだ。

「アルカ。アルカ・テオゲヘナ・エンテオフユシア」

「アルカね、確かにあなたの名前、受け取りました。小さなマスタ

」

アルカの次は女性の番だ。

アルカの、マスターの頭を撫でながら言う。

「私はゴモリー。ソロモンが序列五十六位。地位は公爵。今後ともよろしく、マスター」

こうして、奇妙な共同生活が始まった。



## 色の魔王

ゴモリーと共に過ごしていく内にアルカは段々と気力を取り戻していった。

生ける屍と成りつつあった若い少年は、優しい悪魔のおかげで墮ちずにすんだ。

この時間の停滞した白い牢獄で、アルカにとってゴモリーはそれこそ世界の全てだと言っても間違いない。ゴモリーが来てくれたから、壊れずにすんだ。

他愛ない雑談がこの上ない至福の時だった。

ゴモリーの愛騎ラクダのくーちゃんに乗せてもらった時は興奮した。

優しく抱きしめられたときは涙を零すのを我慢できなかった。

「母さん、今日も魔界の話聞かせてよ！」

「そうね……どんな話をしましょうか」

アルカはゴモリーの事を母と呼んだ。

ゴモリーもアルカの事を我が子のように扱った。

「そうね……フォルネウスが泥酔して、海で溺れた話でもしましょうか」

若いアルカに母親はまだ必要だった。その点でいえば正にゴモリーはうつつつけの存在といえるだろう。前にも述べたが、ゴモリーは慈悲深い。全てを包み込むような母性も兼ね備えている悪魔らしからぬ存在だ。

アルカが本来の明るくやんちゃな姿を取り戻したのも、安心して甘えられる存在が現れたから。ここでは王族としての肩書きも何もない。ただのアルカという五歳の少年の姿のままειられる。もう

アルカの心が折れることはないだろう。

「その人鮫なのに溺れたんだ！ おっかしい！」

「そうなのよ、ふふっみんなして笑ったわ。いつもはクールなマルコシアスもその時ばかりは声を出して笑っていたわね」

雑談はアルカが聞き手に回る。これはアルカに家族の話させないようにゴモリーが配慮したからだ。必然的にゴモリーが話し事になるのだが、内容がすごい。

魔界の話がほとんどなのだが、出てくる名前が大物過ぎるのだ。アルカは只単にゴモリーの友達の話くらいにしか理解できていないが。

「母さん、マルコシアスって誰？」

「シアの事？ そうね……私の妹か娘といった感じがしらね」

「なら僕のお姉ちゃんになるんだね！ 会ってみたいなあ」

「ふふ……気持ち分かるけど、私を完全召喚して更に公爵級の召喚となると……」

ゴモリーは考える。

もしかしたらいけないのではないだろうか？

只単に個人の力だけで公爵級の完全召喚を成功させたアルカは破格の存在だ。仮に召喚の一点特化型だったとしても歴史に名を残すレベルの力量だと断言できる。

この世界が一瞬で魔力を全快まで供給するとしても、上限以上の供給は無いはずだ。

ならば個人の持ち得る魔力量だけで召喚に成功した事になるのだが……。

「私を喚んだ時はどうしたのかしら？」

「よく分からないんだ……ただ、寂しい、一人は嫌だっ  
思ってた……」

魔法陣無し。術式無し。生け贄無し。協力者無し。

ただ純粋な想いだけで公爵を完全召喚したのか。ならばチートか  
バグもいいところだ。

「ならその時と同じように強く想うのよ、会いたって。友達が欲  
しいって」

「わかったよ母さん！ やってみる！」

そう言うところアルカは目を閉じ難しい顔をしてうんうん唸りだした。  
その姿を優しく見つめるゴモリー。

成功するとは思わなかった。いや、成功するにしても一発目で成  
し遂げるとは誰も思わないだろう。失敗して落ち込むアルカを優し  
く抱きしめて慰める心算だったのだが……。アルカはゴモ  
リーの予想の遙か斜め上を行った。

「え？ 嘘、本当に？」

さすがのゴモリーも冷や汗を流した。

目を閉じてむむむと唸っているアルカ。手を思いつきり手を握っ  
てぶるぶると震える様はなんとも可愛らしい。

しかし、そのアルカの目の前で渦巻く魔を感じさせる黒い魔力は、  
小動物を連想させるアルカの姿とは不釣り合いなほどに凶悪。

魔性の物呼び出すに相応しい黒い魔力の渦は空間を蝕み歪めて  
いく。

「……ふふ」



ゴモリーは興奮していた。

アルカ……我が子は紛れもなく本物だと。

気持ちが高ぶる。ゴモリーは慈愛の者だが、その本質は間違いなく魔性。力ある者に惹かれるのは自然の事。

この小さな希代の召喚師はゴモリーの、公爵級の悪魔を唸らせるだけの力を持っていた。

どんな悪魔を呼ぶのだろうか？

爵位持ちの大悪魔か？ それとも下級の他愛ないもだろうか？

何が出るか……少なくとも公爵を呼ぶ力を持っているのだ。召喚されるのは並大抵の悪魔ではないのだろうか。

空間に亀裂が走る。

「はっ」

鳥肌が立った。

亀裂から漏れる強大な魔力。爵位級である自分を凌駕する強大な魔の力。

知った魔力だった。故にゴモリーは驚愕と歓喜に包まれる。

予想外も良いところ。公爵クラスの大悪魔を以て規格外と言わせるその奇跡の才。

「まさか、公爵以上を呼ぶなんて……徐々に震えが来たわ」

亀裂を突き破って何者かがこの白い地獄に降り立つ。

その禍々しく凶悪な魔力の前では、並の魔法使いでは己の死を覚悟するだろう。

しかしこの地獄でそのような覚悟を持つ者は居ない。

居るのは友達を呼べたことに目を輝かせる小さな規格外の少年に、興奮冷めない悪魔の公爵とその騎獣のみ。

「これは面白みのないところに呼ばれましたねえ」

それは小柄な少女だった。

まだ五歳であるアルカよりかは大きい、ゴモリーの肩にも満たない背丈の小さな女の子。

うつすらと紫がかった紫陽花色をした髪に鮮血よりなお朱い朱色の瞳。

時より覗かせる八重歯が可愛らしいが、その体つきはその子供っぽい八重歯に似合わぬほど女性らしい。醸し出す雰囲気は無垢な少女のものではなく妖艶な娼婦のそれである。

「まさかこのようなところで会うなんて……」

「あ、ゴモたんじゃん。やっほー！」

ゴモリーと喚ばれた大悪魔は旧知の仲らしく挨拶をかわす。

「で、なんでゴモたんここにいるの？ しかも本体みただし。か  
くいうあたしも本体？ うっふふふふ……… いったいどれ  
ほどの生け贄を以てあたしを喚んだのかしらねえ。百？ それほど  
千人くらいを狩ったのかしら？ それでもあたしを喚べるんだから  
大した術者ね」

ゴモリーを凌ぐ力を持つこの大悪魔ですらこう認識している。それほそまでにアルカの召喚は規格外なのだ。

「召喚師なら貴女の目の前に居るでしょう」

「んん？ どこかにや……… あ？」

大悪魔は見た、目の前でキラキラと眼を輝かせる小さな男の子を。

「……………んと、君があたしを喚んだのかしら？」

「うん！ 僕と友達になってください！」

喚ばれた悪魔の混乱は頂点に達する。

まずこの身が『完全召喚』という形で魔界より喚ばれた事、喚ばれた先では何故か公爵であるゴモリーの本体がいて、召喚師は目の前の幼い人間の子供だという。

「……………ありえないでしょう。ゴモたんもこの子に喚ばれたっていうの？」

「そうよ。一人じゃ寂しいからという理由でね。ちなにみ貴女に至っては友達が欲しいという理由だよ」

大悪魔の顔が引きつる。

「お姉ちゃんは僕が喚んだんだよ！ お姉ちゃんがシアさんですか？」

「君はシアを喚ぼうとしたの？ 残念、あたしはシアじゃあない」

大悪魔は笑顔で答える。

まずは状況整理を最優先。仮にゴモリーの話が事実だったとして何の問題もない。

召喚師が目の前の可愛い男の子で何の問題があるのか？ 魔界一の淑女を自称する彼女からしてみればご褒美だ。これが小汚いおっさんだったりしていたらすぐさま首を落としていたであろう。

「僕はアルカ。アルカ・テオゲヘナ・エンテオフュシア。お姉ちゃ

んの名前は何？ 僕と友達になってくれますか？」

上目遣いでもじもじとしながら尋ねるアルカ。

「（何なのこの可愛い生き物は………）うっふふふふ……  
……お姉ちゃんの名前はねえ」

アルカの仕草や表情に徐々に身体が昂ぶっていく。魔界一の淑女を自称する彼女の素直な感想を言うと、今すぐ食べてしまいたい。それほどまでにアルカは魅力的に映った。

生唾を飲み、上唇を舐め、名を告げる。

「あたしの名前はアスマデウス。七つの大罪の一つ色欲を司る魔王。よろしくね可愛いマスター」

そっというアスマデウスは恍惚の表情を浮かべていた。

## 悪魔の園の愉快な住人（前書き）

悪魔の地位など独自設定になってる所があります。  
そこはご了承ください。

## 悪魔の園の愉快な住人

「それにしても随分に賑やかになってきたわねえ」

「そうね。私もそう思うけど、とりあえず私の胸を揉むのを止めなさい」

「アスモデウスは当然のようにゴモリの胸を揉んでいた。

この手のセクハラは日常茶飯事なのでゴモリは強くは言わない。

「だってえ体を持て余しちゃってるんだもの。アルカが可愛くて可愛くてもうあたしっただらずっと濡れっぱなしよ？ ああ食べちゃいたいわあ」

「あなたは存在そのものが性犯罪ね。アルカの情操教育に悪影響でしかないわ」

ただの白い空間でしかなかったこの世界は今や元の面影は無い。

草花は生い茂り水が沸き川が流れ太陽は優しく大地を照らす。

殺風景を嫌った悪魔たちが思い思いに創造してしまっただため元の面影は既に無い。

天国と見間違っほどの楽園へと変貌していた。

そして何も変貌したのは自然や風景だけではない。魔法球の住民も随分と増えた。

「それにしてもあの子の潜在能力は飛びぬけてるわね。こつも公爵や魔王をポンポン喚ぶだなんてソロモン以来じゃないかしら？」

「うんにゃ、素質だけならソロモンより上だと思っわよ？ ああ我慢できないわ……ゴモたん、ちょっと舐めてくれない？」

ゴモリ は発情するアスモデウスを黙殺して我が子同然に愛するマスターを見る。

誰かが持ち込んだ椅子と机。そこに座っているアルカは黒いロブに身を包んだ女性から勉強を教わっていた。

「はあはあ……ああ堪らないわあ。あたし達が育てる人の子……どこまでの高見に登って行くのかしら」

恍惚の表情でアルカを見る。

アルカはアスモデウスの後にも様々な高位の悪魔を呼び出していた。

今アルカに知識を授けている悪魔もそうだ。

教師役を務めている彼女の名はガープ。ソロモン七十二柱の序列三十三位。言わずもがな大悪魔の一柱である。

哲学や教養の知識を与え愛憎を司る力を持つ。また召喚者がある場所から別の場所へ瞬間移動させてくれるなどとも言われている。

「デウス様、また発情なさっているのですか？」

呆れた表情で話しかけたのは漆黒の髪に漆黒の瞳をした美青年。名をアモン。ソロモンが序列七位。大侯爵という高位の爵位を持つ大悪魔だ。

過去や未来を見通し、友人や恋人同士の仲たがいを仲裁するとも言われる変わり者である。

「別にいいでしょう？ それよりもちょっと右の乳首をつねってく

れないかしら」

アモンはデウス……アスモデウスの言葉を黙殺しゴモリの隣に腰掛ける。

「御息はすすくと成長なさっているようですね」

「ええ、飲み込みも早いわ。ふふ……教師陣が優秀すぎるというのもあるのでしようけどね」

そうこう言っているうちに勉強の時間も終わったようで今では数人の悪魔たちと元気に駆け回っている。

その数人の悪魔一人一人が軽く国家を転覆させる力を持っているのだから笑えない。

「しかし楽しそうね皆」

「皆様方本体ですし純粋に遊ぶというのが逆に新鮮なのでしょう。それに純粋な好意を向けてくる子供を無下に扱うほど器が小さいわけではない。それに加えて召喚主ですからねアルカは」

アルカと無邪気に駆け回るのは五人の男女。

年の頃は十五ほどの少年はバシン。

オレンジ色の長髪が特徴的な凛々しい女性の名はペイモン。

栗色のショートカットに特徴的な金色の瞳の少女はネルガル。

そしてアルカの右隣で笑っている紫色の髪をしている壮年の男性がベルゼブブ。

アルカの左隣で笑っている美しい金髪の人形のような可愛らしい少女がルシファー。

上から大公爵、魔王、警察署長、魔王、大魔王と色々ぶっ飛んでいる。



「おう、アルカ坊やの勉強終わったみたいじゃねえか」

「ベリアル……むさ苦しいわね。今アルカを視姦してるんだから黙ってて」

赤銅色の短髪に髭を蓄えた筋骨隆々な大男はベリアルと呼ばれた。七つの大罪が一つ傲慢を司る魔王である。例のごとくアスモデウスの事は黙殺した。

「あなたは相変わらずねえ。後で鎮めるの手伝ってあげるからゴモリのスカートから顔をださないなあ」

おっとりとした雰囲気はこの女性の名はアスタロト。七つの大罪が一つ怠惰を司る魔王だ。

「ああアスタロトは話分かるわね！ さしあたってこの鞭であたしを蹴って欲しいのだけど」

「はいはい、アルカに毒だから後でね」

手慣れた様子でアスモデウスをあしらうアスタロト。二人はとも仲良しだ。

アスモデウスを呼んだ後もアルカはマルコシアスと呼ばうと頑張った。

しかし、次に召喚されたのはアモン。次にベリアル、バシン、ガブ、ベルゼブブ、ペイモン、ネルガル、アスタロト、ルシファーと続く。

大悪魔のバーゲンセールだ。それに魔界の支配者の一人であるルシファーまで呼び出してみせた。ゆうに世界を滅ぼしてお釣りがくるほどの戦力が揃っている。

「しっかし俺達は本体で来てるが魔界は大丈夫かね？」

「そうねえまあ優秀な子達はまだまだいるから大丈夫でしょうけど  
お」

『完全召喚』とゴモリ やアスモデウスは言った。いまこの魔法球の中に存在する悪魔達は皆本体なのだ。

本来の召喚は魔界から本体とは違うアバター、いわば分身が呼びだされる。故にいくら分身が殺されようが本体には影響はなく、送還された分身を取り込む事で分身が経験した事を本体も追体験するのだ。

言わずもがな分身体より本体を呼ぶ方が難しい。故に召喚された悪魔達は本体が喚ばれた事に大変驚いた。正しくアルカは規格外なのだ。

今魔界はこの魔法球の中にいる悪魔達が完全に姿を消した状態である。

名だたる最高位の悪魔に加え支配者の一柱であるルシファーまで消えたのだ。今魔界はちよつとしたお祭り騒ぎだろう。悪い意味で。

「でも中々シアを喚べないのよね……」

本来の目的はマルコシアスを召喚することだったのだが……なかなか当人は召喚できない。

アルカは住人が増えた事に大喜びだが。

「お、また召喚するみたいですよ」

「今度こそシアの穢ちゃんが来りゃあいんだがな」

渦巻く黒い魔力、ひび割れて行く空間。

一同固唾を飲んで見守る。

ひびから漏れる魔力が誰のものであるのか最初に気づいたのはルシファーだった。

「この魔力は……アルカは悪魔だけを呼び出すものと思っていましたが」

ルシファーは顎に手を当て考え込む。が、色々細かい事は後々考えるとして自分より下の序列ができる事に喜んだ。

アルカが召喚した悪魔達は面白半分に序列を付けた。それは召喚された順と言う簡単なもので、上下関係なども別に存在しないがその方がカッコいいからという理由である。基本悪魔達は物事を面白おかしくする事を好むのだ。

序列一位ゴモリ。

二位アスモデウス。

三位アモン。

四位ベリアル。

五位バシン。

六位ガアプ。

七位ベルゼブブ。

八位ペイモン

九位ネルガル。

十位アスタロト。

十一位ルシファー。

そしてこの序列に新たに一柱加わることとなる。

「……あれ？ 魔界ってこんな場所だったっけ？ それにしてもそうするメンバーがお出迎えて」

召喚に応えた男の顔が引きつった。

オレンジ色の髪をした眼付の鋭い長身の男性。その背にある純白の翼にどうしても眼が行ってしまう。

黒い翼や蝙蝠のような羽は見慣れているが、この悪魔の楽園には似つかわしくない神々しい白色の翼はまさしくこの世界の異端だ。

「召喚に応えてくれてありがとう！ 僕はアルカ・テオゲヘナ・エントオフユシア。お兄さんの名前は？」

「え？ 君が召喚主？ それに俺本体だし……」

悩みこむ男に声をかけるのはルシファー。二人は旧知の間柄だった。

「まずは名乗る事が礼儀でありましょう？」

「ル、ルシファー殿……」

男は驚愕しながらも装いを改め恭しく礼をとって見せる。

「失礼した。召喚に応え参上いたしました。我が名は熾天使が一柱ウリエル。今後ともよろしく」

悪魔の園に天使が舞い降りた瞬間だった。

みんな規格外なお友達（前書き）

ネギま！ という作品は沢山の方々に愛されると実感しました。

## みんな規格外なお友達

「ほら！ アルカ頑張れ！」

「今度こそですよ！」

アルカを中心に悪魔達が集まり召喚のために意識を集中している小さなマスターを激励する。

魔王も侯爵も大魔王も天使でさえも一丸となってアルカを応援する。

ベリアルと肩を組んで声高らかに応援するウリエルはすっかりこの場に馴染んでしまったようだ。

「どうじゃろう？ 俺は魔王クラスが来ると予想するがの？」

「ボクは今度こそシアちゃんがあると予想しますよ」

ベルゼブブはまた魔王が来ると予想し、ネルガルはマルコシアスが来ると予想した。

「またウリエルみたいに天使が来るかもしれないけどな」

「それも有りかもしれないわねえ。ウリエルのような天使はまだ居るでしょうしねえ」

バシンの予想に頷いたのはアスタロト。

悪魔憑きであるアルカがウリエルを喚んだのはちゃんとした理由があった。

熾天使の一人、大天使の一人と地位も力も名声もあるウリエル。しかしあまり知られていないが彼は一度墮天使の烙印を押されて

いるのだ。

後に復権し墮天使ではなくなったが、聖人としての復権でヴァチカンは厳密にはウリエルを天使と認めていないことになる。天使として世界中から信仰されている彼だがその実とてもグレーな存在なのだ。

そんな経緯を持つウリエルだから召喚できたのだらうというのが結論だった。

「皆様方、召喚するようです」

ペイモンが嬉しそうな表情で言う。彼女も次は誰が召喚されるか気になってしょうがない者の一人だ。

「うむむむむ………」

目を瞑り唸るアルカ。

これまでと同様に魔力が渦巻き空間に亀裂が走っていく。

「あつは！ 流石アルカね。ああまたパンツを換えないと」

「むう。魔王ではなかったか」

「シアちゃんでもないですね」

「天使でもないようやな」

各々の予想も外れた。

「うつわ………マジか。アルカは本物だな………震えがきたぜ」

現在序列最下位のウリエルは実際に召喚を見て顔を引きつらせていた。

ウリエルは最上位の天使。同位の天使にはミカエルやガブリエルといった有名な天使達がいる。そんな彼は悪魔達の階級で表すなら魔王クラスに該当する。

そのウリエルが冷や汗をかき緊張から少しだけ震えている。それは召喚されたのが自分より高位の者だったからである。

「これはこれは……あなたまで呼び出されましたの？」

ふふふと笑うのは魔界の支配者たる墮天使ルシファー。

頬は赤みが差し表情は歓喜。彼女も例外なく召喚主であるアルカを溺愛していた。

アスモデウスのように色々ぶっ飛んでいないが、ゴモリーと同じようにアルカに愛情を注いでいる。

アルカは新旧合わせた世界で最も悪魔に祝福された人間だ。

喚ばれた大悪魔達は例外なくアルカの魂に言葉を刻み込んだ。

簡単に言えば『この人間は私大切な友人だから手出ししたら殺す』というシンプルなもの。

これで悪魔族、ついでにウリエルも刻んでいるので天使族は皆例外なくアルカと敵対しないし出来ない。もしアルカを悪意を持って攻撃しようものなら魔王軍団と破壊天使が仲良く笑顔で殺しにくる。

空間が砕け膨大な魔力を伴い悪魔がこの園に降り立つ。

一同から歓喜やどよめきが起きる。降り立った悪魔は魔界の誰も知る者だったからだ。

「くくく……よもやこの我を完全召喚できるほどの術者が存在しようとはな」

髪は灼熱色の紅。アメジスト色の瞳につり上がった口からは鋭い



犬歯が見え隠れする。

無く子も黙る大魔王。魔界の支配者の一柱であるサタンその人だった。

確かに『魔王』ではない。魔王すら凌駕する存在だった。

「む？ 何だ貴様達。最近姿を見ないと思ったたらこんな所で遊びほうけておったのか？」

見知った顔達を見つけ威厳たつぷりな口調でサタンは喋る。

「何なのだ貴様等？ 一体何万人をくびり殺したのかは知らぬが我は本体を喚び出されたのだ。見たところ貴様等も本体のようだがまさか同じ術者に喚ばれたとでもたわけた事を言うまいな？」

あっはっはっはと一人大笑いするサタンだが他の者は一切笑わない。

「……おい熾天使」

「はっ、なんででしょうか？」

睨み付けられびびるウリエル。

「何故貴様がここに存在しているのかは知らぬが答えよ。我を喚んだ術者はどこだ？ 我は今実に気分が良いのだ。この我を、しかも本体を喚びだすほどの者だ。敬意すら感じるわ。早くどのような人間が見極めてやりたいのだ。さあ言え、術者はどこだ？」

サタンの問いにちよいちよいと指差すウリエル。

指差した先を見るとキラキラと眼を輝かせたアルカがいた。

サタンはたつぷり一呼吸分目を閉じると。

「さあ術者はどこだ？」

少し現実逃避した。

「サタン、認めるのです。彼こそが私達のマスターなのですから」  
ルシファアの言葉に顔を引きつらせるサタン。

「……小童、貴様が？」

「うん！ 召喚に応えてくれてありがとう！ 僕はアルカ・テオゲヘナ・エンテオフユシアです。また友達が増えて嬉しいな。お兄さん、名前を聞かせてよ」

無邪気に笑うアルカの名を聞くと確かに自分とのつながりを感じた。どうやら本当にこの小さな小さな男の子が召喚主らしい。

「ふっはっはっは！ そうかそうか！ いや、これほど愉快なのはいつ以来か？ 素晴らしいぞ小童！ いや、アルカ……我がマスターよ！」

心底楽しそうな笑い声を上げサタンはアルカをマスターだと認めた。

「我はサタン！ 魔界を支配する者の一柱よ！ さあ小さくとも強大なマスターよ、我に何を望む？ いかような望みでも見事叶えて見せようぞ！ 人間界を支配するか？ 金か？ 地位か？ 女か？  
どんな無理難題を吐こうがこのサタンの全てを賭けてお前の欲望

を満たすと誓う！」

両手を広げ笑うサタン。

悪魔の頂点に立つ者に似つかわしい威厳在る姿。

同格のルシファー以外はそのサタンの姿に思わず緊張する。

ゴモリーもベルゼブブもベリアルもアスタロトも。アスモデウスでさえびしょびしょに濡れた自分のパンツを握りしめてサタンを見つめ固まっている。もちろん現在はノーパンだ。

「それじゃあお願いが一つ……………」

「ほほう？ 殊勝だなアルカよ。一つと言わず幾らでも申すが良い」

さてどういった事を言ってくるのかと身構えていたサタンはアルカのお願いに驚愕してしまう。

「僕と友達になって下さい！」

「ふははははは……………え？」

先ほどの威厳も吹っ飛びきよとんのした表情になるサタン。

こうして魔界の支配者はアルカのお友達同盟序列第十三位に名を連ねることになった。

みんな規格外なお友達（後書き）

日間ランキング一位だと・・・何が起こった？

読んで下さっている方々にひたすら感謝あるのみです。

## 魔族

「はい母さん終わったよ」

「ありがとう。良い気持ちだったわ」

アルカは魔性を感じさせる大きな満月に照らされながら女性悪魔達と仲良く入浴していた。

大きな浴場につきり疲れを取るアルカと女悪魔達。ちなみに男悪魔と天使は酒をかつくらってどんちゃん騒ぎをしている。

「次はガアプ先生の番だよ！」

「ありがとうアルカ。優しくお願いしますね」

いつも纏っているローブも無く今は綺麗なガアプの顔もよく見える。

薄緑色の短髪に漆黒の瞳。泣き黒子が特徴的なスレンダーな美人だ。

アルカが先生と呼ぶ悪魔は教師を務めるガアプとバシンの二人だけ。先生と呼ばれる事が新鮮なのか二人ともまんざらでもない様子みたいだ。

まず一番最初に母親同然であるゴモリ の背を流した後にガアプの名をあげたので随分と懐いているようだった。

「んんっ……アルカ、ガアプの次は、あ、私をお願いねえ？ ふあ……」

怖いもの知らずなのかルシファアのサクランボをいじっているアスモデウスは甘い声で言った。

声が官能的なのは負けじとルシファーもアスモデウスのサクランボをこねくりまわしているからだ。さすが魔界の支配者は他の悪魔とは一味違うらしい。

「うん！ 先生が終わったらアーたんの背中を流すよ」

「はぁん…… タオルは使わなくていいわよ？ 手で洗ってね。背中じゃなくて前の方がいいわ」

「さすがデウス殿はぶれないな」

ペイモンが思わず感心してしまう。

「アルカの教育に悪影響が絶対に出てきますね。ボクはアルカに純粹な心を持ったまま大人になって欲しいです」

ネルガルは呆れている様子。しかしアスモデウスはもう何千年もあの状態がデフォルトなので諦めてもいる。

「でも何千年も生きててえ、人間に背中を流してもらう日が来るとは思わなかったわぁ」

アスタロトの言葉に近くにいたペイモンとネルガルは頷く。

「本当に不思議な子だ。人に対してこのような気持ちを抱くのは初めてだ」

ペイモンの言う感情とは好意。友情、愛情、親愛、友愛、そういった悪魔には似つかわしくないのであろう感情。それらをアルカに対して抱いている。

それはペイモンだけではない。ゴモリ を筆頭に召喚された者全てがそうだった感情を抱いている。

あのサタンでさえアルカには好意的だ。序列最下位なのにアルカの一番の友を自称するくらいなのでよっぽどだ。

三人が優しい表情でアルカを見てると突然ドボン、ドボンという音と共に水柱が二つ立った。何の前触れもなく突然にだ。

「……皆様方、どう思われます？」

「うーん、もしかしてまた召喚しちゃったのかな？」

「でもお私達クラスの力は感じられなかったけどお？」

三人は首を傾げた。

ガアの背を流し終えアスモデウスの番と言う時にそれは起こった。

「んん……ルシファア！ たら聖女みたいな顔してテクニシャンだから困るにやー。さあアルカ！ 私の番よ！ 揉んで転がしてこねて噛んで舐めて吸ってちょうだいな！」

「ふふ……アスモデウス、少し黙りましょうか？」

困惑しているアルカに静かに切れるゴモリ。当のアスモデウスは知らぬ顔して上気した表情でその淫らな体をアルカの前に曝け出していた。ここまでくるといっそ清々しい。

「えっと、タオルを使わないで……つくしゅん！ つくしゅん！」

可愛くくしゃみを二回したアルカ。そしてその刹那に音と共に上

がる二つの水柱。

「「「え?」「」」

ゴモリー、アスモデウス、ガープの声がはもった。

「何事ですか?」

音を聞きつけたルシファーも近くにやってきた。

「いててて……ここは?」

「あつい……です」

水柱の原因となったのはものは状況がイマイチ掴めていない様子  
できよるきよると辺りを見回している。

一人は十五歳前後と思われる少女。褐色の肌に灰色の髪。顔に道  
化師のようなフェイスペイントをしているのが特徴的だ。

そしてもう一人。いや、一人という表現が正しいのかは分からな  
い。

見た目の禍々しさだけで言えば魔法球内の悪魔達をぶつちぎりで  
凌駕している。見た目では生きているのか死んでいるのかさえ判断  
できない。

骨。全身が骨なのだ。

山羊の頭蓋骨に六本の腕。見た目だけで言うなら一番悪魔らしい  
姿をしていた。

「まさか……」

「くしゃみで……」

「召喚……?」



「さすがにこれには私も驚きました」

上からゴモリ、ガアプ、アスモデウス、ルシファールの言葉。四人はさすがにどん引きしていた。

「え？」

「え？」

未だに状況の読めない褐色の少女と骨の化け物はお互いの顔を見合わせて困惑していた。

「ふははははっ！ くしゃみで召喚だと？ さすがアルカのやる事は違うな！ 友として我も誇らしいぞ！」

大笑いするのはサタン。酒も回っているみたいで心底楽しそうだ。

「今回ばかりはオイラも驚いた。もう驚くの通り越して感心するわ」

バシンは若干あきれ顔だ。くしゃみで召喚など長い年月を生きている彼でさえ聞いた事がない。

「して、うぬらの名は何と申す？ こわがらんでもいい。別に農達は取って食うなどせんからの？」

ワイングラス片手のベルゼブブは嬉しそうな表情だ。アルカの奴

がまたやりおつたわ！ とわくわくしている。

くしゃみの拍子に召喚されたという非常に稀な体験をした二人は強張った表情で震えている。

二人はそこそこの力を持ったものだ。相手と自分の実力差が分かるくらいの力を持っている。

だからこそ生きた心地がしないのだ。

なんせ目の前にいるのは魔王クラスの力を持つ本物の化け物なのだから。同じ空気を吸うだけでも心臓が締め付けられるほどの緊張を覚えてしまう。

「見たところ魔族のようだけどよ？」

「アル力は悪魔憑きじゃなかったのか？ 悪魔と魔族は別物だろ？ 天使のくせにここにいる俺が言うのもアレだけど」

ベリアルとウリエルの言う通り、今回召喚されたのは魔族。悪魔ではない。

恐怖に勝てず震えている二人、見た目は全然違つが同じ魔族という種族に属するものだ。

浴場に落下してきた二人は周りにいる悪魔を認識すると面白いように震えだした。それが当然の反応ではあるのだが。

とりあえず浴場から出ると騒ぎを聞きつけた男悪魔も集まってきた。現在に至る。

二人は正座で地面に座りその周りを囲むように悪魔達が立っている状態だ。二度目になるが生きた心地がしないだろう。

その円から一歩踏み出すのはアル力。

震える二人の前に立つといつも同じように鈴のような声でお決

まりの言葉を紡ぐ。

「僕はアルカ・テオゲヘナ・エンテオフュシア。突然よんでしまつてごめんなさい。二人の名前を聞かせてくれたら嬉しいな」

アルカはこれまたいつもと変わらずキラキラと瞳を輝かせている。悪魔達はそんなアルカを優しげな眼で見守る。

からからに乾いた口を開け何とか声をしぼり出したのは褐色の少女。

「私はザジ。ザジ・レイニーデイ」

「ぼ、僕はモルボルグラン……」

半分事故のような形で召喚された二人はすぐにアルカお友達同盟に名を連ねる事になる。

## 魔族（後書き）

なんとこの小説はモルボルグラン氏がレギュラーキャラなのですよ。

あと、ザジは頻繁に喋りますのでご了承ください。

## 過去視と未来視（前書き）

タグの一部原作知識ありというのはこういつわけです。

## 過去視と未来視

「あはは！ 高い高い！」

「楽しいかいアルカ？」

「うん！」

アルカが大はしゃぎなのはいわゆる高い高いをしてもらっているからだ。

しかしその高さが尋常じゃない。伸縮自在な腕を持つモルボルグランによって持ちあげられているアルカは地上十メートルほどの所にいる。

「落としたり確実に殺されますね」

「洒落にならないから怖いよ……」

ぼそりとザジが呟きモルボルグランは骨なのに冷や汗をかく。

例に漏れずに突然召喚された二人もすっかりと打ち解けていた。

最初は魔王達の巣窟に迷い込んでしまいビビリ上がっていた二人だが、園の住人があまりにも気さく過ぎたために感覚がマヒしてしまっただろうだ。

まさかサタンとルシファーが笑顔でワインを勧めてくるなど夢にも思わないだろう。あまつさえルシファーは酌もしてくる。

他の悪魔達も全員が好意的で温かく迎えた。この園の中では上下関係など無く皆が平等の仲間なのだ。

本来ならこの大悪魔達とこういった友人のような関係になるなどありえない。

「ちょっと眠くなっちゃった」

「私がおぶります。ほら」

「ありがとう、ザジ」

はしやぎすぎたアルカは素直にザジにおぶされると直ぐに寝てしまった。

そんなアルカを見て頬が綻ぶザジとモルボルグラン。グランは頬肉など存在しないが。

ザジもグランもアルカの虜になっていた。

素直で可愛いところはもちろんのこと、何か人を引き付ける魅力を持っているアルカ。王族特有のカリスマ的なものなのかは分からないが、二人もまたアルカに何かしら惹かれていた。

「この後は座学だね」

「アルカは勉強好きみたいですから。それに教師役が凄まじい。ガブ様とバシン様に教えを乞えるなど普通はありえないですし」

二人が召喚されてからどれほどの時が経っただろう。

日が昇り、沈み、月が昇り、沈み。昼夜がある今の魔法球内だがそれは疑似的に作られたものであり実際は時間は停滞している。

だが仮に外と同じように一日を数えるならもう何年も一緒にいる事になる。

「知識だけで言うなら既にトップレベルですね」

「ゴモリ様の言う通り教師達が規格外すぎだからね」

引きつった顔をしている二人。

同時期に召喚された二人は随分と仲良くなった。魔王達の巣窟に放り込まれた一般人二人ということで強烈な仲間意識が芽生えたか

らだ。

「ガアプ様に一般知識や帝王学やその他もろもろを」

「バシン様に薬草学、宝石学、治癒魔法を」

二柱の知識をどんどん吸収しているアルカは知識だけでなら新旧世界のトップと言っていいだろう。伝えられていない知識や術をも直接教えられているのだから当然かもしれない。

魔王クラスの悪魔達が愛情を注ぎ育てているアルカ。伸び白はまだまだある。

「さて、今日はどんな勉強をするのかな？」

「今日はお二方以外も教壇に立つようです。いつもとはちょっと違った授業になるようですね」

「さて、今日の授業は私とアスタロト様が担当するよ」

「今日はあ、いつもとちょっと変わった授業よお」

教師モードとして眼鏡をかけているアモンとアスタロト。

いつもの座学とは違い今日は特別授業だ。

「はい！アモン先生、アスタロト先生！今日はどんな事を教えてください？」

「元気がいいですねアルカ。私とアスタロト様はちょっと特別な力を持っていてね」

「過去視と未来視っていうのよお。馬鹿な人間が欲しがれる力なんだ



けどねえ」

過去視と未来視。

過去視とは言わずもがな過去を視る。

他人の過去、自分の過去、場所の過去、物の過去、様々な物を視る。個人により見れるものは異なるが正確な過去を視る事ができる。そして未来視。

これも過去視同様のものを視る。

他人、自分、場所、物。しかし過去視と違うのは未来視は不確定だという事だ。

確定した未来など無い。未来とは流動的なものである。

「生まれつきそう言った力を持った人間も存在するわあ」

「まあ生まれつきそういう力を持つ人間は碌な人生を送れないことがほとんどだけだね。後天的に力を得るには私達のような高位悪魔やそれ同等の力を持った者と契約しないとイケない。もちろん契約の際にはそれ相応の代償を貰うけどね。だけどアルカの場合は別だよ？ これは単純に私達のえこひいきだからね？」

実際はえこひいきどころではない。

悪魔達とアルカは主従の関係ではない。一時的な契約関係でもない。友人だ。つまりは対等な関係である。

彼らは友人であるアルカだからこそ好意的に力を貸すのであってそれは他の人間ではこんな待遇絶対にありえない。

「じゃあさくつと力を与えるわよお。さ、頭をこっちに」

アルカの頭にポンと手を置き魔力を送る。ただそれだけ。至って簡単に作業は終わった。

「人によって視れるものや視る方法は異なるんだ」  
「予知夢だったりちよつとしたデジャヴだったりねえ。得られる情報も個人差が大きく出てくるわあ」

力を授けた二人は内心ワクワクしていた。

アルカは才能豊かだ。召喚に関しては決して他者の追随を許さず頭もいい。

保留する魔力は上の下くらい。魔力も十分に持っている。属性は闇と火。

闇は悪魔達をたやすく召喚する事から想像できる。火に関しては召喚された悪魔が火属性を持つものが多いことから推察できる。

ベリアル、ウリエル、アモン、ペイモン、バシンがそうだ。その中でもベリアルとウリエルは事、火に関しては最上の力を持つものだ。その力は火の上位精霊など足元にも及ばず炎帝でさえも遙かに凌駕する。

そんなアルカが育つていくのが何より嬉しいのだ。自分たちの手で一人の人間を育てていく事に悪魔たちは喜びを感じている。

「これで僕は過去視と未来視ができるようになったの？」

「あまり実感がありませんか？ でも確かに能力は備わったよ」

「もしもお夢という形で視るのなら今は視る事はできないけどねえ」

いまいち実感がわからないアルカ。しかし友人は確かにその力を授けたと言う。

過去と未来。

アルカにとって過去とは忘れてしまいたいものだ。

両親から迫害され大好きなお姉ちゃんを離れ離れになり最愛の妹に怯えられた。辛いものでしかない。

しかし未来は違う。

未来はこれから切り開くもの。きつと幸せな未来が待っているに  
違いない。

母や友人達に囲まれてずっとここで生きていくのだろうか？  
それとも外の世界に出ていくのだろうか？

「……国はどうなったんだろう？　そしてどうなっていくんだろう  
？」

ふと久しく忘れていた王子としての顔を覗かせる。過去、という  
言葉で国の事を思い出していた。

アルカにとつては既に過去だが彼はウエスペルタイア王国の第  
一王位継承権を持つ王子であった。追放された身とはいえやはり国  
や民の事は気になるらしい。

そして国の事を考えた時だ。ドサつという物音がして何もなかつ  
たはずの教壇に数冊の本が落ちてきた。

「……本？　まさか過去視か未来視が発動したのかしら？　書物に  
よる観測だつてありえなくはないけどお……こういった形は珍しい  
わねえ」

「これはマンガというやつですね。遙か極東の国で栄えていた文化  
の一つだつたはずですよ」

パラパラとページをめくり確認するアモン。

「だいぶデフォルメされて可愛らしい絵ですね」

「それが僕の力？　確かに今国の過去と未来の事を考えていたけど  
……」

まさか本が降ってくるとは思ってもみなかった。

「まあ私達は詳しくは確認しないわあ。アルカ、あなたがじっくりと確認なさいなあ」

「わかったよ」

アモンから手渡された本と教壇の上の本を確認する。

それぞれ異なる題名と複数の巻数がある。

どうやら過去を記した本と未来を記した本の二種類のシリーズがあるようだ。

「ええと、題名は……」

黒い表紙に白い文字で題名が書いてある。

マンガという物を読んだ事が無いアルカは内心ドキドキだ。

「『さらば愛しき赤き翼』と『魔法先生ネギま!』かあ」

題名の事は特に気にせずページをめくる。

そしてこの瞬間から本当の意味でアルカの人生が始まったのだ。

確定した過去。そして介入の余地のある未来を知ったアルカ。

アルカ・テオゲヘナ・エンテオフユシアの物語は今始った。

## 過去視と未来視（後書き）

次回辺り外の世界に脱出します。

## 決意と別れ（前書き）

ザジが魔帆良にいた理由はねつ造です。

## 決意と別れ

これはナギ・スプリングフィールドの物語。

アルビレオ・イマ、ゼクト、近衛詠春、ジャック・ラカン、ガトウ・カグラ・ヴァンデルバーグという頼もしい仲間を持ち戦局を逆転させるほどの活躍を魅せた。

ナギとその仲間達は赤き翼と呼ばれ連合では称えられ帝国では恐れられた。戦場の中で最も力を持った存在だったと言っていていいだろう。

そんな赤き翼は二人の協力者を得て戦争の黒幕である秘密結社完全なる世界に迫る。

協力者とはヘラスの第三皇女とウエスペルタティアの王女の二人。すなわちテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア皇女とアリカ・アナルキア・エンテオフュシア王女の二名。

そして迎える最終決戦。造物主と呼ばれる敵の親玉を倒したナギはついに魔法世界に平和をもたらした。……表向きは。

「な……んだ、これは」

冷や汗が止めどなく流れる。手の震えが止まらない。

しかし、世界を終わらせる魔法を止めた代償としてオスティアの大地は崩落しウエスペルタティア王国は滅びる。

アリカの苦悩は計り知れない。正に苦渋の選択だったが世界と自国を選べと言われれば世界を取るのが必然だろう。

難民をできるだけ救うための処置も取った。しかし、アリカは捉えられてしまう。それも戦争の黒幕に仕立て上げられて、王位を篡奪し国を滅ばした者として。

災厄の魔女とまで呼ばれて魔法世界ではタブー扱いだ。真に世界を救った者に対するあまりの仕打ちだ。

「なんだこれはっ！」

ついに叫び声を上げるアルカ。

アモンとアスタロトは突然の叫び声に驚きアルカに近づいてきた。

「ど、どうしたのですかアルカ？」

「そ、そうよおびつくりしちゃったわぁ」

今まで見た事ないアルカの様子に焦る二人。

年相応で可愛らしく素直でいつもにこにこ笑っている。それがアルカの印象。今の激昂して叫び声を上げる姿など見た事が無かった。

「アモン、アスタロト、過去視は確定した過去しか視れないと言ったよね？」

「ええそうよぉ」

「ならばこれが過去と言う事か！　アリカが、あの優しい子が全ての罪を擦り付けられて処刑される、これが既に確定した過去なのか！」

デフォルメされたキャラクター達だがその登場人物は実在するのだろうか。

知った名もいくつもある。その筆頭はアリカ・アナルキア・エンテオフユシア、最愛の妹とアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・



エンテオフユシア、かつて慕ったお姉ちゃんの二つ。

記されていたのはナギ・スプリングフィールド視点での物語。

戦場を駆け抜けついに終結させた英雄の物語。

仲間との日常や徐々にアリカに惹かれて行く様子などが丁寧に描写されている。

「……これが、既に、過去……」

国は滅び民は散り散りになり妹は災厄の魔女という濡れ衣を着せられた。これが既に過ぎ去った過去の出来事であるということに愕然とする。

呆然とした。しかし救いはある。

アリアは処刑寸前にナギとその仲間達に救出され、そしてナギと添い遂げている。

マンガはナギとアリカのツーショットの見開きで終わっていた。

傍目から見たら一応はハッピーエンドだろう。

しかし、アリカの名誉は回復されていない。完全なハッピーエンドとは言い難い。

「……一体どれほどの時間が流れたというんだ」

アルカとアリカは双子の兄妹だ。マンガの中のアリカは少女ではなく立派な女性として描かれていた。少なくとも外の世界では十年を超える歳月が流れている事となる。

それにヘラスとの戦争。アルカがまだ王宮にいた時は戦の気配など感じられなかったし帝国との関係も良好とは言い難かったが戦争をするほど険悪でも無かった。マンガに描かれている完全なる世界の暗躍が戦争の原因らしいが、マンガに描かれた事を全て信じるな

ら父王は完全なる世界の傀儡だ。父の影にそのような組織がいたなど気が付きもしなかった。

「み、みらい……未来は!? アリカは……お姉ちゃんは!?」

読んでいたマンガ『さらば愛しき赤き翼』を投げ捨てるとすぐさま『魔法先生ネギま!』と表紙に書かれたマンガを手に取り一心不乱に読み進める。

先ほどとは変わり主人公はナギの息子であるネギ・スプリングフィールドという少年だった。

イギリスのウェールズで従姉であるネカネ・スプリングフィールドと暮らしている小さな小さな男の子。五歳であるアルカよりまだ幼い。ネカネの事を姉同然に慕っているようだ。身近な肉親は今のところネカネ以外確認できていない。

姉と暮らしていると言っても姉は学生でたまの休みにしか家に帰ってこず実質一人暮らしのようなものだった。まだ五つにも満たない子供が……だ。

幼馴染に当たるアンナ・ユーリエウナ・ココロウア以外には友達もいないらしい。先ほど読んだマンガの登場人物である高畑・T・タカミチも成長した姿で描かれていた。どうやらネギを気にかけてくれているようだ。今のところ友達はこの二人以外登場していない。

(ナギの子供と言う事はアリカの子供と言う事か! ネギ・スプリングフィールド……この子が、僕の……甥)

妙な感動を覚えつつも読み進める。しかしマンガには残酷な現実が描かれていた。

(ナギが死んだ? 馬鹿な、あの飛びぬけた規格外が死ぬ? 病気

？ 事故？ …… わからない。アリカは…… アリカはどうなった？

ネギは両親がいない。父親である英雄ナギ・スプリングフィールドは既に故人とされており母親に至っては話題すら出てこない。

そしてネギに最大の不幸が訪れる。

悪魔の大群が村に押し寄せ村は壊滅。村人のことごとくが石化されてしまったのだ。

ネギが襲われる寸前に現れたナギによってネギは救われている。

しかし、このナギもどこかおかしい。普通の状態ではない。

死んではいなかったが…… 無事だというわけでもないようだった。

「こ……これは？」

顔が青ざめているのが自分でもわかる。

描かれているのは恐ろしく酷く悲しい未来。しかし、マンガにはまだまだ続きがある。

尋常ではない様子でマンガを読み進めるアルカを心配しているの間にか園の住人も集まってきた。

しかし誰一人として声をかけない。ただ静かにアルカを見守っていた。

魔法学校を飛び級、主席卒業し修行の一環として日本の麻帆良学園に教師として赴任するネギ。

個性的な生徒と共に麻帆良での生活をスタートさせる。

ネギが担任を務める2 - Aにはアルカが驚く人物が三人在籍していた。

神楽坂明日菜、ザジ・レイニーデイ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの三名だ。

(お姉ちゃんにザジ、それに闇の福音!?)

驚愕しながらも読み進める。ネギが歩む物語を。

桜通りの吸血鬼事件。

修学旅行。

悪魔の来襲。

学園祭。

そして魔法世界へ。

(アーウェルンクスはナギに倒されたはずじゃ? それに超鈴音…  
…本当にネギの子孫だとするとウェスペルティアの末裔という事  
か?)

マンガの最終ページは巻物から現れた人造霊のエヴァンジェリン  
がネギの顔を掴んだ所で終わっている。

(これが未来? いや、未来は不確定、変えられる。そうだ、まだ  
ネギの村が襲撃されたわけではないし、ナギだって無事なはず。変  
えられる……変えなければ!)

まだ見ぬ甥に情が移った。義理の弟も無事であってほしい。でき  
ることならば悲劇に襲われて欲しくない。

アルカの顔は無邪気な少年のそれではなく王子としてのもの。悪  
魔達はアルカの見た事のない表情に息をのむ。

「ザジ、旧世界の極東の国、日本の麻帆良学園に行く予定があつた  
りした?」

「!?!? ……世界樹の観測を目的に潜り込む予定はありました。でも何故それを？」

ザジがマンガに登場する訳が分かった。エヴァンジェリンが麻帆良にいた訳もマンガに書いてある。

(アスナお姉ちゃん……記憶を消されて……その方が良かったのかもしれないな)

マンガに登場するアスナ姫、いや、神楽坂明日菜は向日葵のような笑顔を浮かべていた。そう、笑顔で笑っていたのだ。

お姉ちゃんを笑わせたかった。笑顔を見たかった。……そのお姉ちゃんが辛い過去を全て忘れて一人の普通の女の子として笑っている。こんなに嬉しい事はない。

「……未来は変えられる」

未来の出来事を知ってしまったアルカは決意を固める。少しでも未来を良くするよう、悲劇を回避できるように。

「母さん……」

「何かしらアルカ」

今までとは顔つきの違うアルカを少し寂しそうにゴモリは見ている。アルカは愛する我が子同然、アルカの決意も悟ったらしい。

「僕、外の世界に行きたい。皆も力を貸して……」

「さて魔法陣はこれで良いですわ」

「我とルシファーが敷いた魔法陣だ。こんな事は二度と経験できんぞザジ、グラン」

魔法陣の上にはアルカとザジ、そしてグランが立っていた。

仮契約の魔法陣、三人は仮契約を結ぼうとしていた。アルカが主で残り二人が従者という形だ。

アルカの決意を聞いた悪魔達は寂しく思いながらもその意思を尊重した。

アルカの友人である悪魔達は大抵が魔王クラスの大悪魔だ。この魔法球内のような現実とは隔離された異界ならまだしも現実世界では長時間存在することが難しい。

本来なら完全召喚などほぼ不可能である連中だ、アルカの規格外な召喚を持ってしても長時間維持する事はできない。悪魔達が一堂に会しているのは常に魔力と活力を満たすこの魔法球内だからこそだ。

しかしザジとグランは違う。

二人は悪魔、精神生命体とは違い魔族、生身である。存在するだけで魔力を消費するわけでもない。

だからこそ二人だ。悪魔達は常にアルカの傍についてやることできない。だが二人は常にそばにいてやることができる。

我が子を心配したゴモリの提案に二人も頷きこっやって仮契約を結ぶこととなった。

ザジがアルカの従者……この時点で一つ未来を変えた事になる。

「ふふ……アルカのファーストキスは私ですか。光栄です」

「何だか恥ずかしいね」

「ああザジってばずるいわ。でも許してあげるわ友達だしね。でもファーストキスは譲ってもアルカの初めては譲らないから。アルカが男になつたら貰いに行くからまっててにゃー」

照れて笑うアルカとザジ。アスモデウスの事は黙殺した。

「それでは……」

「ん……」

ゆっくりと顔を二人の顔が近づいていき唇と唇が重なり合う。刹那に魔法陣が輝き仮契約の儀式が完了した。

「これで仮とはいえ主ですねアルカ」

「主従なんて形だけだよ。ザジは僕の大事な友達だ」

再び二人は笑い合い、次はグランと唇を、正確には骨だが……を重ね仮契約をする。

「これで貴君らは儂らの同盟でも特別枠じゃな。くれぐれもアルカを頼むぞ」

ベルゼブブの言葉に頷くザジとグラン。

「最後に確認だアルカよ。お前が現実世界に戻ったとして我らはそう簡単に手を貸す事ができぬ。我らの力は強大すぎるが故に現界すれば世界から制限をかけられる。お前の未来予知で出てきたヘルマンとかいう悪魔も本来の力はあの程度ではない。しかと心得よ、我がお前に与える事が出来るのはあくまで助言程度だ」

「召喚という形で私達を呼び出したのなら何らかの力を与えますが、

従属することは決してあり得ません。力で大悪魔を従える事ができたのはソロモン王ただ一人です。友人関係である私達でも直接手を下す事は無いと思ってください。子供の喧嘩に親が介入しないというのと同じですわ。少なくともここにいる大悪魔の一人でマンガに出てきた敵を一掃できるでしょう」

サタンとルシファーの話を聞く。もうこうして面と向かって話す機会は当分ないだろう。

「ボク達悪魔や天使は好き嫌いやえこひいきしたり知識や力、加護を与えたりするけどボク達自身が直接力を振るったりはしないんだ」  
「オイラ達が直接介入したらイエスの奴もジャンヌの嬢ちゃんも悲惨な最期を迎えたりとかせんやる？ 下位の奴らはともかく強い力を持った連中はそういった事ができんのよ」

ネルガルとバシンも言い聞かせるように話す。

「しかし会話や相談などは問題ないです。望めばいつでも話し相手くらいにはなれます。某らもアルカと話すのは楽しいですから」

「アルカ、このマンガの通りになるなら大変だろうがあんまり心配はするなよ？ お前の魂には俺様達の名と加護が刻んである。全ての悪魔はお前の味方だ」

「それは天使も同じだよ。俺の……ウリエルの加護を受けている人間に敵対する天使はまあいないだろうな」

「私達はいついかなる時でもあなたの味方よあ」

「ゴモリ 様だけではなくあなたは私達の息子でもあるのです」

「アモンの言う通りです。友人であると共に私達は家族なんですよ？」

「近親相姦って魅力的なフレーズだと思わない？」



ペイモン、ベリアル、ウリエル、アスタロト、アモン、ガアプも  
思い思いに優しく声をかける。アスモデウスは相変わらずだが。

「うん……ぐすっ……」

「ほらほら泣かないの、男の子でしょう?」

ゴモリは「初めて会ったときと同じようにアルカを抱きしめる。  
園の終わりは近い。」

「アルカ、私の自慢の息子。しばらくのお別れよ。でも心配しない  
で? 連絡はいつでもできるのだから。デウスから貰った指輪でね  
?」

「うん……アーたんから貰った指輪、絶対に大切にする」

アスモデウスは指輪を授けるとい話が伝承で見られる。

その伝承と同じようにアルカは指輪を授かった。色々機能が備  
わった魔王の指輪だ。この指輪を見ただけで並の悪魔はびり上  
がるだろう。

涙ぐんでしまったアルカの頭を優しく撫でながら慈母はザジとグ  
ランを見る。

「この子の母として、二人の友人としてお願いするわ。どうかこの  
子を支えてね」

「必ず」

「命に代えても」

ザジとグランは仮契約のカードを手に力強く頷いて見せた。

二人はA・O・D（アルカお友達同盟）の悪魔達とは皆友人だ。

この二人も全悪魔と天使と敵対する事は無いだろう。

「さて、そろそろ時間ね。何よりも代え難い大切な時間を過ごせたわ。それじゃあまたね、アルカ」

「うん、母さん。またね」

涙を流しながら笑顔を見せるアルカに満足したゴモリ。誰よりもアルカを想っている彼女は愛息子のおでこにキスすると名残惜しみながらも抱擁を止め距離を取る。

「さあ！ 我が友の角出だ！ 盛大に見送ろうではないか！」

サタンの声をきっかけにし皆魔力を開放しだした。神話級の大悪魔と熾天使の全力。ザジとグランは気絶してしまわないように歯を食いしばって耐えていた。

人型から角や翼が生え、いかにも悪魔という彼ら本来の姿を現していく。もちろんそんな姿にアルカが怯えるといった事態などは起こらない。

「アルカ、手を」

「しっかりと僕とザジの手を握ってるんだよ」

ザジとグランに手を握られたアルカはもう涙を流していなかった。決意に満ちた一人前の男の表情をしていた。

そんなアルカを見て悪魔達は嬉しそうに笑う。心配いらぬ、小さくとも愛すべき友人は既に一人前だと。

「体に気をつけるのよっ！」

「母さんも！ 皆もっ！ またねっ！ また会おうね！」

アルカが声を振り絞って叫んですぐに異界は悪魔達によって破壊

された。

「ふう……やっと一息ついたのじゃ」

ソファーに座りこみ酷く疲れた表情をしている女性の名はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。ヘラス帝国の第三皇女だ。

時刻は既に夜。かつたるい政務を終え自室で休もうとしている所だった。

「……しかしこうも公務続きでは息が詰まるのじゃ。……不謹慎じやがあの頃は楽しかったのう」

机の上の写真を眺めながら呟く。

あの頃とは今から約二十年前の戦争の最中赤き翼と行動を共にしていた頃の事だ。写真にはあの頃の仲間達が映っていた。即ちテオドラ以外にナギ、アル、詠春、ゼクト、ラカン、ガトウ、タカミチ、クルト、そしてアリカである。

「……のうアリカ？　そうは思わぬか？」

テオドラの手にはロケットペンダントがある。友人から託された彼女の宝物だ。

ロケットの写真には幼き頃のアリカとその兄が笑顔で映っている。

「今頃どこにおるのじゃろつな？　子を成したと聞いたが……一目見てみたいものじゃな」

寝巻に着替えロケットを宝石箱に入れようとした時に異変に気付いた。

「……なんじゃ？」

宝石箱の中の指輪がつつすらと光っているのだ。正確には指輪に取り付けられた真珠に似た宝石が光っている。

「これはアリカの……」

手に取り訝しげな表情で眺める。その指輪はロケットペンダントと共にアリカから託された大切なものだった。

「……これは！？」

宝石がひび割れそこからこの世のものとは思えない禍々しくそして膨大な魔力がこれでもかと溢れ出てきた。

思わず床へ落とした刹那に宝石が砕け部屋が白い光に包まれた。

溢れ出た魔力は暴風のように部屋のをなぎ倒していく。テオドラ自身は怪我はなかったが部屋は大変な有様に変貌していた。

「な、なにこ……と……」

瞑っていた目を開け指輪の方に眼をやるとテオドラは絶句した。

先ほどまで部屋にいなかった人間がいる。それも三人もだ。

一人は褐色の少女。乱れた服装で地にふせて気絶している。

もう一人は全身が骨である魔族。同じように気絶しているようだ。

そしてもう一人。テオドラが良く見慣れた人物がそこにいた。

「うそ……じゃろ？」

驚愕と共にふと昔の事が脳裏によみがえった。

『そう暗い顔をするな二人とも。厳密に言つと、兄上は死んでいない』

『そうじゃな……この戦争が終わりゆっくりとした時間が出来れば、兄上を助け出す方法を探してみるか……うん、必ず助け出す』

それは誰の言葉であつたか。

「まさか……本当に!？」

柔らかそうな金色の髪に子供らしく可愛らしい顔立ち。そして何より目を引くアメジストの瞳。

そして決定的だったのはその子供の服の胸にある刺繍。ただのワンピースポイントではないそれは大きな意味を持つ。それは今は滅んだある王国の紋章だった。

「ウエスペルタティア王家の家紋……!」

見間違える事など無い。一体何度写真を眺めてきた? 間違えない。間違いが無い。信じられないが認めなくてはならない。

目の前にいる。死んだと聞かされてきた。だが友人は死んではいないとアリカ言っていた。どうやら友の言葉に偽りはなかったらしい。

「アルカ・テオゲヘナ・エンテオフユシア……！」

公式記録では五歳で病死したウエスペルタイアの王子。写真と変わらぬ姿をした友人の最愛の兄が目の前に呆然と立ち尽くしていた。

## 決意と別れ（後書き）

アルカの原作介入開始です。

そして従者のザジはともかくモルボルグランですよ。

彼がメインキャラなSSは見たことがないです。

彼、結構強いはずなんですけどね。

## 設定 A・O・D（前書き）

アルカお友達同盟の人物設定です。

今後増える予定がありますので、その都度追加修正していきたいと思います。

悪魔の地位や能力は独自設定の所がございます。ご了承ください。



## 設定 A・O・D

序列第一位 ゴモリ。

ソロモン七十二柱の二柱で序列は五十六位。地位は公爵。

召喚者の恋愛相談を受けつけ占星術を用いて恋愛を成就させたり、他には召喚者の未来を占ったり隠された黄金の在りかを教えたりする。

性別は女。一人称は『私』でアルカの母親役。悪魔にも関わらず穏やかで優しい性格である。

身長は160センチ程度。腰の辺りまである赤く長い髪と雪のように白い肌が特徴。

アルカを息子同然に可愛がる。アルカが一番懐いている悪魔でもある。

序列第二位 アスモデウス。

ソロモン七十二柱の二柱で序列は三十六位。七つの大罪である色欲を司る魔王。

召喚者の質問に答え様々な効果を持つ指環を与え、また透明になる秘術を授けたりする膨大な知識を持つ悪魔である。

性別は女。一人称は『あたし』でアルカを色んな意味で溺愛している。自称魔界一の淑女。他の追隨を許さない飛びぬけた変態でもあり万年発情しているこまったちゃん。

アルカにアーたんと呼ばれるたびにビクンビクンしているどうしようにも無い人。頻繁にパンツを新しいものに履き替える。

身長は142センチ程度。紫陽花色の髪は肩にかかる程度の長さ。時々ちらりと見える八重歯が可愛らしいが、ロリにあるまじき超絶なプロポーションを誇る。簡単に言つとエロい。

序列第三位 アモン。

ソロモン七十二柱の一柱で序列は七位。地位は大侯爵。  
炎の侯爵とも呼ばれる強力な悪魔で未来と過去を透視する能力がある。

得意な事はトラブルの仲裁という変わった悪魔で、他にも詩の才能があつたりと文武両道を地で行く人。

性別は男。一人称は『私』でアルカの初めての同姓の友人である。身長は175センチ程度。黒髪の短髪に黒い瞳と見た目は日本人っぽい。

#### 序列第四位 ベリアル。

ソロモン七十二柱の一柱で序列は六十八位。七つの大罪の一つである傲慢を司る魔王。

火の付いた戦車に乗り現れるという。墮天使であり墮天する前は熾天使という最高位の地位にいた。

ソドムとゴモラを墮落させ結果的に滅ぼした張本人。悪魔の中の悪魔と言える凄い人。

性別は男。一人称は『俺様』でアルカの事をアルカ坊やと呼び可愛がる。

赤銅色の短髪に髭を蓄えた漢らしい姿をしている。身長は195センチ程度。

神が火を用いて最初に創造した天使が彼である。火という属性の頂点にいるであろう悪魔である。

#### 序列第五位 バシン。

ソロモン七十二柱の一柱で序列は十八位。地位は大公爵。  
薬草や宝石の効力を知り、炎の区画に住んでいるため炎に極めて

高い耐性がある。ルシファアの側近でもある。

性別は男。一人称は『オイラ』でアルカの教師役の一人。先生と呼ばれる事を顔に出してうれしがる。

身長は158センチ程度。髪の色は緑で襟足が長い。見た目は少

し眠たそうな眼をしている少年である。

序列第六位 ガアプ。

ソロモン七十二柱の二柱で序列三十三位。魔界の西を支配する王の一人である。地位は魔王。

哲学や教養の知識を与え愛憎を司る力を持つ。また召喚者である場所から別の場所へ瞬間移動させる能力を持つ。

性別は女。一人称は『私』でアルカの教師役の一人。先生と呼ばれる事を顔に出さずにうれしがる。

いつもは黒いローブを纏っており顔はおるか性別すら分からない。身長は162センチ程度。胸は控え目。素顔は薄緑色のショートカットに黒い瞳に泣き黒子があるどこか儂い印象を受ける美人さん。

序列第七位 ベルゼブブ。

七つの大罪の一つ暴食を司る魔王。

魔界のナンバー2で抜群の知名度を誇る。蠅の王、魔女を支配する悪魔とも呼ばれる。かつて悪魔に堕とされる前はイスラエル周辺の多くの国で信仰される神であったため神性も持ち合わせている規格外。

性別は男。一人称は『僕』でアルカの成長を内心誰よりも楽しみにしている壮年の紳士。

身長は180センチ程度。髪の色は青紫で長さは背中に届くくらい。しかもサラサラの艶々。右目にモノクルを付けている。

序列第八位 ペイモン。

ソロモン七十二柱の二柱で序列は九位。魔界の西を支配する王の一人で地位は魔王。

粉碎、暴走、破滅を司るぶっそうな人。ルシファアの側近の一人でもある。

悪魔に堕ちる前は火を司る精霊たちの王だった。

性別は女。一人称は『某』でかなり真面目な人。しかし可愛いものが大好きという乙女な一面も持っているが、それを知っているのはごくわずか。最近の悩みはアルカが可愛すぎて辛い事。

生真面目な性格ゆえ直接的なスキンシップができずにもやもやしている。できる事ならアスモデウスのように迫って最終的には美味しく頂いてしまいたいとも思っている。実はアスモデウスに次ぐ危険人物。

身長は158センチ程度。紺色の髪をポニーテールにしている。いつも腰に剣をぶら下げているが滅多に抜く事は無い。

序列第九位 ネルガル。

ベルゼブブの部下で魔界の警察署長を務める。地位は魔王。

悪魔に墮とされる前は太陽と放畜、そして病気を司る神だった。

ベルゼブブ同様神性を持っている規格外。

性別は女。一人称は『ボク』でアルカの事を息子というよりは弟のように可愛がる。

身長は130センチ程度。足首までに届くほどの長い銀髪に髪同様の銀色の瞳が特徴的なロリッ子。

序列第十位 アスタロト。

ソロモン七十二柱の一柱で序列は二十九位。七つの大罪の一つである怠惰を司る。また魔界の西を支配する実力者でもある。地位は魔王。

未来や過去を見通し、教養学を授けると言われている。

悪魔に墮とされる前はイシュタルという名の豊穡を司る女神だった。そのため神性も持ち合わせている。

性別は女。一人称は『私』で常に気だるそうに振舞い語尾を伸ばしだるそうに喋る。

髪は黄金色で瞳は赤。抜群のプロポーションの悩ましい体つきをしている。簡単に言うところのヒロイ。

アルカにはゴモリ 同様母親のように愛情を注いでいる。今のところは食べようなどとは考えていない。

身長は160センチ程度。イシユタル時代に性愛や戦いの神として信仰されていた。そして自らを『慈愛豊かな娼婦』と呼ぶなどに奔放な人。アスモデウスとの相性が抜群にいい。

序列第十一位 ルシファー。

明けの明星。あまりにも有名な墮天使。魔界の支配者の一人で地位は大魔王。

その光は魔界に堕ちても陰る事なく魔界の住人達を導いている。その力は他の悪魔達と比べて頭一つ抜けている。皆から尊敬され慕われている指導者である。

性別は女。一人称は『私』で常に丁寧語でしゃべり語尾に〜ですわと付けたりお嬢様っぽい。切れると口調が荒荒しくなり非常に怖い。

サタンは同僚、他の悪魔は全て部下であったためアルカが初めての友達である。

身長は150センチ程度。柔らかく艶やかな金髪は腰までの長さで瞳の色はエメラルドグリーン。人形のような愛らしい外見をしている。

初めてできた小さく儂げでそして愛らしい友人の事を心から慕っている。

序列第十二位 ウリエル。

神の火を意味する名を持つ炎を司る熾天使である。その他にも破壊天使、四大大天使の一柱と様々な地位と実力を持つ天使だ。

しかしヴァチカンによって一時期墮天使扱いされていた。が、その信仰は衰えず結局は免罪されるのだが天使として復権しておらず厳密には聖人あつかいである。

性別は男。一人称は『俺』でアルカの事を良き友人だと思慕っ

ている。

身長は180センチ程度。腰に剣をぶら下げているが滅多なことがないと抜かない。目つきが鋭く怖い人と思われる事が悩み。

序列第十三位 サタン。

黙示録の赤き竜。悪魔の代名詞。泣く子ももつと泣く魔界の支配者の一人。地位は大魔王。

圧倒的なカリスマを持ち悪魔達を導く指導者。これでいて結構気さくな性格だから人気は衰えない。

怖いもの知らずで熾天使だろうが神だろうが知ったこつちやねえと敵対行動をした者らに喧嘩をしかける。そんな彼が唯一怖いのが切れたルシファーである。

性別は男。一人称は『我』で常に偉そうに話す。

ルシファー同様、初めてできた友人であるアルカを心から好いている。アルカの一番の友を自称しているくらいだから友達ができた事がかなり嬉しかったらしい。率先して自分とアルカは対等の友人だと言いまわっているちよつとかわいいところもある。

身長は175センチ程度。灼熱色の燃えるような紅い髪は肩よりちよつと長いくらい。金色と銀色のアメジストの瞳に口から覗く犬歯が特徴的。

序列第十四位 モルボルグラン。

魔界出身の魔族。全身が骨で顔は山羊に似ていて腕が六本ある。

アルカのくしゃみで召喚された。周りにいた大悪魔達にビビり上がるがすぐに感覚がマヒしたのか打ち解けてしまった。

同盟の悪魔全員から友人扱いされている一般魔族にしては破格な存在。

ゴモリ を初め悪魔達の懇願を受け、また自らの意思もありアルカと仮契約を結ぶ。

アルカに対しては友人兼守るべき主として騎士のようにふるまっ

ている。

魔法球脱出時点での強さは原作基準。

術式兵装疾風迅雷のネギが強敵と言い、瞬殺されたチコ　タン達とは違い多少は戦えていた事と雷の投擲ぶつさされてもまだまだ余裕そうだった事からラカン表で言う強さ1500〜2000程度の強さと予想し、当小説では彼の強さはそのくらいだと考えて下さい。普通に強いなモルボルグラン。

序列第十五位　ザジ・レイニーデイ。

魔界出身の魔族。モルボルグランと同様に呼び出され同様に従者となる。

アルカの事は弟のように思っていて彼女にとって保護対象。母性も芽生え始めてきて結構充実した毎日を送っている。

身長やスリーサイズは原作基準。ただ原作より割と多く喋る。

実力に関しては良く分からない。

ポヨ姉さんはラスボスくらいには偉いらしいから妹であるザジも同様に偉いのだと思う。でも、偉いのと強いのは≠ではない。

ポヨ姉さんは魔眼全開のマナと互角に戦っていた。強さは刹那>楓>マナ>くーふえ。羽根刹那を考慮しての順位だから当然魔眼マナも考慮しているのだと思う。

特殊な武器の補正があるにはあるのだけどそんなマナと互角なポヨ姉さんは強いのか？　アーティファクトは最強クラスだろうけど、ザジをそんなポヨ姉さんと同スペックと考えてみる。

結論は良くわかんない。

ラカン表で言う所のモルボルグランと同じくらいの強さかそれ以下の可能性も出てきた。大体1100以上2800以下くらいだろうか？　高位魔法使いが300だからそれでも破格の強さ。

とりあえずザジの強さはポヨ姉さんと同じ、あのラスボスっぽいスタンドを入れて強さ2000程度とします。十分強いんですけど一部インフレしてるせいで弱く見える不思議。

#### 序列第十六位 マルコシアス

事、広域殲滅において魔界最強である戦士。地位は侯爵。

元々ゴモリーの騎獣であった。そのためゴモリーに対し絶対の忠誠を誓っている忠義の人。

ゴモリーは主であると共に姉であり、母でもある。ゴモリーに害成す者はとりあえずぶつ殺す主義で敵対するととんでもなくやっかい。

性別は女。一人称は『おれ』。背中には大きな二枚の羽根、尻尾は蛇になっている。

アルカのこととは魔界に還ったゴモリーやその他同盟員から聞いており、いつ呼ばれるかワクワクしていた。アルカのこととは弟のように、息子の用に可愛がる。アルカ最強の術式完成の手伝いをしたのはマルコシアスのみ。そして完成させた魔法は手放して絶賛した。

身長は167センチ程度。腰まで届く長い髪は灰色。瞳の色は金色。犬耳が特徴的で可愛い。

#### 序列第十七位 マステマ

敵意の天使と称される異端な天使。時には墮天使扱いされることもある。

悪魔や悪霊達を配下に持ち、神公認で悪魔的行為を行うという天使で、やっていることは悪魔と変わらない。人に対し試練を与えるという役目を負っている。が、それは悪魔も同じ事である。

部下が脳筋ばかりなのが悩みのタネ。だからイヴが眷属に加わり本当に心から喜んだ。

アルカのことは天界に還ったウリエルが天界中に広めたので知っ



ていた。そして召喚されてからは例に漏れずアルカと好意的に接する。アルカのことは息子や弟ではなく、対等な友人と思っている。

性別は女で一人称は『あたい』。身長は163センチ程度。ピンクブロンドの髪で、髪型はドラクエ5のピアンカ。瞳の色は魔性を感じさせる深紅。

設定 A・O・D (後書き)

あらためて友達がチートすぎる。

## 計画頓挫（前書き）

本格的な原作介入はまだまだ先なんです。

## 計画頓挫

目に飛び込んできたのは美しい女性だった。

褐色の肌に金色の髪、立派な二本の角があることから亜人である事がわかる。

驚きの表情でこちらを見てきているがそれはこちらも同じ。

目の前の女性に心当たりがあった。マンガではだいぶデフォルメされていたがどこか似ている、面影がある。

マンガでは小さな少女だったが、既に立派な女性に成長していた。もう休む所だったのだろう、ネグリジェ姿という官能的な姿をしているその女性は驚きに満ちた表情でアルカの名を言った。

「僕の名前を知っているのはともかく、僕を見てその名を呼ぶあなたは……テオドラ皇女殿下で間違いないですか？」

「そっ、そうじゃ確かに妾がテオドラで間違いないのじゃ。しかし何故妾の名を……」

「やっぱり……美しく成長なされたようですね」

「美しく……っ！」

小さく笑うとアルカは礼を取る。その礼にテオドラは息をのんだ。綺麗な完璧な礼だったのだ。名ばかりの貴族では到底できないような綺麗な完成された美しい礼。

正に王者の品格漂うものだった。皇女であるテオドラでさえ滅多にお目にかかれるものではない。アルカのような子供がこのような礼を取るなど夢にも思わなかった。

もちろん実の両親ではなく友人たる悪魔達の教育の賜物だ。

「お初にお目にかかります。僕はアルカ・テオゲヘナ・エンテオフユシアと申します」

「やはり……」

テオドラのは困惑していた。

予想通り目の前の少年はアルカ、病死したはずのウェスペルタテ  
イアの王子らしい。

一緒に現れ気絶している二人の事も気になるが今はアルカだ。ど  
うして今になって現れたのか。どうして子供の姿なのか……疑問は  
尽きない。

「そ、そなたがアルカ王子……しかし、何故……」

「詳しい話は後ほど。テオドラ皇女殿下、申し訳ないですが今日が  
何年の何月何日なのか教えていただきたいのですが……」

「わ、分かった。今日はじゃな……」

テオドラの口から出た言葉に絶望する。

「う……そ？」

冷や汗が流れる。視界が滲む。

一歩目から盛大に躓いた。予想していなかった。まだまだ未来の  
話だと思い込んでいた。

魔法球内の時間の流れは外とは違う。その事は分かっていたはず  
なのに予想できなかった、考えてもみなかった。

まさか脱出する際に現実世界とこれほどまでに時間の開きが起こ  
るとは。

未来視で見たマンガの一部が既に過ぎ去っている。過ぎ去ってし  
まっていた。

「馬鹿なっ！ 旧世界の西暦で二千年！？ 大戦が終わって二十年  
近く経っているだっ！」

突然声を荒げるアルカにテオドラはおどおどするばかり。そしてアルカの叫び声でザジとグランは目を覚ました。

「遅いつ！ 遅すぎたっ！ 助けられなかった！ ネギの村も既に襲われた後だ……ネギは、せめてネギだけは救えると思っていたのに……」

膝をつき涙を流しながら悔やむ。

「ア、アルカ……！？」

「ど、どうしたんだい！？」

目覚めた二人は嘆いているアルカを見て驚く。

こんなに感情を荒げているアルカを見るのは初めてだった。慌てて起き上がった二人はテオドラと一緒におどおどしてしまう。正直テンパっていた。

「許してくれネギ……ナギ……アリカ……。何もしてやれなかったお兄ちゃんを許してくれ……。優しいお前の名誉を回復させる事も出来ない！ 何一つお前にしてやれない……！」

「なっ……！？ お主、何があつたか知って……」

ただただ泣き続けるアルカを見てテオドラの視界も滲んできた。

「……っ！ す、すまぬ……」

ついに堪えきれず涙を流すテオドラ。アルカの小さな体を抱きしめて己の後悔を吐露する。長年にわたる後悔、無力であった自分が情けなく、悔しく、嘆く。

「許してくれ……妾はアリカとは友人じゃった！　しかし妾はアリカに何もしてやれなんだ……！　許してくれ……」

震えながらテオドラは許しを乞う。

二人は抱き合って泣きだしてしまった。

ザジとグランは大体の状況を理解し始めていた。

この二人はアルカのマンガを読んでいる。アルカと同じように過去と未来の知識があるのだ。

当然テオドラ第三皇女の名と大体の容姿は理解していた。

そして目の前の女性はどうかやらテオドラ本人らしい。

マンガに登場していたテオドラはまだ少女と呼べる小さな女の子だった。しかしだ、今現在のテオドラはおよそ小さな女の事は呼べないほど大人になっている。つまり、少女が女性に成長するほどの時間が過ぎ去っているのだ。

「そんな……」

「僕たちは間に合わなかったのか……！？」

アルカの目的は大きく三つ。

アリカとナギを探す事、ネギの村を守る事、親族としてネギの傍にいる事。

時間の差異。人の力には到底抗えない時間という物によって阻まれた。

状況を理解し、二人も呆然としてしまう。

アルカは大切な友人にして仮の主。弟とも息子とも言える大切な家族だ。

そのアルカの家族であるアリカ、ナギ、ネギはザジとグランにとっても大切な存在に他ならない。

「旧世界の西暦で二千年か……ネギ君が麻帆良に赴任するまで三年しかない」

「……私はあと一年で麻帆良に潜入しないと……。時間が、無い」

抱き合って泣きじゃくるアルカとテオドラ。そして立ち尽くすザジとグラン。

そんな混沌とした状況は騒ぎを聞きつけた侍女達と近衛兵達が部屋にやってくるまで続いた。

豪華な扉を開けるとそこは謁見の間。

立派な玉座に腰掛けているのはヘラス帝国皇帝である。

扉を開け間に入ったのは一人の大男。

名をジャック・ラカン。先の大戦で活躍した赤き翼の一員でありサウザンドマスターと肩を並べる最強の傭兵たる大英雄だ。

表舞台には立たずに隠居生活をしていた彼がこうして皇居に向いたのは訳がある。

旧知の仲であるテオドラから緊急招集を受けたからだ。いつもおちゃらけている彼だが真面目な時とそうではない時の区別は意外な事にしつかりとする。

そんな彼が今回の事はただ事ではないと感じ取っていた。今まで何度か顔を見せると言われてきて無視してきた。それは皇女ではなく友人であるテオドラ個人の要請だったためだ。

しかし今回は違う。皇帝の側近であるそれなりに大物が彼の元に現れ皇帝と第三皇女の署名がされている封書と認識疎外の眼鏡を添えて持ってきたのだ。今までにない対応で事の深刻さを悟ったラカンは重い腰を上げて単身帝都まで赴いたのだった。



「よく来たジャック・ラカンよ。遠路はるばる御苦労であったな」  
「じゃじゃ馬姫だけの名前だったら無視してたがな。しかし皇帝の要請とあつちやあ俺だつて軽々しくできないさ。んで、一体何が起こつたんだ？」

皇帝に対しかなり軽々しい口調だが皇帝はそれを咎めたりしない。ただ要請通りラカンが姿を現した事にほつとしていた。

「相変わらず無礼な奴じゃなジャック。しかしよく来てくれたのじや」

「おう久しぶりじゃねえかじゃじゃ馬姫よ。そいつは新しい護衛か何かか？ 随分いかした奴じゃねえか」

グランを従え謁見の間に入ってきたテオドラは呆れた声を出した。

「妾の護衛ではない。この者は妾の友人じゃ」  
「へえ友人だつて？」

グランは軽く頭を下げる。

ラカンの強さはマンガで十分に理解していたつもりだがやはり実物は違う、想像以上だ。

ただ突っ立っているだけでも微塵の隙も窺えない。決して弱くはないグランだが、目の前の人物の強さに内心冷や汗をかく。

「初めましてジャック・ラカン殿。僕の名はモルボルグラン。以後よろしく願います」

「おうおう堅苦しいな。皇女の友人たあ珍しい。魔族でも相当なお偉いさんか何かか？」

「いえ、僕はただの平民魔族ですよ」

「そうじゃな、お偉いさんはこのグランの主に当たる人物じゃ。しばし待て、彼はすぐにやってくる」

怪訝そうな顔をするラカンだがすぐにその表情は驚愕に変わる。

「来たようであるな。かか、似合っておるではないか。職人たちに急ぎ作らせたかいがあったものよ」

皇帝の声を聞きラカンが振り返るとそこには二人の人間が立っていた。

メイド服を着た褐色の肌の少女。何故かフェイスペイントをしているがまあそれはいい。問題はもう一人の方だ。

まだ小さな少年だ。幼児と言っても間違いないだろう。

しかしこの漂う品格はどういう事か。そしてその容姿だ。ラカンのよく知る人物を連想させた。

金色の髪、アメジストの瞳、整った顔立ち。

そしてその服装だ。豪華で威厳のあるもの。その服は王族の正装に他ならない。

だがそれはヘラス帝国の正装ではない。それは今は滅んでしまったある王国の王族が公式の場で纏う正装であった。

決定的なのは胸元とマントに刻まれた紋章。

「ウエスペルタティアの家紋……！」

さすがのラカンも動揺を隠せない。

様々な仮説を頭の中で巡らせるが答えには辿りつかない。

「お初にお目にかかりますジャック・ラカン殿」

アルカが口を開き隣に控えているザジが一礼する。

「妹が大変世話になった。そなたに深く感謝を」

アルカの言葉にラカンは目を見開き驚いた。

## 計画頓挫（後書き）

ネギを襲撃から救ったのならネギがマギア・エレベアを習得できないという不都合が。

許せネギ君。

## 選ぶ道

「……なるほどなこいつは笑えねえな」

ラカンは読んでいた本を閉じて深く目を瞑り考え込んだ。

場所は先ほどの謁見の間ではなくダイオラ魔法球内。

魔法球内にいるのは先ほど謁見の間にいたメンバー全員だ。皇帝、テオドラ、ラカンの三人は同じような表情で考え込んでいる。原因は先ほどラカンが読んでいた本、即ち『魔法先生ネギま!』である。

「確かに大戦は丸きりこのマンガの通りだった。なら未来も同じと考えた方がいいか……」

「そして残念な知らせじゃがアリカとナギの息子、ネギの村が襲撃されたのも事実じゃ。妾と父上で確認を取った。ネギ本人はメルディナ魔法学校に在籍しておる」

アルカのマンガは三人に衝撃をもたらしした。

その中でも『ネギま!』に登場している少年に衝撃を受けた。しかも悪い意味での……だ。

「フェイト……アーウェルンクスか。こりゃあちよいとヤバいな」

「うむ、完全なる世界の残党はまだ生き残っていたというわけだ。

ラカンよ、事態の深刻さがわかったか？」

「嫌というほどにな。アーウェルンクスの野郎は俺やナギと並ぶ力を持っているしな。奴らが行動しているという事は目的は二十年前と同じだろうよ。そして、皇帝よあんたはどうするんだ？」

「どうするもこうするも無いわ。正しく魔法世界の危機だ。奴らに気づかれぬように行動しなければならん」

完全なる世界はまだ滅んでいない。

まだ先の話になるが世界をつなぐゲートを壊すなどよからぬ事を考えている……先の戦争ほどではないだろうが世界が混乱するのは目に見えている。民を預かる者としてそのような事は見逃せない。

「そしてアルカよ、お前はとうしたんだ？ 俺でよければ力になるぜ？ どうやら俺はネギの野郎の息子の師匠になるみたいだしな」  
「妾も力になるのじゃ。何でも申してみよ」  
「表立つての協力はできんが帝国も貴殿の力になる事を約束しよう。それがアリカ女王への恩返しでもあり罪滅ぼしでもある」

テーブルについているラカンら三人は椅子に座らずに立って三人を見ていたアルカに問う。

アルカの計画は大幅に狂った。

そして計画の変更を余儀なくされた。そしてザジとグランと良く話し合って決めた事がある。その為に協力してもらおう心算でいた。

「ネギの傍についてやろうと思います。麻帆良に潜り込み……できればザジと同じくネギのクラスに入りたいと思います。皇帝陛下とテオドラ様にはその口添えをお願いしたく」

「心得たが貴殿の年齢では中学生にはほど遠い……そうか、魔法球内で過ごすか」

皇帝は一人で納得していた。

「そして力をつけたい。友人たちに知識は与えられましたけど戦闘技術や体力は無い。今僕ができるのはこの程度……」

そう言い右手と左手を近づけ……大気を振るわせるほどの風圧と共にアルカの魔力が大きく膨れ上がった。

「そいつぁ咸卦法じゃねえか！ 一体どこで……」

ラカンが驚くのも無理は無い。咸卦法は超難度の極技、五歳の子供が易々と使えるものでは決してない。

「僕の過去は先ほど話しましたよね？ これはお姉ちゃん……アスナ姫に教えてもらいました。できるまでに二年かかりましたが」「なるほど……確かに姫さんは使えていたな。しかしその年で使えるとは……」

「でも今のままじゃ咸卦法を使いこなせない。だからラカン殿には僕を鍛えてほしい。できる事ならグランも」

「よし、わかった。アリカには大きな借りがあるしな。いいぜ、人に教えるのは得意じゃないがやってみるとしよう。どうやら見所があるみたいだしな」

ラカンは承諾する。

だがアルカの要望はこれだけではない。

「ジャックよ……封書に書いてあったものはちゃんと持ってきたか？」

「あん？ 持ってきたぞ。エヴァンジェリンの巻物だろ？ ……おいおいまさか！？」

「そうです、マンガに出てきた闇の魔法。あれを習得したい」

これにはラカンは反対した。危険すぎると。

「マンガの中で俺はナギの息子に勧めているが、これは洒落にならねえものだぞ？ 冗談抜きで死ぬ可能性がある。闇に適性があれば話は変わってくるだろうが……」

「妾も父上も何度も反対したのじゃ。しかしアルカは聞く耳持たぬ。頑固なところは兄妹そっくりなのじゃ……困った事にの」

テオドラと皇帝はため息を吐いた。

「皆様方、アルカは闇に適性があります。いえ、アルカ以上に闇に適性がある人間などいないでしょう」

「うん、そこらへんの事は僕らの友人に話をしてもらおうと思っ  
ているんだ。魔法球内は外より魔力が多いから問題なく喚べると思  
います」

「友達？ 話に出てきた悪魔か」

ザジとグランの言葉にラカンは考え込む。

アルカは封印されるまで、そして封印されてからの経緯を三人に話している。そして三人は悪魔憑きという偏見でアルカを見るほど器の小さな人間ではなかった。

「悪魔憑き……確かに闇に属性がありそうだが……」

「じゃあ召喚します。もしもし？ 僕だよ……うん、アルカ」

アルカはアスモデウスから貰った指輪に話しかける。指輪越しの通信を見守るラカン達だが……すぐに度肝を抜かれる事になる。

アルカはミスを犯した。ザジもグランもそのミスに気がつかなか  
った。

アルカは友人の悪魔と言い名前を出さなかったのだ。そのちよっ  
としたミスでラカンは死ぬ思いをしてしまう。

「今から友人が来ます」

そのアルカの言葉と共に空間が罅割れ隙間から魔力が漏れだす。



その魔力を敏感に感じ取りラカンは震えあがる。

戦闘者ではないテオドラと皇帝はあまりの実力の違いからその魔力を知覚できないでいた。

だが世界最高峰の強さを誇るラカンは違う。

(なんだこの魔力は！？ やべえ……やべえつてもんじゃねえぞおい！)

冷や汗がたらたらと流れ膝が笑う。

そんなラカンの様子にテオドラと皇帝が首を傾げた。

そして空間が砕け一人の悪魔が姿を現した。

アルカとザジ、グランの友人である一柱。序列十三位の魔界の支配者。

「思ったよりも早い再開であったな友よ。済まぬな、ゴモリは政務で手が離せなかった故に我が赴いた。母に会いたかったであろう？」

「うっん！ 来てくれてありがとうサタン！」

今まで見せていた真剣な表情とうってかわって年相応の笑顔を見せて喜ぶアルカ。

(あ、死んだわこれ)

後にラカンは語る。

勝てねえと思った事はあるが、見た瞬間に死んだと思ったのはあれが初めてだったと。

サタンはラカン達と同じテーブルに付き優雅にコーヒーを飲んでいた。

同じテーブルのラカン、テオドラ、皇帝は生きた心地がしないでいた。緊張とか色々と通り越して感覚がマヒしている。召喚された当初のザジヤグランと同じ症状だ。

「さて、先ほど説明したとおりだ。アルカの魂には我らの名と加護がある故に飲み込まれ死ぬ事はないだろう。上手く適合してものにするか、といえばまた別だろうがな。最悪命を落としてもその時は人としての生が終わるだけよ。アルカの魂は死後昇華し我ら悪魔の末席に名を連ねる事になる」

「え？ そうなの？」

アルカはサタンの膝の上に乗リミルクを飲んでいた。  
ちなみにサタンの話の後半部分はアルカは初耳だった。

「あ、ああ問題ない事はわかった」

「くくつ何を怯えておるのだ人間よ。貴様は先の大戦の英雄であるう？ その実力は我も認めてやる。そうさな、伯爵クラスの悪魔程度の力はゆうに持つておるぞ？ ここまで強い力を持つ者も珍しい」

「ど、どうも……そいつは光栄と言っか……」

まさかの魔界の支配者登場で場の空気は完全に固まっていた。ラカンでさえ緊張して強張っている。

「さあ早く巻物を開くがいい。外より魔力が充実しているとはいえそう長くは現界できぬ」

「うん、開くよ」

巻物を開くとマンガと同じように全裸の美しい少女が光と共に中から現れた。

「ふふ……久しぶりの外だな。さて、この巻物を解いた者は誰だ？」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの人造精霊、劣化コピー。巻物の精霊。

本体に数段劣るとはいえその戦闘力は世界最高峰。その溢れ出る魔力は膨大だ。膨大だがサタンとは違い知覚できる現実的な大きな魔力なため今回はテオドラと皇帝も息を飲んでいた。

(なんとなくアリカに似ているな……)

アルカはエヴァンジェリンに妹の面影を見ていた。だがアリカに似ているという事は必然的にアルカにも似ているということなのだが。

「ほう？ ぼーやが……ひいつ！」

「何だ？ 人を見て悲鳴を上げるとは無礼な奴だな」

巻物を解いたアルカを確認した刹那にアルカを膝に乗せているサタンを認識して思わず悲鳴を上げる。

真祖の吸血鬼。魔性の最高レベルの化け物。その力は爵位級の、しかも上位のレベルの悪魔に相当するだろう。

だが今回は相手が悪すぎた。なんせ相手は闇の頂点に立つ者だ。同じ闇に属するエヴァだからこそより一層の恐怖を感じるだろう。

後にエヴァンジェリンは語る。

「長い事生きてきたがついに死ぬ時がきたのだなと思ったと。」

## 選ぶ道（後書き）

アルカの未来知識はネギ視点で見た原作23巻の一話目まで。  
つまり205時間目までです。

そしてネギが知らないであろう事は知りません。  
エヴァの過去だったりその他ネギの関わっていない事、例えば生徒  
の日常生活部分などの知識はゼロです。

## 卒業試験に向けて

爆発と轟音が響きわたり砂埃が舞い上がる。

先ほどまで行われていた戦闘がついに決着したのだ。

「終わったようじゃな……さて、どちらが勝ったのかの？」

「我が弟子は随分と成長したが……やはり相手が悪かったか」

観戦していたテオドラとエヴァは服や髪に付いた砂埃を払いながら先ほどまでの戦場を見た。

立っているものは一人。所々傷だらけで頭から血を流しているがまだまだ元気そうだった。

「あつはつはつは！ やるじゃねえか！ 正直俺もあぶなかったぜ！」

砂埃が晴れ、立っていたのは大英雄ジャック・ラカン。

果敢にも挑んだアルカとグランはぶつ倒れて目を回している。

「ああ……あれほどまでに強くなったアルカとグランでも敵わぬか」  
「心底呆れた男だ。しかしあの歩くバグをあそこまで追い詰めたのだから良しとしよう。あの阿呆相手にここまで戦えた事が十分に評価に値する」

テオドラとエヴァはジャックの異常さを再確認すると救急箱を持って倒れている二人に駆け寄った。

「いてて……二人がかりでも勝てないか」

「僕もアルカも結構強くなったと思うんだけどね」

テオドラとエヴァに治療を受けながらアルカとグランは溜息を吐く。

「何度も言っているだろう弟子よ。あれは比較対象が悪すぎる。既にお前達は世界上位クラスだ、私が保証しよう」

グランの腕に絆創膏を貼りながらエヴァは言う。

「そうじゃぞ？　しかし本当に強くなったの。妾も嬉しいのじゃ」  
「ありがとうテオドラ」

アルカとグランがラカンとエヴァに弟子入りしてから随分と年月が経っていた。

アルカの友人であり従者でもあるザジの姿はもうない。彼女は今現在麻帆良学園中等部、一年A組に属しているからだ。彼女は一足先に麻帆良に潜入してアルカがやってくるのを待っている。

「しかし本当にアリカそっくりになってきたの。可愛げはアルカの方があろうじゃが」

「からかわないでよテオドラ……」

テオドラに頭を撫でられ苦笑するアルカ。

もう五歳の子供ではない。魔法球と外の世界とを行き来し、肉体の成長を調整。現在の年齢は約十三歳。つまり中学一年生ほどだ。

見た目はテオドラが言う通りアリカ女王そっくりだ。少々アルカの方が垂れ目なのだが十分に瓜二つと言える。

体つきは少々細めでそれほど身長も高くないためにどこか女の子っぽい。腰まである長い髪も女に見られる原因の一つだ。

ただ無意味に髪の毛を伸ばしているわけではない。長い髪の毛には魔力が宿る。魔力がそれほどまでに高くないアルカが少しでも魔力を上げようと考えた結果が髪を伸ばす事だった。触媒にも使えるのでメリットが多いのだ。

「お前もだグラン。本当に強くなった。くく……魔族を弟子に持つとは思わなかったがお前は私の想像以上の化け物に成ったよ」  
「それは褒められているのだろうか」

化け物らしい強さを褒められたグランは内心複雑だ。これで彼は自分の怖い外見を気にしているから喜んでいいのか分からない。

「そうだぜ？ 胸を張れよお前ら。俺をここまで追い詰めたのはナギの野郎くらいなもんだからな。俺が教えられる事はもう何もなさ。そうだ、お前らにラカン三級をやるう」

笑いながら表彰状を取り出しアルカとグランに進呈するラカン。困惑しつつも受け取るアルカとグランだが内心ちよっとうれしい。

「ふむ、修行完了といったところかの。よく頑張ったのじゃ」

にこにここと微笑みながらアルカの頭を撫でるテオドラ。

「子供扱いはよしてよ」

「別にいいじゃろう？ 妾は下の兄弟がおらんからの。アルカの事は弟のように思っておるのじゃから」

「いつの間にか未っ子体質ができているのか？ 僕は一応長男なんだけど」

だが嫌じゃない。

テオドラには随分世話になった。

悪魔達には教えてもらっていなかった一般常識や一般の学問を教  
えてもらった。アルカにとって第三の先生である。

今では互いに砕けた態度を取り合い傍から見れば姉弟のようだろ  
う。

「さて、次は私の番だな。今から一週間後に卒業試験をするとしよ  
う。私に致命的な一撃を与えられたら合格だな」

「一撃与えるのが無理だよねえ……」

「弱気だなグラン。私は本体に数倍劣る劣化コピーだ。今のお前達  
ならさほど難しくはあるまい？」

「それでもラカン表で一万以上は確実だと思っただけ……。僕と  
グランの二人がかりでも倒せないし」

テンションがダダ下がりアルカとグラン。未だ師の壁は高い。  
これだけで本体に数倍劣ると言うがそれでは本体はどれだけ強い  
だという話だ。

「ふふ励め励め、登ってこい弟子よ。お前はサタン殿を初めとする  
神話級の悪魔の加護のお陰で闇の浸食は無い。我が技法をノーリス  
クで使用できるのは世界広しといえどもお前くらいなものだ。だが、  
闇の魔法を維持すると副作用では話が違ふ。術式兵装する魔法が高  
度になるにつれて消費する魔力も大きくなる。お前の魔力量は確か  
に平均的な魔法使いより多いが、それでも常識的な多さだ。マンガ  
に出てきたサウザントマスターの息子にも及ばない。その程度の魔  
力ならすぐにガス欠だ。そこを何とか改善できるかな」

エヴァの言う事は修行を初めてからずっと付きまってきた問題  
だ。



「特別に私の巻物をかしてやろう。肉体の強化は出来ぬが精神的な鍛錬なら可能だ。お前の課題である魔力に関する問題は巻物の中で考えるがいいさ。なんせ外との時間差は最大で七十二倍だ。期間は一週間だがそれだけあれば十分だろう？」

巻物を置いて去っていくエヴァ。嬉しそうな表情だったから内心卒業試験が楽しみでしかたがないのだろう。

「あいつもなんだかんだって変わったよなあ。まあ本体とは完全に独立した存在だから厳密にはエヴァ本人じゃないんだがな」

ラカンは飲み物片手にエヴァが去って行った方向を見る。

「確かにの。お伽噺レベルで語られるほどの悪の大魔法使い。妾も小さい頃は怖がったものじゃが……あれでは怖がりようもないのじゃ」

最初は尋常じゃなく怖がっていたテオドラも今や彼女と友人だ。皇女であるテオドラはエヴァやラカンのように常にダイオラマ魔法球内にいるわけではないが、中にいるときは大体エヴァと一緒にいる。

エヴァはテオドラにとって貴重な友人だ。エヴァも認めはしないだろうがテオドラの事は友人と思っているだろう。

「よし、まあ何かあったら相談しろよ？ 免許皆伝をくれてやったが組み手の相手くらいにはなってるぜ」

組み手と聞いてうんざりするアルカとグラン。

ラカンに師事して約八年、彼の理不尽な強さは骨身にしみて理解している。

エヴァの強さはラカンに引けを取らない。本人は後方支援の魔法使いタイプだと明言しているが接近戦でもラカンと同等に戦える。正直勝てる要素なんて見つからない。

「しつかりと体を休めたら巻物で最終調整だな。大丈夫さ、お前は  
この俺とエヴァの弟子だ。きっとやり遂げる。だからエヴァの奴も  
このタイミングで巻物を出したんだろうよ」

笑いながらアルカの髪をくしゃくしゃと撫でまわすラカン。

そしてアルカの嬉しそうな顔を見てテオドラとグランは顔を綻ば  
せた。

「バ・ベル・ベル・エル・ベル・エ・エル」

始動キーを唱え呪文を完成させる。

場所はエヴァの巻物の中。ダイオラマ魔法球とはまた違う異空間。  
その異界の中でアルカは師匠の期待に応えるべく魔法の最終調整  
に入っていた。

「来たれ深淵の闇、燃え盛る大剣、闇と影と憎悪と破壊、復讐の大  
焰。我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者」

アルカの得意とする火属性の魔法。

アルカの魂に刻まれた火の頂点に立つ存在、ベリアル、ウリエル、  
ペイモン、アモン、バシンの加護により火属性の相性が頗るいい。

具体的に言うと燃費がとんでもなくいいのだ。例えば通常の魔法  
使いが魔力を十消費するとしたらアルカの消費魔力は一程度でいい。  
正に破格の燃費の良さだ。

ちなみに一番燃費がいいのは召喚魔法で、爵位持ち上級悪魔や上位精霊などを召喚するのに一程度しか魔力を消費しないという反則ぶりである。無論、特別なのは火と召喚だけで他の魔法は通常通りの魔力を消費する。

「奈落の業火」

火属性の中位魔法だ。敵を焼きつくす地獄の焰。

「固定」

その焰を解き放たず空間に固定。

「掌握」

更にそれを自身に取り込み霊体にまで融合。

「魔力充填、術式兵装獄炎煉我」

奈落の業火を取り込みアルカの風貌が変化する。

闇の焰を纏い髪も肌も暗い赤色に。どこか恐怖心を覚える姿だ。

アルカの師である悪の大魔法使い、闇の福音ことエヴァンジェリのオリジナルスペル。

その効果は簡単に言えば強力な自己ブーストだが、その恩恵は取り込んだ魔法の属性を得る点から咸卦法をも上回るだろう。

「……持続時間……か」

ただ立っただけでもどんどん魔力を消費していく。

「九つの鍵を開きて、レーギャルンの筐より出て来たれ」

更に呪文詠唱。

「燃え盛る炎の神剣」

火の上位魔法。燃え盛る巨大な剣を造り出した。これは火の魔法なのでアルカの魔力消費はかなり抑えられている。

「ふっ……！ はっ！」

剣を振るい激しく体を動かしていく。

エヴァやラカンにはまだまだ敵わぬがその動きは常人のそれを大きく凌駕している。

アルカ自身は比較対象がエヴァとラカンとグランしかいないためイマイチ己の実力は実感できていないが……。

一番実力が近いのはグランだが、グランとまともに戦うには咸卦法や闇の魔法を使わなければいけない。身体強化をしなければアルカはグランには敵わない。それも戦いの歌程度の強化では簡単にあしらわれてしまう。

「火精召喚、槍の火蜥蜴三百柱」

「炎の精霊、集い来たりて敵を射て……魔法の射手連弾・三百七矢」

火の魔法を続けざまに唱える。

火属性の為アルカの負担はほぼ無いが、闇の魔法を展開しているために魔力はどんどん減っていく。

仮想敵としてラカンを想像し、彼と戦っているかのように立ち回

る。

強大な剣による遠距離攻撃。剣での攻撃を当てると剣を消し、火霊を召喚しつつ近づき、近距離で魔法の射手を叩きつける。

「目醒め現れよ燃え出づる火蜥蜴、火を以ってして敵を覆わん。紫炎の捕え手」

魔法の射手の着弾と共に肉薄し確実に捕えられる距離での捕縛魔法。

「魔法の射手、収束・炎の百矢！ 炎華崩脚！」

爆発を伴う渾身の蹴り。マンガで見たネギの技をパクったものだが思いのほか攻撃力はある。ラカンやエヴァには正直言つてあまり効果は望めないが、世界最高峰に位置する彼ら以外の相手なら十分に致命傷になる一撃だ。

だがまだ攻撃の手を休めない。一気にたたみかける。

「来れ虚空の雷、薙ぎ払え、雷の斧！」

アルカの得意としない風属性の魔法。これはかなりの魔力を消費する。

「闇の精霊、集いて来たりて敵を射て！ 魔法の射手連弾・闇の三百七矢！」

続いて闇属性の魔法の射手。闇とは相性がいいがやはり魔力の消費は火属性より多い。

「とどめ……来たれ氷精、爆ぜよ風精……氷爆！」

師であるエヴァが得意とする氷の魔法を決め手にもってきた。

「はあ……はあ……こんだけやってもラカンさんには勝てないんだよなあ」

術式兵装も解き地面に寝転がる。

仮想敵のラカンはピンピンしている。

これだけ魔法をぶつけまくっても倒せない。アルカとグラン二人がかりで挑んでも手加減しつつ勝つのがラカンだ。この程度では倒せない。

そもそもラカンが本気を出したら開始一発目に斬艦剣をぶっぱなされて試合終了だろう。

「どうするか……」

エヴァに致命傷を与えるにはどうすればいいか考える。

(グランを前衛に僕は後衛……いや、二人で攻めるか？ でも速攻で倒さないと闇の魔法と咸卦法が切れてしまう。戦いの歌程度の強化じゃ全然足りないからなあ。長引けば長引くほど不利だけど、速攻で倒せるほどの力はないし)

時間だけはたっぷりある。

しばらく空を眺めてぼおっとしてしていると不意に空に罫が入った。

「んん？ あれ？」

驚いた。罫から漏れてくる魔力は良く知ったものだ。

エヴァを遥かに凌ぐ魔力。黒く禍々しいその魔力は万人を震え上がらせるほどの恐ろしいものだが、アルカにとっては心安らくものだ。

勢いよく起き上がり目を輝かせて罅割れて行く空間を見る。

「今まで僕が呼ばなければこっちに来れなかったのに……来れるなら来れるって言うてくれたらよかったのに」

愚痴るがその顔はとても嬉しそうだ。

空間が砕け一人の少女が異界に降り立った。  
アルカの何より大切な友人の一人。

「久しぶりですねえアルカ。約束を果たしに来たわよ！」

序列二位、色欲のアスモデウスは上気した顔で眼を潤ませ艶っぽい声でそう言い放った。

卒業試験に向けて（後書き）

修業期間はすっ飛ばしました。



## 契り

「アーたん！」

「はあい、アルカ」

突然降り立ったアスモデウスに駆け寄り抱きしめる。

アスモデウスと会うのは久しぶりだった。

指輪を通して何度か会話をしているが、こうして実際に合うのは何年かぶりだ。

魔界のお偉いさんともなると中々忙しいらしい。人一倍アルカを心配しているゴモリーですら人間界に来ることは希だ。

アルカの友人たちは皆本体でアルカに会いたがるので中々人間界に來れないでいた。

「あつは！ ああんそんなに強く抱きしめないでよ。逝っちゃうわ逝っちゃう」

「あ、ごめん。でも嬉しくて」

本当に嬉しそうなアルカを見てアスモデウスの顔もほころぶ。

魔王に会って瞳を輝かせて喜ぶ人間など稀有だろう。おそらくアルカに尻尾があったものすごい勢いで左右に揺れている事だろう。

「どのくらいこっちにいるの？ あんまり長く居られないでしょ？」

「それは大丈夫。今魔界でアスタロトとペイモンの部下総出で現界に必要な魔力を送り続けているから。多分私が帰る頃には干からびてると思うけどにゃー」

「ロツテとモンちゃんの下下が？」

魔力に関しては大丈夫らしいがほぼ生贄状態である部下たちはた

まったものではないだろう。

「ああアルカ、もっと良く顔を見せてちょうだいな」

成長したアルカの身長は百六十センチ程度。小柄な体格だがアスマデウスよりは大きい。

かつては見上げていたが今では見下す形になっている。

「うっふふふふ。ああすっかり成長しちゃって。あの小さかったあなたがこんなに立派になって」

ぺろりと唇を舐めて体を震わせる。

「あたしがここに来たのはちゃんとした理由があるわ。あなたの悩みを見事解決してみせましょう」

「本当!？」

アスマデウスの言葉に歓喜する。

一人では行き詰まっていた。いいアイデアも浮かばない。ここでアスマデウス、魔王の手助けがあるとは心強い。

「期待しなさいなあ。あなたは十分に強くなった。それこそ並の悪魔じゃ敵わない。でも、まだまだあなたは伸びるわ。うっふふふふ……そとじゃあ何だし家の中に入りましょ？ あそこに素敵な口グハウスもあることだし」

マンガに登場したエヴァも従者と共にログハウスに住んでいた。

エヴァの趣味なのだろうか？

二人は移動し、アスマデウスが淹れた紅茶を飲みながら談笑して

いた。

「あの真祖が開発した闇の魔法……あたしからみても賞賛せざるを得ないわあ。魂レベルまでの魔法との融合、取り込む魔法によって人の身でありながら上位精霊に至れる。正に破格の性能よ」

闇の魔法、そして開発者のエヴァを褒める。師であるエヴァが褒められるとアルカまで嬉しくなる。

「あなたは師に恵まれたわ。あの筋肉さんはあたしの目から見ても強者と言える、私達と真正面から戦闘できる力を持つ本物よ。真祖に至っては手放しに賞賛できるわあ。部下に欲しいくらい」

話をきり紅茶を口に含む。

「闇は人の手に余る力なの。それも魂のレベルで魔法と融合だなんて肉体という枷を持つ人間には本来到底無理な話。霊的生命体であるあたし達や精霊達ならまだ相性はいいでしょうけどねえ。あたし達の加護があっても人間という種の限界がアルカを阻んでいるわあ。それだけその魔法を使いこなせている事が既に賞賛に値するの。他の人間が使えば確実に堕ちて人とも悪魔とも違う畜生に成り果てるでしょうねえ」

「僕はもう成長限界って事なの？」

「人の身である以上はね。身体能力や他の魔法は別よあ？ 闇に限った話だからね？」

アルカは悩みこむ。

闇の魔法はアルカのメインウェポンだ。それが既に限界だと言われるとそれがアルカの限界だと言われているのに等しい。

（闇の魔法は確かにものすごい恩恵を与えてくれる。咸卦法も併用すれば更に。でも問題、魔力不足は解決していない。短時間で片を付けられるのなら問題ないけど、ラカンさんやエヴァやアーウェルンクスレベルと戦闘になれば確実に時間切れ……）

「うっふふふふ……悩まなくても良いわよ？ だからその問題を解決するためあたし、代表を勝ち取ってきたのだから」

「あ、そうか。頼もしいよアーたん！ 僕一人じゃ行き詰まってた」  
嬉しそうに笑うアルカをして唇を舐めるアスモデウス。

「話は簡単なのよ。闇とは本来あたし達魔に属する者が使う力。あなたはあたし達の加護が働き人から逸脱することはない。でも、闇の力を使うには人の身では限界がある。あなたは死後悪魔に昇華する予定だったのよ。あなたの魂を回収し、ゴモたんの魂の欠片と融合させて本当にゴモたんの息子になるはずだったの。でも、予定を早める事にしたわあ。すっごくシンプルに言えば人間を辞めればいいの。魔法というのは読んで字のごとく魔の法。この場合の魔というのは人間以外の魔法生命体を指すわあ。悪魔、天使、精霊を全部引くくるめて魔ね。」

人の使う魔法というのはつまりあたしたちの力借りてを真似しているだけのものなのよ、魔力というエネルギーを使っただけ。西洋魔法使いは精霊に力を借りるし、黒魔術なんかはあたし達悪魔から力を借りているわ。その事実をどれだけの魔法使いが知ってるかは知らないけどね？

ただ漠然と呪文を唱えてるだけじゃあないのよ？ 言葉には言霊が宿る。例えば詠唱に出てくる炎の霸王とは火の最上位精霊の事だし、その最上位精霊よりベリアルやウリエルの方が上位の存在だしねえ」

「つまり……人間を辞めれば強くなるって事？」

「シンプルにいうとそうよお」

正直人間を捨てることに抵抗はない。

本当の意味でゴモリーの息子になれて尚かつ力も上がるなら願ったり叶ったりだ。

もとより悪魔憑きとして追放、封印された身。ラカンやテオドラ、皇帝はそんな事気にせずにアルカの本質を見て差別などしないが、そういった人間は非情に希である。

悪魔憑きとは一つの災厄の象徴。悪魔憑きであることがばれれば迫害の対象、最悪殺されてしまうだろう。しかし直接的な手助けは友人の悪魔達はできない。ひとたび捕まってしまうえばイエスやジョンヌ・ダルクのように処刑されるだろう。まあその後に悪魔として第二の生を送るわけだが……。

自衛の手段はある。それこそ高位魔法使いと呼ばれる者が束になつてかかってもアルカには敵わない。

アルカに傷つける意志はなくても正当防衛くらいはする。殺しはしなくても戦闘ができない状態にはするだろう。煮え湯を飲まされた魔法使い達はやつきになってアルカを殺そうとするだろう。そしてそのことごとくを撃退する。

やがてアルカの首には懸賞金がかかけられ……。

(思いつきりエヴァと同じになるな……)

あり得る未来にげんなりとするアルカ。

テオドラや皇帝は立場もある。いかにアルカに好意的に接してくれようとばれれば表だってかばい立てはできないだろう。帝国の権威が落ちかねない。

「アーたん、僕人間辞めてもいいよ。アーたんや母さんと同じ存在になれるならその方が嬉しい」

アルカの言葉に歓喜し妖艶な笑みを浮かべるアスモデウス。  
その表情を見てアルカの顔が少し赤くなる。

(あれ?)

自分の変化に戸惑うアルカ。

(体が熱い……それにアーたんが……)

幼い頃から一緒の時間を過ごしてきたアスモデウス。

抱きついて一緒に寝たこともあるし、一緒に入浴したこともある。  
親兄弟と同じ大切な家族だ。家族なのに……。

(はぁ……はぁ……はぁ……なんで?)

瞳が潤む。呼吸も荒くなる。

「よくぞいつてくれたわ！ うつふふふふ。あなたの魂を人間から悪魔に昇華させるわ。肉体という枷から解放させるには肉体を殺すしかない。でも、あたし達があなを殺すわけがない。だから魂のみを悪魔にするわ。魂が悪魔だから人間では無くなる、恩恵はそうねえ……闇の魔法の燃費が良くなるでしょうね。そこそ息をするのと同じように闇の力を使えるようになるわ」

アスモデウスが何か言っているがよく聞こえない。

「うつふふふふ……まず気がついたのはあたしだったわ。そしてあたしが行動を起こそうとした時に立ちふさがったのがアスタロトと意外なことにペイモンだったの。そしてちょっとした戦争

をして勝ち残ったのがあたし。だからアスタロトとペイモンの部下が魔力を送り続けているのよお」

とんでもない言葉が飛び出してきたが、アルカはアスモデウスから目が離せない。

「あたし達とアルカは友人で、契約関係は一切無かった。でも、ここであたしが初めてあなたと契約することになるわあ。古来より契約の方法はあまり変わっていない。魔女があたし達悪魔と契約するときする儀式、サバトって知ってるかしら？」

静かに首を振るアルカ。そんなアルカにっこりと笑いかけるアスモデウス。

「待ちに待ったわ。ザジにファーストキスを譲り、青い果実が熟すのを待ちに待った」

舌なめずりをしながら上着に手をかけるアスモデウス。

「そして遂に時至れりよお！ アルカ、あなた一昨日精通したでしょ？」

「ぶっ！？」

思いつきり吹き出すアルカ。だがそんなことはお構いなしに一枚一枚服を脱いでいくアスモデウス。

「精を交わすことができるのならあたしと契約することは可能。儀式としてあたしと契り、アルカは悪魔の魂を、あたしはアルカの精を得られる。情交、交尾、性交、エッチ、意味は分かるわよねえ？ 性教育もちゃんと教えらてるわよねえ？ うっふふふふふ！」

自分の体の変化に戸惑っていたアルカはここで一気に混乱の極みに陥る。

「それはテオドラに習ったけど……で、でも、でもっ!？」

慌てて手で顔を覆うアルカ。

既にアスモデウスはその幼い顔立ちや小柄な身長には不釣り合いな大きく豊かな胸をさらけ出していた。

「何を恥ずかしがってるのかにゃー? あたしの裸なんて見慣れてるでしょう?」

「それは、子供の時だったから……」

「うっふふふふ……今は大人だものねえ? そんなに立派にしちゃって……あぁなんて美味しそう。魅力的、最高に魅力的よ……はぁ……はぁ……それにそろそろ我慢の限界でしょう? そろそろ媚薬の効果も出てきてるでしょうしい?」

「盛ったなアーたん!」

思わず叫ぶ。先ほどから感じていた体の異常はアスモデウスが紅茶に混ぜた媚薬の効果だったらしい。

「さぁ、一つになりましょう。うっふふふ……任せて、最高に気持ちよくしてあげる。その代わりあたしの事も気持ちよくしてほしいにゃー」

遂に一系まとわぬ姿になったアスモデウスは上気した顔で溢れる涎を拭いながら一步一步アルカを壁に追い詰めていく。魔王からは逃げられない。



「あ、アーたん？」

「アルカ……」

そしてもう逃げるスペースも無くなりもう手が届く距離までに追い詰められた。

「これからあなたが行くことになる極東の国の作法をしっているか  
にゃー？」

「に、日本の作法……」

冷や汗をかきまくるアルカとは対照的に素晴らしい笑顔のアスモ  
デウス。

「両手をね、こう合わせるの。そして感謝の言葉を込めてこうい  
うのよ」

パチンと両手を合わせ一言。

「いただきます」

キラリとアスモデウスの目が光り、彼女はアルカを床に押し倒し  
た。

## 契り（後書き）

喰われましたがメインヒロインはアスモデウスではありません。

## 試験開始

ログハウス内はそれはもう酷い有様だった。

情事の後のむせ返るような独特の匂いに散らかるティッシュとティッシュとそれからティッシュ。

床に転がっているアルカは一体何回搾り取られたのかげっそりとしてピクリとも動かない。

それに対しアスマデウスは全身ベトベトだが妙に艶々した表情で優雅に紅茶を飲んでいた。

「ああ素敵な時間だったわあ。ねえアルカ？」

「あ……あ……」

甘えるような声を出してアルカに尋ねるが瀕死のアルカはまともに返事が返せない。

「……さすがにやりすぎちゃったかしらねえ？ 初めてなのにアレはきつかったかにゃー？」

ほんの少し反省するアスマデウス。サキュバスの愛液から作った特製の媚薬は強力すぎたみたいだ。

「ふう……アルカ、じつわねえお土産があるの」

「あ……あ？」

少しだけ反応を示した。

「これ、何だと思う？」

「は……ね？」

虚空からアスモデウスが取り出したのは一枚の灰色の羽根。

「アルカ、あなたの召喚はランダムだけど触媒があればその触媒にゆかりある者が喚ばれると思うわあ。多分、天使だって可能でしょう。グレーな存在であってもウリエルは偉大な天使だからにゃー」

虚ろな目でアスモデウスの説明を聞く。

「そしてこの羽根はあなたの……姉？ それとも叔母かにゃ？ の羽根なのよ。胸揉んだついでにむしったの」

アスモデウスの言葉でアルカの目に光が戻る。

アルカの母親はゴモリだ。断じてウエスペルタティアのあの生みの親ではない。

ではそのアルカの姉、もしくは叔母に該当する人物、もとい悪魔とは？

「僕の叔母は……一人しかいない」

「正確には三人よあ？ ルシファアの嫁であるリリスはゴモさんの姉だもの。だからリリスとルシファアもあなたから見れば叔母に当たるわよ。それにリリム……あなたから見れば従姉もいるわよ？」

「それは……初耳だったよ、アーたん……」

息絶え絶えだが何とか言葉を絞り出す。

自分が知らないだけで結構身内がいたみたいだ。

「でも、この羽根はルシファアのものでもなければリリスのものでもないわあ。事、対軍戦では魔界最強を誇る偉大な悪魔……あなた

がずっと会いたがっていた彼女の羽根よ」

その灰色の羽根を優しくアルカに握らせる。

「さ、その羽根を持って会いたいと願うのよお。同族を召喚するのだからすぐにできるわぁ」

羽根を握り目を閉じそつと祈る。

（会いたい、会いたい。会いたい、ずっと会いたかった……会いたい……来て……）

祈りが通じたらしくこれまでの召喚と同じように空間が罅割れる。

「うっふふふ……流石ねえ。今度色々持ってきたら面白いかにやー？ ウリエルにも協力してもらって……」

アスモデウスが何やら企んでいるが、アルカは罅割れていく空間をぼんやりと眺めていた。

そしてついに空間が砕け膨大な魔力が溢れてくる。

アルカの知らない魔力。力強く、そして温かいでどこか冷たい、そんな魔の力。

「あ……」

そしてついに一人の悪魔が降臨した。

灰色の長い髪、金色の瞳、顔立ちは凛々しく中性的。だが女性特有の膨らみはしっかりと確認できる。

口から時々覗く犬歯はエヴァ以上に鋭く、頭には獣の耳、そして

蛇の尻尾を持ち二枚の大きな翼が背中に生えていた。

「ようやく会えたな。会いたかった………つてすごい格好やな！」

マルコシアス。

アルカがゴモリーの次ぎに呼び出そうとした偉大な悪魔。

ソロモンが序列三十五位。地位は侯爵。義に暑い魔界最高峰の戦士。広域殲滅に至っては魔界最強を誇る魔狼である。

「デウス様にやられたん？ この人は自重できん人やけ災難やったな」

マルコシアスは苦笑すると横たわっていたアルカを抱え上げる。いわゆるお姫様抱っこだ。

「初めましてやな。おれがマルコシアス。ゴモリー様から、皆様方から話は聞いとるよ」

アルカに優しく笑いかける。

ずっと会いたかった人を目の前にして自然と涙が零れた。

「泣くな泣くな、男の子やろ？ まずは身を清めよ？ へへへ……  
……お姉ちゃんが洗ってあげるからな？」  
「………うん！」

照れたよう笑うマルコシアスを見てアルカの顔も綻んだ。

絆は一瞬のうちに出来上がった。

アルカが姉に、叔母に恋い焦がれていたように、シアもまたまだ

見ぬ弟、甥に恋い焦がれていた。

「うっふふふふ……よかったわねえアルカ」

アスモデウスは浴室へと消えた二人を聖母のような顔で眺めていた。

刻限。

エヴァに試験日を言い渡されてから丁度一週間。

アルカはグランと共に師、エヴァンジェリンの前に立っていた。

「今から卒業試験だ、最初から全力で来るがいい」

観客はラカンとテオドラ、そしてゴモリーとマルコシアスの四人

シアと会い、身を清めた後すぐにアスモデウスは魔界へと帰った。それはマルコシアスが現界するための魔力を送るためだ。

彼女の目的はアルカの童貞を奪い契約することだったので目的は既に果たしていた。それにやっと会えた家族の間に入り込むのはよろしくないとも空気も読んだ。

シアと二人きりになったアルカは今までの時間を埋めるように多くを語らい親睦を深めた。シアも他の悪魔の例に漏れずアルカのことを大変気に入り、すっかり仲良し家族になったところで対エヴァに対する切り札の作成に移った。即ち新魔法開発だ。

シアの監修の下、様々なアドバイスや意見を取り入れ試作し、改良に改良を重ねた結果ついに一つの呪文が完成する。

マルコシアスが手放して賞賛するほどのオリジナルスペル。……

・・・いや、正確にはオリジナルとは言いにくいが・・・

「アルカの晴れ舞台じゃのゴモリー殿」

「そうね、あの小さかった子がここまで成長して・・・感慨深いものがあるわね」

ゴモリーと自然と会話するテオドラ。彼女もまた色んな感覚がぶち壊れている。

アルカの教師役として悪魔達から仲間意識を持たれ今ではすっかり友人関係だ。一緒に酒も飲んだし入浴もしたし歌もうたった。そしてセクハラも受けた。

アルカと親しくなると色々な常識が吹っ飛んでしまう。

「エヴァは謙遜無しでとんでもなくつえーからなあ。どこまで戦えるか楽しみだぜ。エヴァの奴も本気だろうしな」

「アルカが開発した魔法はすごいよ？ 今やりあったら筋肉でも下手したら負けるとおもっんやけど」

アルカはシアと一緒に巻物から出てきた。どうやら魔界のA・O・Dの悪魔、もしくはその部下が交代制で魔力を送り続けているらしくシアはあれから一度も魔界に還っていない。

今ではすっかり馴染んでいるシアだが最初はシアを見たエヴァとラカンがびびり上がり大変だった。

「グラン、手筈通りに」

「オーケイ。一泡吹かせてやろう。超怖いけど」

アルカとグランは玉砕覚悟。胸を借りる気持ちで挑む。

「シア殿とどのような術を開発したかは知らないが・・・期



待しているんだな？」

「もちろん！ 度肝抜かしてあげるよ」  
「……………そうか、楽しみだ！」

アルカとエヴァは笑い合う。

「勝とうね、我が主？」

「もちろんだよ我が従者！」

グランと笑い合い戦闘準備に入る。

「アデアット！」

「契約に従い、我に従え……………」

「……………どこまで育ったか確認させて貰うぞ、弟子達よ  
！」

卒業試験がついに始まった。

**試験開始（後書き）**

エヴァ自身がマガア・エレベア使ったら一体どれだけ強くなるの  
だろうか？

## 闇の福音（前書き）

エヴァが本体ならこうはならなかったでしょう。  
本体は強すぎてヤヴァイ。

## 闇の福音

「……………終わったか」

ラカンが感慨深げに言う。

自然と笑いが込みあげ体は武者震いしている。

「これは三級どころじゃねえな、ラカン一級を進呈するか。シア殿、あんたの言うとおりやりようによっちゃ俺も冗談無しにやられてたかもしれねえ」

「おれの言ったとおりやる？」

ラカンとシア、戦士二人は目の前で繰り広げられていた激戦に心躍らせていた。

「本当に驚いたのじゃ……………かつこいいではないか」

「顔が乙女よテオドラちゃん。でも本当に驚いたわ……………さすが私の息子ね」

テオドラは見とれ、ゴモリーは歓喜した。

戦場は至る所が凍てつき氷の固まりがごろごろと転がっている。

海岸線は地形を変え戦闘の激しさを物語っている。勝負は決着した、即ち勝者と敗者が存在している。

「はあ……………はあ……………ぐっ……………はあ……………」

アルカは地面に仰向けに倒れ荒く呼吸をしている。全力を出し切った。悪魔の魂を持ったアルカはラカンと戦った頃とは比較にならないくらいに強くなった。

本当の意味で世界最高峰に足が届いた。手加減をしてかかれらラカンでさえ危ないだろう。

ちなみに相棒であるグランはエヴァの凍てつく氷枢に捕まりオブジェと化している。

「見事だ……見事だぞアルカ！」

地に立っているのはエヴァンジェリン。

しかし怪我は彼女の方が酷い。

服はボロボロに破け体中血に塗れている。

決定的なのは四肢と目を一つ欠いている所だ。無論真祖であるエヴァは何の問題もなく回復、再生するがここまで追い詰められるとは彼女も予想外だっただろう。

最後に立っていたのはエヴァだが、勝負の結果をみると彼女の負けに見える。エヴァ自身これほどまでに追い込まれたのはそれこそ真祖になりたての頃以来だろう。

「くくく、合格だ！ 文句の付けようがない！ 私に不死生がなければ優に三回は殺されていた！ ザジが居れば地に倒れていたのは私の方だったよ。よく、よくここまで登って来たな」

エヴァが受けた致命傷は右目を潰した一撃、腹に大穴を空けた一撃、左腕に受けた一撃。左腕は受けた魔法の進行を防ぐためにエヴァ自身が切り落とした。腕を切り落としてなければさすがのエヴァも危なかっただろう。

右目と左腕はアルカ、腹はグランの攻撃によるものだ。

「全力で……殺す気で挑んだよ。……届いたかな？」  
「しつかりと届いたさ。この私に挑むんだ、それこそ殺す気でこないと戦いにすらならん。私はラカンとは違い手加減する気など毛頭無かつたからな」

話していく内にエヴァの傷は癒えていく。さすがに服はそのままだが……潰れた目も、空いた穴も、欠いた腕も元通りになった。

「おめでとうアルカ、グラン。お前達は遂に私やラカンと同じ舞台に立った。長い間よく頑張った……もう私が教える、教えられる事は無い」

「ありがとうございます。ありがとうございます、マスターエヴァンジェリン」

エヴァの手を借りて立ち上がる。

アルカとグランの長い修行はついに終わりを告げた。

アルカは自分に割り振られた部屋を抜け出し、広い中庭に寝そべって星を眺めていた。

アルカが居るのはダイオラ魔法球内ではなく帝国の宮殿だ。アルカとグランの卒業の知らせを聞き皇帝がささやかなパーティーを催してくれたのだ。

アルカとグランは客人扱いで王宮に迎えられた。ラカンとエヴァも王宮に招かれた。

アルカはその風貌がアリカを連想させるため、金髪を魔法で黒く染めて眼にはカラーコンタクトを入れている。さらにアスモデウスから贈られた指輪に極めて強力な認識阻害の魔法を施したためにアルカを見てもそこからウエスペルティア王族に辿り着くことはない。念には念を入れ魂も人の物に擬態させているのでアルカの事を人の肉体を持った悪魔だと見破ることのできる者は世界中探しても極わずかだろう。

ちなみにエヴァは姿を知るものが皆無なのでテオドラの友人として普通に迎え入れられた。世界中に回っているエヴァの手配書は幻術で大人に化けたものなので、その本来の姿が小さな女の子だと知るものはごくわずか、ほんの一握りなのだ。

「おや？ 先客がいたか」

「エヴァ……」

ワイン片手に現れたのはエヴァだ。

アルカの隣に腰を下ろすと瓶のままワインを煽り、それをアルカに勧めてきた。

上体を起こしたアルカは受け取るとエヴァと同じようにワインを喉に流し込んだ。

「眠れないのか？」

「うん……なんだか興奮がまだ覚めなくて」

「くく……成長してもどこか子供っぽいな、お前は」

満天の星空の下、師弟は語り合う。

「……近いうちに麻帆良へ発つのだろうか？」

「うん、旧世界じゃもう少しで春休みだから……その間に日本に行つて新学期に合わせて転入という形になると思う」

「ザジと同じクラスにか？」

「うん、あそこにはザジもエヴァも、何よりお姉ちゃんがいるし……いずれネギが担任として赴任してくるし」

「そうだな、男一人混ざり込む形になるがその方が絶対にいいな。そこら辺は帝国がやんわりと圧力をかけるだろう」

アルカは新学期から麻帆良へ編入する。もちろん身分を隠してだ。保護責任者は非公式ながらヘラス皇帝なので疑われはしても直接的な攻撃などは受けないだろう。悪魔憑きがばれなければだが。

「寂しくなるな……」

「あれ？ エヴァがそう言ってくれるなんて意外だな」

「……今からちよっとした独り言を言うが別に忘れてくれてかまわんからな？」

ワインを一口飲むと饒舌に語り出す。

普段のエヴァの口からは絶対に出ない言葉を……。

「私が生を受け約六百年、何も全てが敵だったわけではない。少ないながらも私に優しい人間は確かに存在した。親代わりを努めてくれた人もいたし、友と呼べる者も確かに存在した。」

「……ほとんどの人間は私の正体を知ると手のひらを返したようになるが……中には態度を改めないお人好しもいた。……正直言つとその手の人間にはかなり救われた。私が理性を保ち、完全に堕ちてしまわなかったのも思えばそう言った極わずかだが人の温かさに触れる機会があつたかもしれない」

初めて聞くエヴァの過去。普段過去の話なんてしないのでアルカは初めて聞く。



「だが、世の中はそんなに甘くなく神は不平等だ。私と親しくしたために殺された者はかなり多くいる。……この身が裂ける以上の思いをしたよ。私と関わったばかりに優しい彼等が命を落とす。こんな理不尽な話があるか？ 例え殺されなくとも皆例外なく私を置いて逝く。私以外に体験したことある者がいるだろうか？ 私の事を姉と慕ってくれた少女が年老いて天寿を全うするんだ、私は死に際を看取ったよ……。あの時の何とも言えない気持ちはない。そして私は自分のことを化け物と再確認するんだ。思えばそれからか……。完全に人に混じる事を止めて、私を置いて逝く事のない人形に手を出し始めたのは」

アルカは言葉も出ない。どんな言葉をかけていいのか分からない。六百年を生きる彼女の経験はあまりにも重い。

「お前を弟子にしたのは半強制的な部分があった。サタン殿に凄まじいたら断るわけにもいかない、怖かったしな。しぶしぶお前を弟子に取ったわけだが……。ん？ もう空か」

空になった瓶を置き、ころんとエヴァはアルカに身を寄せ横になる。

「どうしたの？ 普段のエヴァらしくないよ？」

「そうだな、らしくないな」

アルカの膝に頭を乗せて顔を見上げるエヴァ。いわゆる膝枕に近い状態だ。

こつした甘えるような態度を取るなど普段のエヴァからは考えられない。

「私が闇の福音と知ってもお前は恐れずに私に向かい合ったな。そ

れどころか無邪気に懐いてきた。厳しい修行にも泣き言一つ言わず、痛みに耐え涙を堪え……情が移るのに多くの時間はかからなかった」

手を伸ばしてきたのでその手を取り優しく握る。

小さな手だ。今ではアル力の手の方が大きい。

「……寝る前に本を読んでやった事があったな、そして一緒に寝るときは私に抱きつき甘えてきた。私のために食事を作ってくれたこともあったな。私の髪の毛を洗ってくれた事もあった……一般的にこういった関係は家族というのだろうか」

今日のエヴァはどこかおかしい。

普段なら照れて絶対に家族などと口にはしないし、こういった自分の弱いところは絶対に見せない。

「……私の技を後継し、成長するお前と過ごすうちにどんどん情は大きくなっていった。ガキのまま人外になった私に子は作れん。初潮もきていなかったしな。だが、お前と過ごすうちに芽生えたこの感情は母性だろう。ゴモリー殿達同様、私もお前に魅せられた一人というわけだ。だが……お前を可愛く思えば思うほど私の中で恐怖が大きくなっていく。お前は死後悪魔に昇華すると聞いていた。悪魔とは霊的生命体、即ち不死の存在だ。お前は私を置いて逝く事はない。だが、私はエヴァンジェリンの劣化コピーの人造精霊。記憶と劣化した技術を持ち容姿を似せたまがいものだ……私には再生の限界がある。それは即ち死だろう。お前が死ななくとも私が死ぬ。確実に訪れる別れ……かつては魂の底から懇願した死がこんなにも恐ろしく感じるとは……」

「

息を呑む。

アルカは再生の限界など初めて聞いた。  
いわば寿命があるなど知らなかったのだ。

「私の記憶を本体と同期させる事は可能だ。だが、それはあくまで私の経験を本体が追体験するだけだ、ここでこうしてお前と触れ合っている私はまがいものの方で本体ではない。

「……こんなにもこの身を恨んだことはないぞ。闇の魔法の番人として造られた。チャチャゼロもおらず膨大な時間を一人で過ごしてきた。不満はなかったが、今は違う。私は、私は悔しい……ずつと側でお前の成長を見ていきたい。本体と取って代われるなら代わりたい！」

ついには涙まで零したエヴァ。

初めて見たエヴァの涙に動揺すると同時に自分が幸せ者であると再確認するアルカ。

「……………取り乱した。すまぬな……………これから旅立つ愛弟子を激励するつもりだったのだが」

「うっん、ありがとうエヴァ」

優しく涙をぬぐってやるとエヴァは顔を赤くした。

確かにこのエヴァはここで生きている。なのにまがいものだからいずれ死んでしまうだなんて……………。

「あまりに可愛そうじゃないか」

第三者の声に振り返るアルカとエヴァ。

そこには二人のよく見知った男が立っていた。

「ウリエル……?」  
「ウリエル殿!？」

いつの間にかそこには偉大なる炎の熾天使ウリエルがいた。  
しかし、存在は極めて希薄だ。どうやら本体では無いらしい。

「すまん、盗み聞くつもりは無かった。容赦してくれ闇の福音よ」

突然降臨した事に驚きを隠せないアルカとエヴァ。

エヴァなど緊張して色々やばいことになっている。

「俺がきたのはちょっとした荷物運びと実験を兼ねてだったのだが……その悩み解決できるかもしれないぜ?」  
「……どういう事ですか?」

訝しげな表情のエヴァの目の前に一枚の羽を取り出してみせるウリエル。

「エロ魔王から話を聞いてな、俺も面白そうだと思って一枚噛んだ。これは俺の同僚の羽なんだが、これを触媒にして召喚は出来ないかと思ってね」

「天使の召喚ですか? しかしアルカの友人にウリエル殿以外の天使は……」

「だから実験を兼ねてだ。まあ召喚できたらもうけもんくらいの感覚でいいだろう」

羽をアルカに握らせるウリエル。ちなみにエヴァはアルカの友人である神話級の悪魔達相手には敬語になる。

「エヴァンジェリンよ、お前には好感を持っているし良き友人だと

俺は、俺たちは思っているんだぜ？ 水くさいな、相談しろよ？」  
「はあ……その……」

エヴァはどうリアクションを取っていいのか困っていた。言われていることは大変光栄なのだが。

「ウリエル、じゃあ召喚してみるよ」

「ああ、俺は不本意にも分霊体だがそいつは本体で出てくるだろ。一応結界張っておくぜ？」

この召喚がエヴァの運命を大きく変えることとなる。  
空間がひび割れ神々しくも恐ろしく底冷えするような魔力が溢れ  
てくる。

天使が降臨するまで、あと少し。

## 闇の福音（後書き）

エヴァ可愛いけどヒロインでもサブヒロインでもないんです。  
言っなればお母さんポジション。

メインヒロインはまだ登場していないあの人。

「おお、やっぱり成功だな」

「天使……？ でもなんだこの凍えるような冷たい魔力は……」

ウリエルは腕を組みうんうんと頷いている。

エヴァは圧倒的な上位存在を目の前にして体を震わせている。

アルカは悪魔と違い天使を完全召喚したため呼吸を乱し汗を拭う。そして降臨した天使にこれまでと同じように問うた。

「召喚に応じてくれてありがとう。僕はアルカ・テオゲヘナ・エンテオフュシア。貴女の名前を聞かせて下さい」

「へえ……あんたがアルカか。本当にあたいを完全召喚しちまうんだね、驚いてるよ。貴殿の名前は天界でもよく話題に上がる。お会いできて光栄さね」

珍しいピンクブロンドの髪に瞳の色は深紅。背丈はアルカと同じくらい。

純白のローブを身にまとい、背には暗闇でもなお輝いて見える白い翼。見まごう事ない天使だ。

「自己紹介がまだだったね。あたいはマステマ、今後ともよろしく頼むよ」

「うん！ ヨロシク！」

天使仲間が増えて満足するウリエルと敵意の天使を目の前にしてビビり上がるエヴァ。

そしてアルカとマステマは固い握手を交わしていた。

「あいよ、了解した。面白いじゃないか、あたいだって優秀な部下は歓迎さね」

「ほ、本当ですか!？」

場は打って変わって宮殿内の食堂、エヴァの歡喜に満ちた声が響く。

マステマが降臨したと知った皇帝とテオドラは飛び起きて歓迎の準備を始めた。

深夜ながら酒とちよつとした食事も用意されている。

分霊体のウリエルは天界に還った。今は本体がマステマが現界に必要な魔力を送っている。

「し、しかしマステマ殿。私は世間一般的に見て悪の存在です。そんな私があなたの眷属になると……あなたに迷惑がかかるのでは?」

「あつはつは! 心配する事ないさね。善悪の判断や価値観など人間達が勝手に決めるもの。突き詰めると本当の悪なんて存在しないし、本当の正義なんて存在しない。人間の価値観であたいたちの事を決めつけられても困るってはなしさね。話を聞いてみてあたいはあなたに好感を持ったし、ウリエルも推薦してる。それにあたいの部下には悪魔やら悪霊やらわんさかいるからね、闇の力を持つあなたを迎えても何の問題も無い」

食堂にいるメンバーは固唾を飲んで見守る。

エヴァンジェリンの人生を決定づける重要な場面に立ち会っているからだ。

「しかもあなたはあたいから見てもとんでもなく優秀だ。あたいの



部下は脳筋が多いからね、あんたみたいな頭のいい子が眷属になってくれるとあたしも助かるってもんさ」

チーズを摘みながら語るマステマ。エヴァの瞳の輝きはどんどん増していく。

「人から天使に至った者も多く居る。人造といえども既に人の上位存在のあんたはすなりと至れるさね」

「私は……まがい物でもない私自身になれる……！」

感極まって涙目になるエヴァ。

「よかった！ よかったのじゃエヴァ……」

「あ、ありがとう。ありがとうテオドラ」

普段のエヴァからは考えられない姿だ。

涙をこぼしながらテオドラと抱き合う。素直にお礼を言うのも珍しい。

「珍しいもん見たなあおい。普段からもそんだけ素直なら可愛げもあるけどな？」

「エヴァは普段から可愛いよ」

「それ以上におっかないけどね」

アルカとラカン、そしてグランはそんなエヴァの様子を微笑ましく見守る。

「ワシからも深くお礼申し上げますマステマ殿。彼女は我が娘だけでなくワシの友人でもあります」

「頭をあげな亜人の長よ。これも巡りあわせさね。友人のために頭

を下げるあんたは立派だよ、皇帝」

グラスを置きにやりと笑うマステマ。皇帝は恐縮、といった様子で頬をかいていた。

「エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル」

「……はい」

マステマの呼びかけでテオドラとの抱擁を解き佇まいを直す。

「我が魂の一部を分け与え天使へと昇華させる。我が眷属になることに相違ないな？」

「はい！」

「元気のいい返事、大変結構。それじゃあ行くとしようか」

「え？ どこへ……ですか？」

エヴァの手を引き立ち上がるマステマ。

「どこへって……まあ適当な部屋さね。ここでもいいけど恥ずかしくない？」

「え？ え？」

状況が読まないエヴァ。アルカはまさか……と顔を赤くする。

「何って契るに決まってるさね。こういう契約は古来から変わってないし、天使も悪魔も関係ない。アルカ坊やも契ったろ？」

一気に視線が集中するが目をそらす。

「あたかも久々だし燃えるねえ」

「え、契るって……えと、その……」  
「情交、交尾、性交、エッチ。……もしかして経験ない？」

あまりにストレートな物言いにエヴァとテオドラが噴出し皇帝は苦笑いした。グランも興味津津といった顔でアルカを見ている。

そしてラカンは何とも筆舌に尽くしがたい変態的な顔でアルカを見つめていた。『いつの間に大人になりやがったんだ？ ムハハハハ！』と言った表情で鼻息も荒い。アルカにはひたすら目をそらす事しかできない。

「まあ色々やりようはあるけどこれが一番手つとり速いし。痛くない、むしろ気持ちいいから安心して」

「あ、ははははは」

覚悟を決めたエヴァは赤いのか青いのかよくわからない表情で冷や汗を流しまくってる。

「あ、一つ忘れてた。昇華するにあたって古い名を捨てて新しい名を与えないといけないさね。今の自分と完全に決別する意味を込めてな。何か良い名はある？」

「名前……うん、アルカ、お前が決めてくれ」  
「僕が？」

ラカンの熱視線から逃れようとあがいていたアルカまさかの名付け親になることに戸惑った。

「難しく考えるな。アルカに名を貰った時からもう私はエヴァンジェリンじゃなくなる。世界でたった一人の、唯一の自分に成れる。こんなに嬉しい事はない」

皆の視線が集まる中アルカは考えを巡らせる。

長く闇の中を生きてきたエヴァはマステマという天使の眷属になる。人造精霊から天使へと生まれ変わる。六百年の歳月をかけ、ついに彼女は光の中を生きれる。

何か相応しい名前はないだろうか？ ……長年呼んでいたエヴァと似た響きの……。

「イヴ。イヴって名前はどうか？」

「イヴ……知恵の実を食べた人類の祖か……気に入ったよ。ありがとう、アルカ。今後、私はイヴと名乗る事にする」

エヴァンジェリン改めイヴ。新たな名を得た彼女はとても晴れやかな顔をしていた。

「素敵な名前じゃないのさ、イヴ。今後はイヴ・アンゲルス・キティ・マステマとお名乗り。キティは可愛いから残しときな。あたいの名を入れたのはイヴ、あなたがあたいの眷属という証だよ。あなたはあたいの娘のような存在になるんだからね？」

「はい……ありがとうございます」

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マグダウエル改め、イヴ・アンゲルス・キティ・マステマ。

「それじゃあお楽しみといこうか」

「うっ……あの、初めてで……優しく……」

意気揚々とイヴを抱え上げたマステマは鼻歌交じりで食堂を出て行った。これから契るのだろう。

「さて、エヴァじゃない……イヴの問題は片付いたな」

「うん……よかった」

和やかなムードが漂う中がっしりと肩を掴まれるアルカ。

「……あれ？」

「さて、誰と契った？ 誰とやったんだ？ 詳しく聞かせるよ？」

「そ、そそそそそうじゃ。こんな可愛い顔して一体誰と！？ わ、妾だって経験がなっゲフンゲフン！」

「大体予想がつくけどね……」

目を輝かせているラカンといい感じに壊れているテオドラに捕まった。

グランは想像付いているみたいだが、その想像通りで間違いない。なんせ彼はあのA・O・Dの一員だ。誰が一番アルカを喰いたがっていたか知っている。

「ふむ、ワシも興味があるのう？ かか、一体誰がお相手なのかな？」

「こ、皇帝陛下まで……」

アルカに逃げ場は無いし味方もいない。

孤立無援孤軍奮闘。さて、どうしたものかとアルカは盛大な溜息を吐いた。

## Eve (後書き)

本体と差別化を図るために名を変えました。

アンゲルスはラテン語で天使という意味です。

キティは外したくなかったから残しました。キティっていう名前エヴァに合っていて可愛いですよ。

## イヴのお使い（前書き）

そろそろ原作キャラが大量に出始める頃です。

## イヴのお使い

ポンポンと肩を叩かれザジは目を覚ました。

ルームメイトはおらず、春休みに尋ねてくるような人物に心当たりはない。

しかし目に飛び込んできたのはよく見知った顔だった。

「久しぶりじゃないかザジ。どうだ？ 学生生活は満喫しているか？」

「……エヴァンジェリン？」

エヴァンジェリン、闇の福音。話したことはないがクラスメイトである。

そしてザジのよく知るエヴァは厳密には本人ではなくエヴァのコピーである人造精霊だ。ザジは自分の正体や知識を隠しているので麻帆良にいるエヴァ本体が尋ねてくることなど無いはず。

しかし魔法世界にいる精霊エヴァが麻帆良にいるのはおかしい。しかもこのエヴァ、幻術を使っているのかザジの知るエヴァよりも成長している。

小さかった身長もザジを追い越す程度まで伸び、ぺったんこだった胸もザジを圧倒するほどに豊だ。そして可愛らしかった顔立ちは成長することでもんでもなく綺麗になり、同性のザジから見ても息を呑むほどに妖艶で美しい。

「説明が面倒だな……おい」

「なんです……むぐう！？」

不意打ち気味にザジの唇を奪う。するとエヴァの記憶がザジに流れ込んでいく。そしてザジは状況を理解した。



「……いきなり乙女の唇を奪うのは止めた方がいいですよ、エヴァ……いえ、イヴ」

「くくく……いや、すまんすまん。だがこっちの方が手っ取り早かっただろっ？」

悪戯が成功したように笑うイヴにザジは苦笑する。

しばらく合わないうちに少し性格が変わったみたいだとザジは感じた。

「成長したら反則気味の美貌ですね。羨ましいです」

「くくく……マステマ様の眷属になって、見た目が成長する特典があったのなど嬉しい誤算だよ。なんせ六百年も幼女だったんだ。幻術で大人に化ける事は何度があったが、むなししい幻ではなく現実に私は成長した。くくく……エヴァンジェリンが私を見たらどんな表情をするのか楽しみで楽しみでならん。ほら、見てみるこの胸を！ 順調に成長すればとんでもなくいい女だろっ私は！」

ぐいぐいとザジに胸を押しつけ笑うイヴ。

ザジは師のかつてないテンションについていけなく苦笑するしかない。

「さて、すぐに本題に移ろっ。わざわざガアプ殿に送ってもらったのだからな、遊びにきたわけじゃない」

イヴは懐から一枚の封書を取り出す。帝国の紋章が押された封書を。

「こんこんとノックをする音が響く。」

「お客さんみたいやえ？」

「そうね、誰かしら？」

朝食を頂いていたこの部屋に住む二人の女生徒は首を傾げつつもドアに向かう。

「はい……つて、ザジちゃん!？」

「えっザジちゃんなの!？」

ドアを開けた美しい黒髪を持つ日本人形のように美しい少女、近衛木乃香は思わず大声を上げた。その声を聞いてルームメイトの少女……アスナ、神楽坂明日菜も大声を上げる。

二人はザジはとても無口で変わった子という認識しかない。あいさつ程度は交わしたことはあるが、ほとんど会話らしい会話など交わしたことがなかった。決して嫌いではないが、こうして休みに尋ねて来るほど親しい関係ではなかった。

「……どうも」

「あ、えと……とりあえず上がってや？ 朝ご飯まだなら一緒にどうやるか？」

「ありがとうございます。ごちそうになります」

「え、ええんよ! さ、上がって上がって(ザジちゃんの笑顔初めて見たえ。かわええなあ)」

早朝から部屋に上がり込んだザジ。少々迷惑かもしれないが今の彼女にそんな事を考える余裕など欠片ほども存在しなかった。

頭の中は弟のように可愛がった飯の主の事で一杯だった。

麻帆良に編入するために別れてもう少しで一年近くになる。夏休みも麻帆良に留まったため、それだけの期間ザジはアルカに会っていない。

でも、二年に上がると同時にアルカがやってくる事は知っていた。もとよりそういう予定だった。

それでもこうしてアルカがやってくる布石を打つために使者がやってきて、もうすぐ会えると実感し心躍る。

師であったエヴァの人工精霊が天使になっていた事は心底驚いたが、幸せそうなイヴの笑顔を見るとザジまで嬉しくなる。ほんの数十分話したただだがイヴは頻繁に笑顔を見せた。笑顔事態見る事が稀だった以前からは考えられない。もう完全に別人に見える。

イヴの記憶でザジと別れてからの様子を知る。ザジはアルカやグラン同様、エヴァとラカンに師事し鍛えられていたが卒業認定を受けていない。ここにきて二人に大きく差をつけられた事を知り悔しい。

従者は主を守る存在だ。だがどう考えてもザジよりアルカの方が実力的に上だった。

イヴから流れ込んできた卒業試験の映像はそれほどまでに凄まじかった。

思いだしたら体が熱くなり、疼く。

(ああ……あの小さな男の子があんなにも逞しく成長して……)

「朝早くに押しかけてごめんなさい」

「そ、そんな事気にしてないわよ！　ね、木乃香！」

「そうやえ！　遊びに来てくれて嬉しいくらいや！」

テオドラと同じく乙女の顔になりそうなところを必死でこらえポーズカーフェイスをキープ。何でも無いように話しかける。

慌ただしくザジの分の朝食を準備する二人。そんな二人を見て自然と頬が綻ぶザジ。

そしてそんなザジの様子が珍しく、何か小動物でも見るような顔になる明日菜と木乃香。朝早くから結構力オスな空間が出来上がっていた。

「ご馳走様、とても美味しかったです」

「そ、それはよかったです！」

「今度は私が食事に招待しますね」

「ザ、ザジちゃんって料理出来るの!？」

「はい、手料理を食べてもらいたい人がいるのでかなり練習しました」

ザジの発言に『きゃー！ 男の子なんかな？ 男の子なんかな？』

『そうよ！ きつとそうよと！』と盛り上がる二人。そして二人の予想は間違っていない。

「あ、変な感じに盛り上がってゴメンね？ 私と木乃香に用事があったのよね？」

「はい、神楽坂さんと近衛さんに取り次いで欲しい人がいるんです」

「あかん、ザジちゃん堅苦しいわあ。名前で呼んでや？ 明日菜もええよね？」

「もちろんよ！ 私の事は明日菜って呼んでね！」

「……………ありがとう。明日菜、木乃香」

ザジスマイルにたじろぐ二人。普段無表情な分こうして笑顔を向けられると何だかドキドキとしてくる。

「取り次いで欲しい人は近衛学園長と高畑先生。ちよつと緊急の用事なんです。出来るだけ早くこの手紙をお二人に届けてくれませんか？ 私はお客様のお相手をしなければいけないので手が離せないんです」

そうして二通の手紙を取り出すザジ。

「大事な用なんか？ それなら急いだ方がええやるな。ウチならお爺ちゃんのプライベートな連絡先も知つとるし」

「私も先生の連絡先なら分かるわよ。電話とか滅多にかけないけど、海外とかにいなかったらすぐにでてくれると思うわ」

タカミチの話題になると少し照れくさそうになる明日菜を見てザジは苦笑する。

明日菜は明日菜だ。ザジが出会ったときから既に彼女はマンガに出てきた通りの性格の彼女だった。

おじさま趣味で、快活で明るく運動能力が高くちよつぴりバカ。

やはり彼女は神楽坂明日菜であつて、アルカの大好きなお姉ちゃんではなかつた。

アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアはもう居ない。

アルカは過去を忘れ平穩に生きる彼女をとても喜んだが、ザジはほんの少しだけやるせなく思う。

「うん、確かに手紙はあづかつたえ」

手紙を渡し、二人に頭を下げ部屋を後にするザジ。今度ゆつくりと遊びに来るといい残しイヴを待たせている自室へと戻つていった。

「ザジちゃん、お客さまのお相手せなあかんのにここで朝ご飯食べ

てよかつたんやるか？」

「さあ？ でも思ったより話しやすい子だったわね、ザジちゃん」

二人は閉まったドアを眺めて笑い合った。

「……この手紙は誰から受け取ったのかの？」

「ザジちゃんやえ。なんか急ぎの用事みたいやったけど」

「ザジ君がかい？」

ザジを見送った後すぐに祖父である学園長に連絡を取った木乃香。丁度タカミチも一緒に居るらしいので二人はすぐに学園長室へと向かった。

「そうです。珍しく私達の部屋を訪ねてきて……」

明日菜が不安そうな顔で言う。

何故なら手紙を受け取った瞬間に二人の顔色が急変し、今まで見た事も無い深刻な顔になったからだ。

「あいわかった。フオフオフオ、御苦労じゃったの二人とも。手紙は確かにうけとったぞい。さ、せつかくの春休みなのじゃから帰って遊ぶなり二度寝するなり好きにするといいぞい」

「え？ は、はい……じゃあ失礼します。行こう木乃香」

「うん。それじゃあ失礼するえ」

ぺこりとお辞儀をして退室する二人。

ドアが閉まった瞬間に更に深刻な顔になる学園長とタカミチ。

「ザジ君か……超君と違い魔法世界からやってきた事は把握できておったが」

「まさか帝国とこんな深い関係があると思いませんでしたね」

学園長には非公式ながら皇帝直筆の親書が、タカミチが受け取った封筒には二通手紙が入っており差出人は驚くことにジャック・ラカンとテオドラ皇女だ。

さらに驚愕することに三人の手紙には幾度となく『友人であるザジ』といった言葉が出てくる。魔法世界最大国家の主とその第三皇女、更に大戦の大英雄の友人とは一体ザジは何者なのかと二人は頭を抱えた。

「しかし……皇帝が僕等にコンタクトを取るとは珍しいの。一応麻帆良はメガロメセンブリアの下位組織なのじゃが」

「それだけ重要な人物ということでしょう。テオドラ様はともかく、ラカンさんがこうして手紙を書くなんて一大事です」

手紙の内容は要約すれば麻帆良に一人留学生を送りたいというシンプルなもの。しかし、タカミチのクラスにねじ込んでくれと言う少々無茶な注文がついていたが。

関東魔法協会の頭として帝国との不仲は避けたい。なによりタカミチを信頼しているからこそタカミチのクラスに入れさせたいと言われれば無下に断る事も出来ない。

なにしろ直筆の手紙まで受け取ったのだ。タカミチからしてみたらその信頼に応えたい。

「そうじゃな、男女共学移行のテストケースとでもしておこうかの。無茶苦茶がまかり通るのが麻帆良じゃからまあなんとかなるじゃろ」

かなり駄目な発言をした学園長にタカミチは苦笑するしかない。

「そうとなればザジ君の部屋におるといふ使者殿を迎えねばならぬの。それから魔法先生と生徒に招集をかけねば。場所はここでもいいじゃろ。タカミチ君は連絡を頼むぞい。僕は使者殿の所へ」

「了解しました。帝国の使者から話があると言えばすぐにでも集まると思います」

「善は急げじゃ。早めに事を終わらせて使者殿を昼食にでも誘うとしよう」

タカミチは緊急招集の知らせのため学園内を駆け回る。

そして使者を迎えに行った学園長は使者を目の当たりにして驚きのあまり顎を外すのだった。



## イヴのお使い（後書き）

もうちょいでアルカ転入ですよ。

ネギが来るまではまだかかります。

ちなみにメインヒロインはクラスメイトにいますよ。

## 会合前（前書き）

イヴとエヴァの本格的な絡みは次回です。

## 会合前

学園長室にはかなりの人数が集まっていた。

魔法先生と魔法生徒、本日集まることが可能な者全員が集っている。

緊急招集とは何かあったのかと一部不安げな表情なものもいれば、お祭り騒ぎ気味な者もいる。その中でも一際苛立った表情の者が一人。

「まったく、タカミチの奴め……人が寝ているところ無理矢理引っ張ってきて……この後どうしてくれようかあの老けメガネめ……！」

「ケケケ、イラダツテンナ、御主人」

「ああマスターそんなに苛立っては体にさわります」

動けないチャチャゼロを頭に寄せ、殺気を全力で振りまいているのはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。闇の福音と恐れられる悪の大魔法使いだ。従者である茶々丸はエヴァの隣でオロオロしている。

最弱状態でもにじみ出るエヴァの殺気はとてもおっかなく、周囲にいる人間を震え上がらせていた。

特に彼女のすぐ隣に立っているシスターは深刻でもう泣く寸前だ。シスターの名前は春日美空。エヴァンジェリンのクラスメイトでもある。

本来まだまだ未熟で魔法生徒としても活動していない彼女だが、師であるシスターシャーケティに引っ張られ、仮の主であるココネとともに学園長室に連行された。

学園長室に入り、そうそうたる面子を目の当たりにし、なんだか面白いことが起こりそうだとわくわくしていたところにこの殺気だ。

クラスメイトがあのお伽嚙に出てくる闇の福音と知り驚く余裕さえもない。魔法に関わっていないながら平和に過ごしてきた美空にこれはキツイ。歴戦の猛者ですらたじろぐレベルなのに、逆に良く耐えていると褒めるべきなのかもしれない。

（美空………運がなかったな）

（私でもあの殺気には震え上がります。それを真横で受けるとは………ご愁傷様です）

およそ中学生とは思えないとても大人びた見た目をしている褐色の少女は龍宮真名。その隣にいる黒髪の細身の少女は桜咲刹那。共に美空とエヴァのクラスメイトだ。

二人は何度か死線を潜っている身だが、それでもエヴァの殺気には気圧される。それを間近で浴びている美空や他の人達は生きた心地がしないだろう。

二人は美空の不運に心の中で合掌した。

「さて、今回皆に集まって貰ったのは他でもない。非公式ながら現在麻帆良にかのヘラス帝国からの使者がやってきておる」

学園長の言葉で一斉にざわつく。

本国出身者意外や魔法世界にあまり関わりが無いものはイマイチといった反応だが、それ以外の者はかなり驚いている様子だ。

「龍宮、それほどすごい事なのか？」

「中国を凌ぐ領土を持ちアメリカ以上の軍事力を保有している国から大使がやって来たと思えばいい」

「それは………一大事だな」

魔法世界の事情に詳しくない刹那に説明する真名。その的確な説

明に瞬時に納得する刹那。

「っち、それで何で私が呼びつけられたんだ？ 帝国の使者だろうが何だろうが知ったこっちゃ無い」

「ケケケ、オイ、オマエダイジョウブカ？」

「あ、あはははは．．．．．人形に心配されてる？ 正直、限界つす．．．．．」

あまりの美空の有様にチャチャゼロが心配するという珍事が起こる。ちなみにココネはシスターシャークティにしがみついて震えている。

「エヴァ、殺気をおさえてくれよ。僕でさえちよつと冷や汗が出てくる」

「うるさいぞ。帝国も連合も知るか！ 私は眠いんだよ！ そしてお前は何で私にタメ口なんだ!？」

「それはほら、同級生だったころの癖でさ」

怖さMAXのエヴァと平然と話すタカミチに尊敬の眼差しが集まる。

「エヴァよ、遊ぶのはそろそろ止めてくれんかの。使者殿を待たせておるんでな」

「誰が遊んでいるんだジジイ！ そもそも私がここにおいて大丈夫なのか？ 私がここにおいても悪印象になるだけだろうが!」

「何だかんだ言ってもそういつて心配するあたり根っこはお人よしですね」

「なんだと!？」

お人よしなどと言われ顔を真っ赤にして声の方を向く。

エヴァンジェリンだけではなく他の面々も声の方を向く。

そしてエヴァンジェリン、真名、刹那、美空、1 - Aの生徒は驚き固まる。同じく1 - Aの生徒である茶々丸も反応は薄いが驚いているようだ。

「こんにちは」

にこやかに手を振っているのはザジ・レイニーデイ。

普段あまり口を開かない彼女が喋る事も驚きだが、エヴァンジェリンに向かって笑顔で手を振るなど彼女のキャラではない。

「な、貴様つ何故ここに……！」

「ザジさん……裏の関係者だったのですか!？」

「そうか、気がつかなかったな……」

「うう……エヴァンジェリン怖いよお……」

若干一名違うリアクションをとっているが、驚いている事に違いは無い。

「それは彼女が使者殿との橋渡し役だからじゃよ」

「そういう事です」

学園長の隣へと歩いていくザジ。

刹那や美空と違い、あるていど魔法世界に関わりを持つ真名は帝国と繋がりがあるクラスメイトに驚いているようだ。それは真名に限った話ではないが……。

帝国の使者と麻帆良の橋渡し役。つまり帝国に深くかかわっているという事だ。まさかそんな大物が生徒として麻帆良に通っているなど夢にも思わないだろう。

「ザジさんと言ったかしら？ 貴女は帝国とどのような関係があるのですか？」

発言したのは聖ウルスラ女子高等学校二年の高音・D・グッドマンだ。

本国で暮らしていた経験もある彼女はあの大国と深い関係を持つザジに興味が出てきたみたいだ。

そして興味を持ったのは高音だけではない。皆ザジに注目している。

「そうですね、私は高畑先生と同じくテオ……テオドラ第三皇女殿下の友人です」

「テオドラ様の……」

タカミチにも視線が集まる。タカミチは少し困った風な表情で頬をかいていた。彼もまたテオドラの友人に違いない。

「具体的に言うと一緒にお風呂に入って体を洗いつこする仲です。

高音先輩と佐倉愛衣さん、夏目萌さんの関係と同じですね」

「ちよっ!?!」

「ふえ!?!」

「ええっ!?!」

突然のザジの爆弾発言に顔を真っ赤にする高音とその従者である愛衣と萌。そんな従者に視線が集中する。

「高畑先生はロリなテオしか知らないかと思いますが、成長した彼女はそれはもうバインバインですよ」

「そんな報告しなくていいからね!?!」

ザジが登場してから学園長室内の空気がおかしくなった。

「なあ、私が気付かなかっただけで、ザジってもしかすると面白い奴なのか？」

「話した事はなかったけど……あんなキャラだったんだな」

「うう……エヴァンジェリン怖いよお……」

予想に反して愉快な人だったザジを見て顔が引きつる真名と刹那。そして若干一名まだ壊れている。

「ザジ君……そろそろ」

「そうでした、使者殿を待たせているのでした」

荒ぶるエヴァと場をひっかきまわしたザジのせいで使者を待たせている。

中々失礼な行為だが、使者が使者だけに全く気にしないだろう。

「ゴホン！ 皆、静粛に！ エヴァ、何がっても取り乱すではないぞ？」

「わかったから早くその使者とやらを呼べ、私は眠いし昼間は歩きたくなんだよ！」

「カフンガツライキセツダカラナ」

「ああマスター、あまり叫んでは……」

ぎゃあぎゃああと騒がしいエヴァだがすぐに硬直する。

信じられないものを見た、という目である一点を見つめてぽかんと口を開けて動かない。

ザジが扉を開けて手を取りエスコートしてきた帝国からの使者。



その使者を見た瞬間に室内は大きくざわつく。

皆が皆、信じられないような表情でその使者を見つめる。

「こちらがヘラス帝国からの使者です。この度、皇帝陛下からの親書を携えてはるばるやってこられました」

ザジの説明を受け、にこやかな笑顔を浮かべた使者……イヴは心躍らせながらゆっくりと学園長の隣まで歩を進めた。

「初めまして麻帆良の皆様方。非公式ながら皇帝陛下下の勅命を受け使者としてこの地に赴いた。私の名前はイヴと言う。麻帆良の皆様とは良き関係を築けて行きたいと思っている。どうかよろしく頼むよ」

にやりと笑うその顔は誰かに似ていた。

皆エヴァとイヴを見ている。

「貴様……まさか巻物の？ 何故帝国の使者などとたわけた事をやっている!？」

「くくく……半分正解といったところかなエヴァンジェリン。チャチャゼロ、久しぶりだな。元気だったか？」

「ゲンキ、トイウカ、ウゴケナインダガ……ドーナツテヤガンダ？」

「マスターが二人？」

混乱が収まらない中、帝国の使者との会合が始まった。

会合前（後書き）

美空の書きこくをたぬ時。

## イヴとエヴァ

「馬鹿なっ！ エヴァンジェリンだと!？」

イヴの姿を見て何人かの魔法先生が身構える。

各々の魔法媒体を取り出してイヴに付きつけようとするが……。

「期待通りの反応だな正義の魔法使い共」

にやりと笑いイヴはくいつと片手を動かす。

「うわっ!？」

「えっ!？ 勝手に……!」

身構えた数人の魔法先生は二人の魔法先生によって瞬く間に触媒を取り上げられる。

しかし、触媒を取り上げた魔法先生……瀬流彦と葛葉刀子は真底驚いた表情をしている。特に瀬流彦は普段ではありえないくらい俊敏な動きを見せた。

「くっ……瀬流彦先生、どういっつもりですか!？」

「あ、あのですね、体が勝手に……!」

銃を蹴りあげられたガンドルフィーニは手を押さえながら瀬流彦を睨む。

しかし、正直一番テンパっている瀬流彦は混乱気味で上手く説明できない。

「やれやれ、帝国の使者に武器を向けるなど……部下の躰がなっ

いないな学園長？」

わざとらしく溜息を吐きオーバーリアクション気味で呆れて見せるイヴ。

「む……それはすまんかった、儂の落ち度じゃ。ここは一つどうか穏便に頼みます」

深々と頭を下げる学園長を見て先ほど身構えていた連中は悲鳴のような声を上げる。

「なにをしているのですか！？ 闇の福音に頭を下げるなど……！」

そしてそんな反応をする正義の魔法使いをみて更に呆れ返るイヴ。

「無礼だな、私はイヴだと名乗ったろうが。闇の福音はその幼女だろう？」

イヴはエヴァを指さす。そして幼女呼ばわりされたエヴァは顔を真っ赤にして叫ぶ。

「誰が幼女だ誰が！ それなら貴様だって幼女だろうが！ その姿は幻術だろう！？」

「残念ながら幻術ではないんだよキティちゃん。残念だったな、お前は永遠に幼女だがご覧の通り私は立派な”女”に成長した」

「その名で呼ぶな！ それに貴様だってキティちゃんだろう！？」

「ああ、間違いなく私はキティだよ、あの人が可愛いと言ってくれたので気に入っている。もっとも、外見でいえば私よりお前の方が似合っているけどな。可愛いぞ、キティちゃん？」

「……！ このっ！」

言い争い……と言つべきか、エヴァが一方的にやられている感じだが、二人のじゃれ合いは続く。

「龍宮……さっきのアレは一体……？」

「おそらく糸をつかつて先生達を操つたんだろう。ドールマスターと言われるほどだからできない事はないのだろうけど……実際に目の当たりにすると言葉も出ないな」

言い争いをする闇の福音（小）と闇の福音（大）のせいで一端は静まり返っていた室内もまた騒がしくなった。

「正解だよ龍宮真名。もつとも、流石に葛葉刀子の神鳴流の技の再現はできないがな」

小声で話していたにも関わらず、会話に割り込んできたイヴに驚く真名と刹那。

イヴはそんな二人……いずれアルカのクラスメイトになる二人を見て優しく微笑む。

そしてそのイヴの微笑みを見て皆息を飲む。

タカミチや学園長は目を見開いて驚き、エヴァは羞恥で顔を更に赤くする。

まさに天使のような笑顔という言葉が相応しい、温かで優しい笑顔だった。

「ケケケ、アイツ、絶対二御主人ガシナイ笑顔浮かベテヤガル」

「ああ……大きなマスターも可愛らしいです」

このエヴァの従者二体が室内の全員が思った事を代弁していた。

「きつ……貴様、誇りある悪であるこの私の分霊体があのような表情を……！」

「くくく、確かに以前はそうだったさ。言わばお前は私の生みの親……つまりはママだな。そんな口リな見た目で母親などなんかこう、犯罪的だな？」

「うるさいわっ！ 好きで幼女やってるんじゃない！ ママ言うな！」

さつきから叫びっぱなしのエヴァ。そして幼女を否定するのを忘れてる。

「だが！ 今は違う。私はエヴァンジェリン、アタナシア、マクダウエルの名を捨てた。そして同時に闇の眷属では無くなった。もう私はお前とは全く別の存在になったんだよ、ママ」

「……どういう事だ？ そしてママは止める！」

「こういう事さ」

悪戯っ子の様な表情を浮かべ、イヴは隠していた魔力を開放する。圧倒的な強大な魔力。温かで、どこか神々しさすら感じる。そして魔力の解放とともに現れた純白の翼に皆釘づけになる。

「シスターシャークテイ、アレ、本物？」

「キレイ……」

正気に戻った美空はおそらくそういた事に詳しいであろう師に尋ねる。ココネは美しい翼に眼を奪われているようだ。

「……実を言うと私も本物を見るのは初めてですが……どうやら間違いないようです」

美空やココネはシスター見習いだが、その師であるシャークティは違う。

彼女はロザリオを握りしめ、鳥肌を立てながらイヴを見ている。彼女でさえ本物の天使を見るのは初めてなのだ。いや、天使を見た事がある人間の方が稀有だろう。

「ば……か、な……」

呆然と立ち尽くすエヴァ。

イヴの言った、もうエヴァとは別の存在になったという証を見せつけられて混乱しているようだ。

「白い……翼……」

刹那はイヴの翼を見て震えていた。白い翼は彼女にとっていい思い出が無い。

そしてイヴはそんな刹那に優しく微笑む。イヴはマンガでの未来知識がある。

刹那の過去を……忌み嫌っている自らの白い翼を、そして訪れる彼女の温かな未来を。

遠くない未来……優しい時間に身を置く彼女を想い、イヴは微笑む。

刹那は笑みを向けられて焦っていたが。

「くくく……御覧の通り私は世間一般的で言うところの天使に当たる。まだ見習いだな。天使がカソックにいるのもおかしな気がするが……。それで、お前達はヘラス皇帝の勅命を受けた大使であるシスター姿の天使魔習いな私に武器を突き付けたわけだが……戦争でもしたいのか？ え？ ガンドルフィーニだったわけか？ お前は

「どう思うんだ？」

「それは……」

ガンドルフイーニは苦虫を噛み潰した表情でたじろぐ。

「ふん、天使である私は心が広いから目を瞑ってやる。同じ麻帆良の魔法先生が鎮圧した事だしな？」

実際にはイヴが糸で操ったのだがここは話を合わせるのが賢明と言う物。

「まったく、それでも私は人気があるんだぞ？ 最近ファンクラブまでできたからな」

「さて、貴様何を言っているんだ？」

エヴァがこめかみを押さえながら言う。ひどく疲れた表情だ。

「私は天使見習いだから修行として善行を積んでいる」

「善行……だと？」

「そうだ。公園でゴミを拾ったり、孤児院で絵本を読んだり、老人ホームで御老人達と料理を作ったり……」

「ちょっ！ やめ、やめて！ 私のイメージが！？」

いじめっ子な表情なイヴと慌てふためくエヴァ。

「子供たちから手紙や似顔絵など貰ったりしている。私の宝物だ」  
「だから止めてっば！？」

場の空気は完全に壊れた。

なんだかほのぼのとした雰囲気で闇の福音（小）と闇の福音（大）



のやりとりを眺めている。

「老若男女問わずに人気があるんだぞ？ テオドラが冗談半分でファンクラブを作ったら結構な数の有志が集ったよ。ああ、私は見ての通り大人の女だからロリコンの集まりではないぞ？」

「くっ……何だこいつは……完全に私じゃない……！ 一体どこで変態したんだ！？」

エヴァはついに頭を抱える。

「くくく……子供たち以外からは特にオスティア出身の御老人から人気があるんだ。テオドラやラカン曰く、私は良く似ているらしいからな？ ……のうタカミチ、そんなに妾と似ておるか？」

「……！？」

わざと口調をかえるイヴ。似ている……確かに似ているのだ。だからこそタカミチは凍りついたように固まってしまっ

「くくく……彼女とはお前も友人だったからなあ赤き翼の高畑・T・タカミチよ。お前まで似ていると思うのなら、本当に似ているのだろっな。まったく、一体どこに居られるのやら」

溜息を吐いて見せるイヴ。その口の端は釣り上がってる。

場の空気は完全にイヴが支配していた。

## イヴとエヴァ（後書き）

まったく話が進んでいないな……。

## 厨人形

「さて、話が逸れたが本題だ。私が麻帆良まできたのは他でもない、ヘラスからの留学生を受け入れて欲しいからだ。」

これはヘラス帝国というより皇帝個人としての頼みだがな」

話を戻したイヴはやっと本題に入る。

留学生の受け入れとは思っていたより大きな話ではなかった。

魔法世界出身の生徒もいるし別段珍しい事ではない。

「ちょっとした訳ありの子でな……つまらん風習の被害者だ。あの子自身はとても素直で可愛らしい子なのだが……」

イヴの隣でザジがこくこくと頷いている。

訳あり、という言葉に反応するがそれは予想通り。どれだけ反対されようが留学は認めさせる。

否、既にイヴに武器を突き付けたという事実がある麻帆良は否応なしに要求を飲まなければいけないだろう。

交渉は既にイヴの勝ち。それでも話を続けるのは少しでもアルカの印象を良くするためだ。強引に決めたのならやはり不満を持つ者が出てくるだろう。そして不満を持つ者は決してアルカをいい目で見ないだろう。そうしたらアルカが不快な思いをしてしまう事は確実。イヴはそんな事は許せない。

「いわゆる忌み子という奴なんだ」

忌み子という言葉に刹那が大きく反応する。

「あの子はそのつまらんしきたりの被害者でな。言われなき中傷に

合い実の両親から迫害され監禁されて……」

段々空気が重くなっていく。他人の不幸話など聞いていて面白いものではない。

「……」

「……」

刹那は鼓動を早くし、冷や汗を流しながら話を聞いている。

先ほどまで騒いでいたエヴァは黙りこんで静かに話を聞いている。生まれながらに不幸を背負った子供には親近感がわく。他人とは思えないのだ。

「実の両親は既に死に、妹とも行き別れという状態ではあったが幸いなことにテオドラに保護された。……安心しろ佐倉愛衣、大事はなく元気だったさ。お前は優しい子だな」

「あ、はい……」

泣きそうな顔をしていた愛衣に笑いかける。麻帆良は先生はともかく生徒はいい子が揃っているなとイヴは安心した。

「保護されてからは非公式ながら皇帝陛下が後見人となってな。テオドラが教師役を務めて私やラカンが遊び相手になって過ごした」

ラカンという大英雄の名が出て麻帆良の教師生徒が大きく反応する。

「ラ、ラカン様といったらサウザンドマスターのライバルであった！？ す、すごいですわ！」

「すごい大物の名前ばかりだな」

高音が声を震わせ、真名があまりのネームバリューに若干呆れ気味になる。

「忌み子である事がばればまた言われなき迫害を受けるだろう。魔法世界でなら尚更だな、今は落ち着いているとはいえあそこは未だに亜人というだけで見下す馬鹿も大勢いる。そんな中にあの子を置いておくのは心配でな。」

メガロメセンブリア、特に元老院のゴミ虫共は信用ならんが麻帆良は別だ。戦力も申し分ない。正直麻帆良は魔法世界のどこよりも安全だろう。だからこそ信頼してあの子をここに預けたい。

これは皇帝だけではなくテオドラやラカン、もちろん私の願いでもある」

エヴァをからかっていた時とは別人のように真剣に話すイヴに皆段々引き込まれていく。

「髪の色を変え、目の色を変えて、あの子は忌み子である事を隠して生きている」

「……っ！」

イヴの言葉を聞き大きく息を飲む刹那。

あまりに自分に似た境遇で驚いている。刹那もまた髪の色と目の色を変えているのだから。

「来期、春休みが終わり次第麻帆良で受け入れてもらいたい。こちらの我がままだがタカミチのクラスを希望する。受け入れてもらいたいものは男子だがな」

男子を女子クラスに入れると言う要求に一同困惑する。

特にタカミチのクラスに所属している五人の困惑は酷い。話を聞く限り皇帝が非公認の後見人であったりとかかなりの重要人物である。そんな帝国の要人を受けいれる、それも男子をだ。

留学を受け入れるのはまだ理解できる。しかし、女子クラスで受け入れるのが理解できない。

「そしてザジと同じ部屋にしてほしい。女子寮が無理なら職員寮の一室を開けてくれるとありがたいな」

「ザジさんと同じ部屋ですか？ でも、その……留学される方は男の人なんでしょう？ ですから……」

「間違いがあつたらどうするかと言つのか高音・D・グッドマン。顔に似合わず思考がエロだな。これが思春期か……」

「ちよっ！ 私はそんな！」

顔を真っ赤にして否定する高音を見てイヴは意地の悪い笑みを浮かべる。どうやら人をからかうのが好きらしい。エヴァと違い気さくで親しみやすいが中々の困ったちゃんだ。

「それには心配およびません」

そう言いザジが取り出したのは一枚のカード。

「それは……パクテイオーカードじゃな」

「その通りです学園長先生。見ての通り私は彼の従者です。間違いがあればその時は本契約を交わすだけです。大丈夫です。むしろその方が都合がいいというものです。本契約……ああ、なんと甘美な響きなのでしょうか」

「ザジ、鼻血鼻血」

「え？ ああこれは見苦しい所を……」

イヴから手渡されたハンカチを鼻にあてがう。  
ザジの無口クールなキャラは完全に壊れた。クラスメイトと担任はそんな彼女を見て顔が引きつる。

「帝国の要望は以上だ。ザジとの同室を希望したのは二人が主従の関係だから、タカミチのクラスを希望したのはタカミチを信頼しているのはもちろんだが万が一があった時に護衛対象が纏まっていた方がいいだろう？ ザジも所属しているしな」

「ふむ……護衛対象とは誰の事かろう？」

「お姫様達の事に決まっているだろう。お前の孫娘は正しく関西魔術協会の姫君だろう？ それだけではない。雪広の娘など表の重要人物や裏の関係者達……あそこは色々と訳ありの娘が集まっている。だからこそタカミチが、悠久の風に所属する”本物”が担任をしているのだろう。無茶を言っているのは百も承知だ。この通り、頼む」  
「貴様……！ いい加減にしろよ！」

イヴは頭を下げて見せた。そこがイヴとエヴァの違いだ。

イヴは既に誇りある悪ではない。既に光の中に生きるもの。誇りも矜持も以前とは違う。大切な者の為なら頭を下げる事もいとわない。

エヴァは自分の分身と呼べる存在の暴拳に本気で怒っている。

しかしエヴァ以外人間はイヴの行動にたじろぐ。まさか闇の福音が頭を下げて懇願するなど夢にも思わないだろう。付き合いが長い学園長やタカミチもありえないものを見た、という表情で驚いている。

「まあ全てこちら側の我がままだ。見返りと言っては何だが麻帆良の戦力増強に協力しようと思うのだが」

「ほう、それは助かるの」

「くくく……では」

「オツ!？」

イヴが何かを引くような動作をするとエヴァの頭からチャチャゼロがイヴの方へと飛んで行った。チャチャゼロは今イヴの腕の中だ。

「さて、日本の皆様方、九十九神という言葉を知っているな？」

九十九神、長く使った物に魂が宿るといふ日本の伝承だ。

日本に住むものなら一度は聞いた事がある言葉だろう。

「物には魂が宿る。それは確かだ。西洋では精霊が宿るともいふな。広い意味では以前の私や図書館島の有害指定図書も九十九神の一種だ」

有害指定図書という言葉にほとんどの首をかしげるが唯一学園長だけが冷や汗をかいている。

「事、鏡や人型の物には魂が宿りやすい。現にこの六百年物の人形であるチャチャゼロには魂がある」

皆イヴに注目する。機嫌が悪くなり再度殺気をばらまいているエヴァ近辺の方々はそれどころではないようだ……。

「今のチャチャゼロの魂は幼い。亡霊以上精霊未満といったところか。もともとドール契約で生じた擬似的な魂だったからな。正直、今のように思考し明確な意志があることが凄いのだが」

「ソウナノカ？」

自分の魂の現状を聞き不思議そうな声を出す。そんなこと一度も意識した事もなかっただろう。



「くくく……さて、ここに取り出したのは一つの宝石と試験管」  
「オイ、色ガヤバイゾ……」

取り出した宝石はマグネタイト。そして試験管の中は赤黒く毒々しい液体が。宝石はともかく液体の色は相当禍々しい。

「この宝石はとある高名な大悪魔から賜ったもので……」

「おい、この天使悪魔って言った？ ねえ今悪魔って言ったよね？」  
「あああああ、言った！ 言ったから揺さぶらないでえええええ」

がくがくと隣の美空を揺さぶるエヴァ。今日は取り乱しっぱなしである。

「イヴ様……確かあなたは天使だと……」

「何がおかしいんだシスターシャークティ。貴様等人間が天使と悪魔の関係をどう思っているか知らんが……貴様等が思っているほど私達の仲は険悪ではない。プライベートではとても仲が良いぞ？ もとは同じ存在なのだしな」

「プ、プライベート……」

ガラガラと音を立ててシスターシャークティの常識やら価値観やらが崩壊した。

「とりあえず、この宝石を飲み込め」

「飲ミ込メツテ言ツテモ、俺ハ物ヲ喰エナ……モガガガガガ！」

問答無用でチャチャゼロの口に宝石を突っ込むイヴ。

「そしてこの液体を飲ませる。この液体はとある大悪魔と大天使の血液を元に造った魔法薬だ。何、害はない」

「チヨ、ヤメ……」

同じように魔法薬を口に流し込められる。

エヴァと茶々丸は家族に対するあまりに惨い仕打ちに顔を引きつらせている。

抵抗使用にも動けないチャチャゼロは為す術が無くイヴにやりた  
い放題されている。

「さて取りかかろうか。天使が行使する奇跡というやつだ」

イヴが羽根を広げると足下に魔法陣が浮かび上がる。

関東魔術協会の長である学園長ですら見たことのない陣形だった。そして突然の展開に周りの皆は完全に置いてけぼり状態である。

「我が名はイヴ・アンゲルス・キティ・マステマ。大いなる敵意の  
大天使マステマが娘」

「マ、マステマ様の!？」

「馬鹿な、何故そのような神話級の天使が!？」

マステマは強大な力を持つ天使だが、ネームバリューはウリエル  
やラファエルと言った有名どころに劣り知名度は余り高くはない。

しかし本職のシスターであるシャークティや六百年間知識を蓄え  
続けたエヴァは知っていた。故に取り乱す。

人に関わる下級天使どころではない。人の力が遠く及ばない圧倒  
的な上位存在だ。

「マステマによって人造精霊から天使になったとでも言うのか？」

ありえん……」

エヴァが言うことは尤もである。

実際に存在しているのかも分からない神話クラスの天使。そのよ  
うな存在がただかだか真祖のコピーなんぞに干渉するなどには  
信じがたい。

「色の魔王より核を賜り、闇に堕ちても輝きを失わぬ明けの明星と  
破壊の熾天使より血を賜った」

「おい、シスター。なにやら聞き捨てならない言葉が出てきたがど  
う思う?」

「信じがたいですが……天使が嘘を吐くとは思えません。  
でしたら……本当なのではないかと」

「マジか」  
「マジです」

エヴァとシャークティは顔を青くする。

イヴの言う存在の正体が分かったものは皆同じような表情だ。

「我が尤も古き友に祝福を。リク・ラクラ・ラック・ライラック・  
……」

「オ? オオオオ!？」

純白の翼を広げ光の属性の魔力をチャチャゼロに送り込む。それ  
に反応するように魔法陣は輝きチャチャゼロもうつすらと発光して  
いる。

「幼き魂よ、至れ」

「オ? ……動ケル、動ケルゾ ソレニ飛ベル! ナンダ  
コレ!？」

心なしか声が弾んでいるチャチャゼロ。嬉しそうにパタパタとい  
ヴの周りを飛び回っている。

「チャチャゼロの原動力はエヴァンジェリンの魔力。力を封印され  
ている今は指の一本動かず事も叶わない。例外的に超高濃度の魔力  
が充満している所では動けるが、ここにそんな魔力があるはずもな  
い。宝石と魔法薬、そして私の力で魂を精霊へと昇華させた。宝石  
にびっしりと刻まれた呪文と、体に染み渡り完全に同化した魔法薬  
の効力で魔力を自製できるようになった。空気中から魔力を取り込  
む事の他に、食べ物や飲み物などを体内に入れるとそのエネルギー  
も魔力に変換できるように進化した。今や完全にエヴァンジェリン  
から独立したオートマタだな」

にわかには信じられないが動き回るチャチャゼロを見ると信  
じざるを得ない。

見た目にも変化があった。瞳の色が右が銀色、左が金色に。右の  
翼が天使のような白いものに変貌している。

「今のチャチャゼロはエヴァンジェリンの従者であると同時にかの  
お方達の眷属でもある。魂は精霊のものだがな。能力も飛躍的に増  
大しているはずだし、魔法も使えるようになっていたはずだ。光の  
魔法もな」

「マジカ!？」

驚愕するチャチャゼロ。他の面々は驚くのに既に疲れ果てていた。

## 厨人形（後書き）

当初ではこんな予定はなかったのです。

イヴさんが勝つ手に動き始めました。

そしてザジがキャラ崩壊しました。ごめんなさい。

## その頃の京都（前書き）

月詠が可愛かったからプロット変更しました。

## その頃の京都

いつもの下校風景とは少し違っていた。

「なあなあかつこええなあ。顔立ちは日本人じゃないよね？」

「黒髪に黒の瞳やしなあ。あれちゃう？ ハーフとか日系なんやない？」

主に女子生徒が興味津々といった理由で校門前に立っている少年を見ている。

別に外国人が珍しいわけではない。むしろ外国人を見る機会はいだらう。京都には外国人の観光客が沢山やってくるのだから。

問題はそんな外国人が何故自分たちの学校の校門前に立っているかだ。

「誰か待つとるんやろか？」

「誰かの彼氏つちゆうことかいな。誰やその羨ましい子は」

待ち人が居ることは事実だが彼氏彼女の関係じゃない。こっちが一方的に知っているだけである。

「あ、動いたえ。あの子が彼女さんかいな」

「なんや、女の子もえらいべっぴんさんやないか。全く、神様は不公平やえ」

女子生徒の会話を聞き流しながら目的の女子生徒の方へと歩を進める。

「ほえ？　うちに何か用ですか？」

マンガの知識で容姿は知っていた。特徴といえるメガネもちゃん  
とある。

制服もよく似合っていてとても可愛らしい女の子だ。とても裏に  
生きている存在とは思えない。

「初めまして月詠さん。少しお話ししたいんだけど時間はいいかな  
？」

「……うちをその名で呼ぶあなたは裏の関係者おすな。お  
仕事の話やるか？」

「うん、裏に関わる話だよ。結構大事な話なんだけど」

「分かりました、聞きますえ。その前にあなたの名前を聞いてもよ  
ろしいおすか？　名乗れないクライアントもたまにいますから、名  
乗れないなら無理には聞きませんけどー」

「ああ、名乗らないのは失礼だったね。僕はアルカ・テオゲヘナ・  
エンテオフュシア。今は無きウエスペルタイア王国、魔法世界で  
一番古く貴い血を引く王族だよ」

アルカは隠すと決めていた身分を全て月詠に打ち明けた。

「にわかには信じられないはなしどすなあ」

「まあ僕も結構巫山戯た話をしてると自覚はあるよ」

今二人はちょっとしたカフェにいる。





「うん、報酬は弾むよ」

「ふふ……アルカはん、世の中にはお金では買えない物があるんですえ？ 少なくともこのマンガの通りに進めばうちは刹那先輩と死合える事は確定しとります。ネギ先生視点で描かれとりますからうちと先輩の詳しい戦闘描写は分かりませんけど、刹那先輩が相当お強い事は後の巻を見れば分かりますえ。うちも結構腕には自信がありますけど、先輩も相当強い。そんな機会をみすみす逃すなんて真似うちにはできまへん」

狂気表情を浮かべる月詠。常人ならここでどん引きするだろうがアルカは並大抵のことでは引いたりしない。何故ならアスモデウス以上にどん引きする行動を取る者を他に知らないからだ。彼女に比べれば月詠やラカンなどまだ可愛らしいもの。

「月詠さんは強者との戦闘を望んでいると？」

「そつどすな。うちはいわゆる戦闘狂つちゅう奴おすからな。強い人、それも可愛い女の子やったらこう、辛抱たまりまへんのや。うちと真正面から戦える者なんてそつおりまへん」

恍惚の表情を浮かべる月詠にアスモデウスの影を見るアルカ。彼女も間違いないアスモデウス系変態淑女の一人だろう。だが、そんな彼女を見て親近感を覚えてしまうアルカ。やはりアスモデウスはアルカの教育上書を及ぼしたみたいだ。

「つまり極端な話、強い者と血みどろの戦いを繰り広げられたら満足だ」

「そつおすなあ。生死を賭けた戦いなんて体がうずきますええ……」

目を潤ませてミルクティーを飲む彼女はどこか色っぽい。

「身分を明かしたのは月詠さんの信頼を得るためです。そしてあなたなら依頼主の情報を漏らさないと思っただから」

「うちも商売やから個人情報を守りますよ。その点に関しては心配せんでもよろしいおす。依頼は断らせていただきませうけど、アルカはんの情報は一切漏らしませんえ」

「いや、事情が変わったよ」

「??？」

スプーンを加えたまま首を傾げる月詠。

「月詠、僕はそなたを気に入った」

「ほえ？」

アルカの纏う空気が変わった。

「我が身は既に人外。そなたの抱える闇、狂気、しかとそれを確認した。正しくそなたは狂人だ。狂っている」

息を呑む月詠。口調も変わっているためどこかアルカに圧倒される。

敵かで心に響き引き寄せられる言葉。なるほど、確かに王族と言われれば納得できる。

「だが賞賛すべきはその強大なる精神力。その大きな狂気を理性でもって押さえつけ人に混じりトラブル一つ起こすことなく過ごしている。狂気に飲まれ無差別に人を斬りつける事もなくそなたは裏と表の生活を平然と何の問題もなくこなしている。そなたの抱える闇は大きい。生まれ持つてのものか力を持った後の事かは分からぬが、よくもまあ見事に飼い慣らしているものだ。不自由したるう？」

斬りたい欲望を理性で持って抑えつける。全力で力を振るえば大半の者は死んでしまう。手合わせをする機会などはあつただろうが、全力が出せず消化不良であつただろう？ そんな欲求不満を表に出さず、学校に普通に通い一般生徒として過ごしていく。……無邪気に笑うクラスメイトの柔肌を切り裂いてやりたいと思つたことは一度や二度ではあるまい？」

「……な」

月詠は動揺していた。

ものの見事に言い当てられていたからだ。

月詠は仕事柄妖怪などの魔は切り捨てる。しかし人は殺さない。神鳴流は人を斬る為の剣ではなく魔を斬る為の剣だ。断じて殺し屋や暗殺者ではない。

「自分を狂人であると理解しながら堕ちずに人で有り続けている。大半の者は己の闇に飲まれ人以下の畜生に成り下がる。故にそなたはとても貴い」

真顔で貴いと言われ頬をほんのり赤らめる。

「だが、そなたの狂気、以外な事に周りはずぐに勘付く。覚えはないか？ そなたに親しい者は？ 友人は？」

「……それは」

言いよどむ。

教室ではいじめられてこそいないが孤立しているし、道場で自分に話しかけてくる人もまあいない。模擬戦などでは同門からはまだしも師範からも避けられるしまつ。

……こころ当たりは大いにあつた。

「……人はそう言ったものに敏感だ。そなたはよく我慢している。が、他人はそんな事情は知ったことではない。輪からはじき出され一人孤独は辛いだろう。そなたはまだ子供なのだから。まだまだ親にも甘えていい年頃だ。だが、一度輪から外れてしまうと戻るとは困難。開き直って堕ちてしまえば楽だろうが、そなたのように理性が強ければそれも許すまい。人であるからこそ苦しむ。人でなくなったら苦しくない。」

これは師の一人が言っていたのだがな、闇に飲まれ人から堕ちるのは周りの環境がとて強く影響されるらしい。理解者の一人でもいれば踏みとどまれる。だが、独りぼつちだとあっさりと堕ちてしまふ。今まで何人も見てきたそうだよ。さて、そなたはどうだろう？　こころ許せる友は存在するか？」

「……」

ついに月詠は押し黙る。

そんなもの存在しない。彼女は既に一人ぼつちだ。

「だったら僕がそなたの友になろう」

「……え？」

にこやかに笑いかけるアルカ。

鼓動を早め冷や汗をかきながら話を聞いていた月詠は意外な言葉に驚く。

「そなたは何も悪くない。周りが勝手にそなたを孤立させているだけだ。」

僕はいずれ国を再建する。妹の名誉を回復し、忌々しいメガ口の元老院共からオステイアを取り戻す。以前の大地とは異なるが、現在の新オステイア領を抑えるつもりだ。

そして優しい国を造る。難民となった我が愛する民を呼び戻し、

人間、亜人、そして僕のような忌み子、そなたのような理性を持った狂人、みなすべからく心の底から笑い合える、そんな国を造りたい」

「・・・・・・・・」

ぽーっとアルカの話を聞く。

彼の目は決意に満ち満ちていてとても眩しい。

「月詠、そなたも例外ではない。闇に飲まれれば話は別だが、僕はそなたを心からの友として迎えよう。もう一度言うそなたは貴い存在だ。つま先一つ飛び出せばあつという間に狂気に支配されるだろう。だが、そなたは人間だ。畜生ではない。そしてこれからも人間だろう。」

僕はそなたを怖がらない、疎まない、のけ者にしない。僕はそなたを気に入っている。依頼などこの際どうでもいい。同じ人から疎まれた存在同士、仲良くしようじゃないか。

月詠、どうか僕の側に立つてくれないだろうか？」

「え・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

正直歓喜に包まれていた。

理解者など現れないと思っていた。

当然だ、狂人を理解しようとする人間などいるはずもない。

だがどうだ？ 目の前の少年は狂人であることを知っていてなお友になろうと言っている。

「ふ・・・・・・・・ふふ、あきませんなあこんな所で口説いて、いけないお人や。うちの全てを受け入れてくれるいうんおすか？ これでもうちはほらアレや、あのハンターのマンガに出てくる奇術師くらいには狂ってますえ？」

「そのマンガは知らないけど、君の全てを受け止める。友人一人受け止められなくて何が王族か。僕は民の全てを受け入れ受けとめなくてはならないんだから」

「ほうですか……立派どす」

ミルクティーを飲み終えた月詠が伝票を持って席を立つ。

「うちがたまに剣の修行でつこうとる場所が山にあります。……全力を出します、殺す気でいきますえ。うちを倒せたらアルカはんの言うとおりにします。それでよろしいでひよか？」

「そこまで言うなら力を見せてみるって事かな？ わかったよ、お相手するよ」

アルカは立ち上がり月詠の手から伝票をひったくるとレジへと歩いていった。

「あ……不思議なお人や。ふふ……そういえばこれデート入るんかな？ うち男の人とデートしたの初めてや」

普段からは考えられない可愛らしい、嬉しそうな偽りのない心からの笑顔を浮かべていたことに月詠はついに気がつかなかった。

## その頃の京都（後書き）

ねつ造設定ですが、月詠も義務教育の途中でしょう。

学校に通っていても可笑しいところはなにもないはず。

そしてクラスから浮いているのも多分間違えじゃない。

ハンターマンガの奇術師とはもちろん皆が大好きなあの人。



## 前日

「いつ食べても日本の料理は美味しいな。特にこのお鍋は最高だよ！ このソースがたまらないな」  
「喜んで貰えて何よりですえ」

二人はかなり値段が張る高級料理店で焼き焼きをつついていた。アルカは月詠を圧倒的な実力差の元に下した。一歩間違えばアルカの首がすつ飛んでいたというかなり危険な場面があったものの二人の戦闘力には大きな開きがあった。

そしてアルカを認めた月詠は素直にアルカに協力するようになった。雇用といった形ではなく心から分かち合えた友人となった二人会ってまだ一週間と経っていないが十年来の親友のように見える。

「しかしそろそろ時間おすか。うち、もっと主様と一緒にいたいんやけどな」

「明日が約束の日だからね。月詠といるのは楽しいけど、麻帆良には行かないと」

「寂しくなりますえ……」

しょんぼりとする月詠を見て苦笑するアルカ。

春休み前に出会った二人はあの日からずっと一緒に行動している。アルカの強さに惚れ込んだ月詠はアルカにべったりだった。自分より強い同年代の男の子という事もあるが、それよりも多くを占めているのはアルカが語った王族としての言葉だ。

模擬戦で強さを確認する以前にあの言葉に惹かれていた。そしてそれに伴っている実力を見せつけられ心酔した。人や人ならざる者を強烈に惹きつけるアルカは王族として最高の才覚を有している。残念ながらウエスペルタイア王国は現在存在しないが。

アルカは手心加えずに全力で月詠とぶつかり合った。ここでアルカが手を抜いていたり手加減していたりしていたら侮辱された、舐められたと感じここまで心酔することはなかっただろう。

敵わず、ボコボコにされた。そして治癒魔法で傷を癒されながら思ったのだ。この人について行ってみよう。

アルカを仕えるべき主と認め、主様と呼び従属した。色々な意味でアルカに惚れ込んでしまったのだ。

それ以来二人は模擬戦をしたり食べ物屋や甘味処を回り、夜には月詠を教師役に式神について勉強している。家族と呼んで差し支えない同盟の仲間やテオドラ、イヴといった女性以外でここまで親密になったのは初めてだったりする。

「でもしかたありません。主様との打ち合いを思い出せば当分の間は妄想のネタにも困りませんし、我慢します。ゴールデンウィークまでの辛抱ですし」

「うん、僕の従者として皆に紹介したいしね」

「ふふふ、うちも皆さんにお会いするのが楽しみでしたかありません」

愛おしそうにパクティオーカードに頼ずりする月詠。

主はアルカ。月詠が強く希望したために交わした契約。ちなみに契約の陣はアルカが敷いた。

「ふふ、主様に釣り合う女になるように精進しますえ。うちの實力は主様の従者の中で最弱という事がわかってしまいましたからなあ。長様には敵わないにしても、結構強い気でありましたから……・今から考えると随分と自惚れてましたわ」

「期待してるよ。でもあんまり無茶はしないでね？」

「主様は優しいおすなあ。あきまへんよ？ あんまり優しくすると女の子は勘違いしてしまいますえ」

自分が敵わない強者。そして優しく容姿も申し分ない。凛々しく威厳在る顔を見せたかと思えば子供のようにな无邪気で可愛らしい笑顔を浮かべる。いわゆるギャップ萌えだ。月詠はアルカのそうつた面に見事にやられてしまった。アルカには母性本能をくすぐる何かフェロモンのものがあるのかもしれない。

ほんの一時の別れだ。

ゴールドデンウィークには一度魔法世界へ帰る。その時はザジと月詠もいっしょだ。

ネギがやってくるまで一年を切った。未来に介入するための本格的な話し合いを皆で進めていかなければならない。

「それにしても美味しいな」

でも今は新しく加わった家族との食事を楽しむ事に全力を費やすことにする。

月詠と二人で微笑み合いながら優しい時間を共に過ごしていった。

どこだろうここ？ 薄暗い部屋・・・窓も無いし物も少ない。殺風景な所ね・・・息が詰まりそうだわ。

そんな寂しい部屋で私はベッドに腰掛けて・・・あれ？

私？ 何で小さい頃の私がこんな部家にいるのよ？ 変な夢ね・・・

・・・でも夢だし変なのはしかたないか。

ぼうつとただただ座って時が流れるのを待つ。人が尋ねてくる事もないわね。食事はドアに取り付けてある猫の出入り口のような所から出てくるし……。何よこれまるで牢屋じゃない！ なんて小さい私がこんな部屋に閉じこめられてるのよ！ 腹が立つわねえ……。まあ夢に怒ってもしょうがないか……。それにしても小さい私、全く動かないし喋らないわね。ただぼうつと一点を眺めているし声も出さない。一言も喋らないまま一日を過ごすのも珍しくないし……。まるで空っぽのお人形みたい。生きてるのが死んでるのかもわからないわ。

そう、私には何も無い。この寂しい部屋で一生を過ごす人殺しの空っぽなお人形。

私には何もないの。嬉しいも、悲しいも、寂しいも、怖いも、好きも嫌いもなにもかも。

ただ必用なときに部屋から出されてしたくもないことをさせられる。

泣いても血を吐いても、させられる。そんなことを繰り返すうちに無くしちゃった。

私には分からないの。嬉しいも、悲しいも、寂しいも、怖いも、好きも嫌いもなにもかも。

いつから無くしちゃったのか。一体どれだけの時間を虚無に浸って過ごしていたのか。

成長することも死ぬことも許されず、永遠の牢獄に捕らわれ続けていた……。

……そして、この空っぽな世界を照らす太陽に出会ったの。

太陽と出会った？

あれ？ なにこれ？ 夢の中で私と喋ってるの？

小さな私、あなたが私に話しかけてるの？

そう。太陽。あつたかくてポカポカするお日様。  
なんの前触れもなく現れた、私の弟。

弟？ 私に弟なんていないわよ？

ちがう。私に、私達には大切な弟がいるよ。ほら、あの子が来た。  
え？

不意に開け放たれた扉。何事かと目を向けるとそこには一人の男  
の子がいたわ。

すっごく可愛い子。

金色の髪に整った顔立ちで私と同じようにオッドアイ。  
なんだろう、この子を見てたら何だか胸が痛い…………。

…………あなた、誰？

初めて小さな私が喋ったわ。やっぱり私の声だ。

…………ぼく？ 僕はね…………。

「……………っ！」

勢いよく布団から身を起す。

「なんや明日菜、そんな飛び起きたりして？ ちょ……………泣  
いとるん!？」

「え？ あ？ ……ほんとだ。涙……………」

「怖い夢でも見たんか？」

「ううん……………わかんないけど、とても懐かしくて大切な夢……………でも、わすれちゃった。わすれちゃった……………」

目元をこしこしと擦るが何故か涙が溢れてくる。

「そうけ？ まあええわ。顔洗ってスッキリしてきたらええよ。今日は午後からザジちゃんと待ち合わせなんやけど憶えとるか？」

「うん、寝ぼけてないわよ、ばっちり憶えてる。ザジちゃんの幼なじみ？ が転入してくるのよね。そしてその人を案内するのよ。学園長先生と高畑先生からも頼まれてるんだもの、流石の私でも忘れないわ」

未だ涙を拭いながら明日菜は答える。

春休みも終わりに近いこの日、彼女は再会を果たす。

いや、正確には違う。

彼女は神楽坂明日菜であり、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアではないのだから。

前日（後書き）

次話でやっとここさ麻帆良に行きます。  
ちなみにアルカは警備員とかはしません。

## 設定 1

アルカ・テオゲヘナ・エンテオフュシア

ウエスペルタティアの王子。公式では病死扱いで故人。

現在は人でもなく悪魔でもなく半悪魔状態。人の肉体が死ぬと完全なる悪魔として転生する事が確定している。

悪魔憑きという先天的な能力を持つてる。内容はチート召喚。本来の悪魔憑きではアルカのような強力なチカラを有しはしない。アルカは飛び抜けて召喚との相性が良かった。召喚という一点においては確実に世界トップ。

神話級の悪魔、天使を召喚して友人関係になり、彼等の名と加護が魂に刻んであり全ての悪魔族と天使族と敵対関係には決してなることがない。

加護の内容は、状態異常無効と即死無効。ただし、風邪などの病気は防げないし火傷や凍傷は普通に負う。

ゴモリーを母と慕っているが、厳密に言うとアスモデウスの眷属。得意な属性は火と闇でこの二つに関しては超高燃費を誇り大した魔力を費やさずに魔法行使が可能。魔力量は平均よりは上だが極端に多いわけではない。

ラカンとイヴのに師事して師である二人と真正面から戦闘できるほどの力を手にする。が、原作ネギに比べると成長速度は遅いし、魔法の才能はネギより劣る。

戦闘スタイルは魔法剣士。闇の魔法と咸卦法がメインウエポンでこれらの身体強化を施さなければ上位レベルと戦えるほどの戦闘力を持ち合わせない。

巻物で開発した魔法はイヴから絶賛されラカンからはラカン一級を贈られた。



趣味は宝石細工。これはバシンから宝石学を教わると時に同時に教えられた。

身長は163センチ程度と小柄。しかしまだまだ成長期なので問題ない。

容姿はアリカにそっくり。必然的にイヴ、エヴァとも似ている。アリカよりやや垂れ目気味でテオドラ曰くかわいげはアルカの方がある。

魔力を溜める為に髪を伸ばしている。そのため女性に見られる事もしばしばあるが本人はいやがる。

髪型は原作3巻20時間目の茶道部で茶を飲むエヴァと同じポニテール。

麻帆良学園に通う為に髪と瞳の色を黒に変えている。本来はアリカと同じ金髪オッドアイ。

ネギの事は影から支え、教え導くと決めている。叔父だと名乗るつもりは今のところない。

未来知識から一般人が巻き込まれる事は知っているが、ネギの従者となるのだからその従者ごと守ればいいという考え方から仮契約阻止などは考えてはいない。

最終的な目的はウエスペルティア王国の復興とアリカの汚名を晴らすこと。

ザジ・レイニーデイ

アルカの従者一号。

ラカンとイヴに師事したが卒業試験を受けていない。

アルカ転入時でラカン表で3000以上の強さは確実に持っている。

中、近距離を得意とした戦士タイプ。

### モルボルグラン

アルカの従者第二号。

ラカンとイヴの卒業試験に合格している。

原作よりかなり強化されている。主に魔力を身体強化に当てて肉弾戦で戦う戦士タイプ。

ラカン表で5000以上の強さは確実に持っている。

### 月詠

アルカの従者三号。

アルカに心酔し従者となった。未来知識もアルカに教えられている。

模擬戦という名の全力の死合いでは圧倒的不利な状況からも果敢に戦った。アルカはあと数歩踏み込んでいれば斬魔剣式の太刀で首を落とされていたという危ない場面があったりもした。

原作のひなでの闇ブースト状態よりも現時点では弱い。が、原作とは違いアーティファクトと従者契約によるアルカからの魔力強化の恩恵があるので原作程度には強くなる。

### イヴ・アンゲルス・キティ・マステマ

人造精霊エヴァがマステマの眷属になり成長した姿。

天使見習いで、現世での依り代はマギア・エレベアの巻物。

原作の幻術大人エヴァより身長がやや低く、胸がちよつと大きい。真祖ではなくなつたので、吸血行為や体を蝙蝠に変化させるなどとうことは出来なくなり、牙もなくなつた。基本スペックは変わっていないが光の魔法を使えるようになった。封印解除エヴァと比べると原作同様数段実力は劣る。

子供達と遊ぶのが最近の何よりの楽しみ。

ファンクラブが出来るほど帝都を中心に人気が集まっている。

## テオドラ

アルカの教師役三号。一般的な教育、一般常識、性教育などを施した。

A・O・Dの面々からも好かれており色々価値観やら何やらが壊れ、麻痺した状態。

アスモデウスに乳を揉まれ、スカートに顔を突っ込む、耳を甘噛みするなどといった数々のセクハラを受けているためアスモデウスが苦手。

アルカを弟のように可愛がり成長を見守ってきた。アルカのせいで若くして完全に母性本能が開花してしまった。

アリカに何も出来なかつた事を深く後悔していると同時に、アルカが封印された魔法球を託してくれたこと、信頼してくれていた事に深く感謝している。

## 皇帝

ヘラス帝国皇帝。

アルカの事情を全て把握しており、それでいてアルカに協力する

ことを惜しまない。

アリカに深い恩義を感じておりアルカを手助けすることでせめて罪滅ぼしになれば、と考えている。テオドラ同様価値観やら何やらが壊れた人。

表だって支援できないことを悔しく思っている優しい人。

ラカン

アルカの師を勤める。アルカのいい兄貴分。

未来知識を知り近年は結構な真面目モード。

アルカとグランが卒業してからはネギが弟子入りに来ることを結構楽しみにしている。

完全なる世界を独自に調査しているが足取りは掴めていない様子。

チャチャゼロ

厨人形。

魔帆良の戦力増強としてイヴによってワープ進化した究極体。

ルシファールとウリエルの眷属。末端の末端だが、確かに眷属には違いないので下級悪魔や天使は彼女を見ただけで逃げ惑う。

小さすぎる体と人ではない動きをするため非常に戦いづらい。

行動にエヴァの魔力を必用としなくなり独立したがエヴァの従者には変わりない。飲食し、それを分解し魔力とする機関が体内に発生したために飲食自由。また、ドール契約があるためエヴァが魔力を送り込むことで身体強化も可能。実力的には麻帆良の魔法先生が束になっても敵わない。タカミチ　チャチャゼロといったレベル。原作魔法世界編のクライマックスでネギのピンチに駆けつける連中に混ざって普通に造物主の使徒と戦っちゃうくらいには超強化され

た。

## 到着（前書き）

ザジが愉快な人になっていく。

## 到着

「あ、いたいた。ザジちゃん！」

「ほえ？ 一緒にいる人は誰やるか？」

ザジと待ち合わせをしていたカフェに明日菜と木乃香はやってきた。  
た。

朝に泣き出したりと感情が不安定だった明日菜も今ではすっかり元の調子に戻っている。

「おはようございます」

「おはようザジちゃん」

「おっはようやえ。そっちの人は誰なん？ すっごい美人さんやけど」

待ち合わせの場所にはザジ以外にもう一人二人の知らない女性がいた。

「ほう……お前達が明日菜に木乃香か」

ティーカップを置き、イヴはにっこり微笑む。

イヴが麻帆良にやってきたのが二日前。近くのビジネスホテルに滞在し、アルカがやってくるのを待っていた。アルカを迎える今日、魔法世界へ帰る予定になっている。

「初めましてだな。私はイヴという。よろしく頼むよ」

「あ、はい……よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくお願ひしますえ」

イヴは相変わらずカソック姿だ。二人はザジとシスターが一緒にいることに困惑するが、イヴに進められるまま席についた。

「さて、好きなものを注文するといい。私の奢りだが気にするなよ？ 普段からエヴァが世話になっっている礼だ」

「エヴァちゃんですか？」

「あ、そう言えばエヴァちゃんにそっくりやえ。もしかしたらエヴァちゃんのお姉さんなんですか？」

「姉か？ くくく……違っよ、私とエヴァは親子だ」

「えええっ！？ 親子どすか！？」

「エヴァちゃんのお母さん！？ 若っ！ 若すぎでしょ！」

取り乱す二人。ザジは無表情だが内心笑いを堪えるのに必死だ。

嘘は言っていない。ただし、イヴの方が娘に当たるのだが。

「それで、何でエヴァちゃんのお母さんがザジちゃんと一緒にいるんですか？」

「何、私とザジは家族同然の付き合いでな。私はまた海外に出なきゃ行けないからこうして時間を作って語らっていたんだよ」

「家族同然ですか。せやったらエヴァちゃんとザジちゃんって昔からの知り合いやったんかあ。二人が喋っているとこ見たこと無いから知らんかったえ。あれ？ ここにおらへんけどエヴァちゃんは今どうしとるんですか？」

「ああ……ずいぶんとほったらかしにしていたからな。今更どういう顔して会えばいいのか分からんのだろう。多分家で寝てると思うぞ？」

イヴの言葉から複雑な家庭事情を察した二人はこれ以上話を掘り下げようとしなかった。

しかし、ほったらかしされているのはイヴの方なのだが……



やはり嘘は言っていない。

後日、エヴァは二人から暖かな眼差しで『お母さんとは仲良くしないといけないよ』と言われ訝しむのだが今は関係ない。

遠慮しながらも二人は紅茶とケーキを注文し、お喋りに夢中になっていた。

親睦を深め合うように話す三人をイヴが見守る形だ。

「そうだ、今日やってくるザジちゃんの幼なじみのことイヴさんも知っているんですか？」

「正確にはザジの従兄弟だよ神楽坂明日菜。もちろん知っているさ。我が子も同然の大切な子だからな」

「あ、従兄弟なんだ。じゃあエヴァちゃんとも面識あるんですか？」

「（そういう設定だったんだ・・・）いえ、私と彼は海外でイヴに良くしてもらったのでエヴァンジェリンとは面識はないです。私も麻帆帆良に来るまで彼女とは面識ありませんでした」

ザジとイヴの説明を聞きうんうんと頷く二人。

イヴのことも気になるが、やはりこの後迎えるザジの従兄弟の方が気になるようだ。

二人には今回、ザジと共に案内役選ばれた時に学園長から簡単に説明してある。

海外からの留学生であること、男女共学のテストケースの一環として女子クラスに編入すること、先方からの希望で高畑先生のクラスが選ばれたことなど。

「そうなんだ・・・結構複雑なのね」

「せや！ 今日来る子ってどんな人なん？ かつこええんか？」

「あ、私も気になってたのよ！ もしかしてこの間言ってたザジちゃん料理作ってあげたい人なんじゃないの？」

アルカの話題になると一段と元気になる二人。  
彼女達は現役の中学生。男の子の話題や恋愛の話など例に漏れず  
大好物だ。

「そうですね……容姿は抜群です。格好いいですし同時に  
可愛くもあります。そして明日菜の言う通り私が手料理を振る舞い  
たい人です」

「やっぱり！ うんうん！ すっごい期待しちゃうじゃないの！」  
「楽しみになつてきたえ！」

ザジの説明に目を輝かせる。

恋バナ？ とはちよつと違うがクラスメイトから聞く、好き？

な男の子の話にワクワクが止まらない。

「良い意味で子供っぽいですね。無邪気で甘えんぼで甘え上手。思  
いやりがあつて優しく、他人のことをよく考えられる聡明な子です。  
そして努力家でもありますね。勉強や自己鍛錬も怠らず音を上げず  
弱音を吐かず頑張り続ける……忍耐力と我慢強さも持ち合  
わせています。」

それに最近は男らしくもなっているようで……小さな頃  
から姉貴分だった私でも思わずドキリとしてしまいます」

「す、すごいえ……なんやのその完璧超人っぷり」

アルカの良さを力説するザジに気圧される明日菜と木乃香。イヴ  
はにやにやと笑いながら紅茶を飲んでいる。

「なんなのそのマンガの登場人物みたいな人は……な、  
なにか欠点とかないの？」

「欠点ですか……あれ？ 無くないですか？」

首をかしげながら無いと言うザジを見て苦笑する。恋は盲目にするというが、まさしくザジはこの状態なのだろうという判断からだ。外国の事は良く知らないが、日本では従兄弟同士の結婚は合法だ。珍しくはあるが決してありえないことではない。

ザジは正しく恋する乙女に見えた。

「ザジちゃんはその人のこと好きなの？」

「好き、ですか。それは確かに大好きですよ。彼が小さな頃から一緒にいた家族ですしね。この好きが家族に対する好きなのか、男性に対する好きなのかわかりませんが」

照れたように笑うザジはとても可愛らしかった。

明日菜と木乃香はそんなザジのまだまだ幼い感情を応援しようと決意した……が。

「そうですね。好きの感情はどっちに対するものなのかは分かりませんが、彼の子供は欲しいですね」

「「ぶっ!?!」」

ザジの爆弾発言に同じタイミングで紅茶を吹き出す。

「あつはつはつはつは！ 子供か！ くくくく……お前も言うようになったな！ お前なら安心だ、応援してやるからせいぜい選んで貰えるように頑張るがいいさ！」

イヴは大声を上げて楽しそうに笑っている。本当に愉快そうだ。涙まで浮かべている。

「こ、これは……」

「素直に応援していいのか分からなくなっでもうたな」

赤い顔をしてイマイチキャラが掴めなくなってきたザジを見る。本人は何も照れた様子はなく美味しそうにココアを飲んでいた。

カフェで二時間ほどだと丁度良い時間になった。

待ち合わせの時間は午後一時。春休みでも人がごった返している駅前に四人は立っていた。

「お？ 来たぞ」

イヴが一番に気がついた。

「え！？ どこどこ？ どこですイヴさん！」

「どんな人なんかなあ。あ、そう言えば名前を聞いてないえ」

ザジから話を聞き一体どんな人なのかとワクワクしていた明日菜はキョロキョロと辺りを見渡す。

木乃香は名前を聞いていないことを思い出して笑ってしまう。本来なら一番最初に聞いてしかるべきなのに。

「あ……………」

見つけた。ザジの瞳に映った。

薄紫色の外套を纏い、背には大きなリュック。後ろで結ばれた長い髪が風に揺れている。

目立つ出で立ちだ。視線を集めているのは女子エリアの中にある男という事だけが理由ではないだろう。

アルカは手を振るイヴに気がつき一步一步四人の方へ歩いていく。イヴとザジは分かる。見間違いようがない大切な家族だ。出迎えてくれた事を嬉しく思う。

見覚えがないのは一人だけ。ザジの隣にいる長い黒髪の日本美人だ。

マンガでの知識から近衛木乃香だと認識する。遠目でもわかる可愛らしい顔立ちでまるでお人形のような。美人に囲まれて面食いに育ったアルカが美人と言えるほど綺麗な人。

大恩人である近衛詠春の娘でお姉ちゃんのルームメイト。おそろくネギとも仮契約をかわす

であろうある意味では身内と言っても差し支えない人物だ。そして、問題は木乃香の隣にいる少女。

(お姉ちゃん……)

キュツと心臓が締め付けられる思いをする。

面影はある。随分と成長しているが、たしかにかつてお姉ちゃんと慕った人。

しかし、決してお姉ちゃんではない。神楽坂明日菜、決してウエスペルタティアの王族ではない。間違えるな、と自分に言い聞かせる。

別人なのだ。悲しいことにお姉ちゃんはもうどこにもいない。

「うつひゃ〜ザジちゃんの言うとおりめっちゃ美形やな明日菜」

「……………」

「……………明日菜？　どうかしたんか？」

明日菜の袖を引っ張るが反応がない。

「明日菜？」

明日菜は目を見開きこちらへと歩いてくるアルカを凝視していた。そしてアルカは四人と合流を果たした。

ザジが歓喜の表情を浮かべ、イヴは慈母の笑みで迎える。

木乃香はアルカの事も気になるが、さっきから反応がない親友のことが心配で少しあせっていた。

「ア……………」

ザジがアルカ、と声をかけようとした刹那の出来事。

「……………アルカ？」

確かにアルカの名を発した。

しかし、その名を言ったのはザジでもイヴでもない。

アルカ、ザジ、イヴは凍り付き木乃香はやっと何かしらの反応をした親友の顔を覗きこむ。

「明日菜！？ どうしたんよ、また泣いとるえ！？」

アルカが発したのは決してアルカの名前を知っているはずがない明日菜だった。

彼女は両の目から一筋の涙を流し、心ここにあらず、といった表情で少し震えながらアルカを見つめていた。



## ありがとうの言葉

「な………!？」

「え………?」

「ほえ?」

あり得ない言葉があり得ない人の口から出た。

自己紹介はまだ済ませていない。故に状況がつかめていない木乃香は首を傾げている。

(馬鹿な、アスナ姫の記憶の封印は嚴重なはず。まがりなりにも神楽坂明日菜として今まで生きていた。アルカが言うとおりにある意味ではアスナ姫は既に死んでいる。いや、神楽坂明日菜に転生したというべきか……。ラカンにも確認をとった。生半可な方法では記憶は戻らないはず。だが……。この状況は何だ!?)

イヴもこの事態は予想していなかった。

実際に会ってみて違和感など無かった。今時の女子中学生だ。笑顔の裏に陰もない、悲壮感なども感じられない。マンガで見たままの笑顔が眩しい”神楽坂明日菜”本人で間違いなかった。

しかしこの現実はどうだ?

「あ………う………」

声をかけられたアルカは目を見開き固まる。声を出そうにも上手く声が出ない。

「アル………力?」



「……………!？」

ビクリと大きく体を震わせるアルカ。  
確かに、確かに言った。アルカと、確かに言った。

明日菜は一步、また一步とゆっくりと歩を進めアルカの前に立った。

未だ涙は止まらない。まるで無くしていた大切なものを見つけたような表情でアルカの前に立っている。

アルカは気がきじゃない。

幼い、本当に幼い感情だったが確かに目の前に立つ少女に恋していた。

いや、厳密には違う。体は同じかも知れないが、既に人格は別人。アスナと明日菜は別人である。だから好きだったお姉ちゃんではない。

故に今日、はじめましてから始めるつもりだった。

だが……………。

「ああ……………やっぱり」

明日菜は愛おしそうにアルカの頬を撫でる。

「心配したのよ？ あんなことになって……………私に関わったばつかりに優しいあなたに不幸が訪れたと自分を呪った事もあったわ」

アルカは硬直し動けない。

ザジとイヴは緊張しながら事を見守る。そしてやはり木乃香だけが状況を理解できない。

「背……伸びたわね。見て？ 私も伸びたわ。ふふ、成長しても身長は同じくらいね。大きくなった……そしてかっこよくなったわ。見た目はアリカそっくりだけどね」

今度はアリカという言葉まで飛び出した。

（馬鹿な！？ やはり記憶が戻っている！？）

（明日菜……今の今までそんな様子は確認できなかったのに……！）

（え？ なんやの？ もしかして知り合いなんかな？）

「ああ……ずっと言えなかった。アルカ、あなたのおかげよ。ナギでもガトウさんでもない、あなたが、あなたが私に話しかけてくれなかったら、笑いかけてくれなかったら、今の私はないわ。ありがとう。本当にありがとう。あなたと過ごした二年余りの時は、私の暗い人生の中で最高に輝いてた」

「……お、お姉ちゃん……」

明日菜は優しくアルカの手を握り感謝の言葉を述べる。

届いていた。空っぽの人形のような少女に届いていた。

アルカの思いは確かに明日菜に、いや、アスナに届いていた。

だからこそその謝辞。

アルカと過ごしている時もアスナは感情に乏しかった。

話すのはアルカ。アスナは隣でたまに相づちを打つくらい。

だが、アスナに自分の言葉は届いてた。

その事実を当の本人から聞き、震える。

「ふふ……あ、れ？」  
「……お姉ちゃん……？」

アルカの頬を撫でていた手が止まり、明日菜の目が大きく見開かれる。

「あ……れ？ 嫌、どうして？ 私、知らない。知っている筈無いのに。この人とは初対面で……でも懐かしくて、大切に……悲しくて、寂しくて、嬉しくて……ふえ……」

静かに涙を流していた顔が大きく歪む。

「ふえ……う、あ……うああ……ひつぐ」

そして声を上げて泣き始めた。

突然の豹変にアルカ達はもちろん、駅前という人の目に付きやすい場所なので様々な人から視線を集める。

「お姉ちゃん!？」

「明日菜!？ 記憶が混乱してる!？ 感情が上手く制御できてないようです!」

「な、なんや急に？ だ、大丈夫か明日菜!？」

「目を引くな……致し方あるまい」

疑問も何もかも取りあえずは後回しにし、冷静に事を判断したイヴは……。

「弾ける、氷爆!」

無詠唱で氷爆の魔法を完成させると空高くで爆発させた。

急に響いた爆音に驚き、駅前の人間は皆一斉に空を見上げる。

泣き声を上げる明日菜から一時的に視線を外させる事に成功した。

「アルカ、気持ちはわかるが冷静になれ！」

「わ、分かったよイヴ。月詠直伝………月見乃夜桜！」

アルカが放つのは対象を眠らせる技。

「あ………」

「あす………にゃあ………」

対象は二名、明日菜と木乃香。

技が上手く決まり、眠りについた二人。ザジが明日菜を背負い、

イヴが木乃香を背負い急いで駅前を離れる。

刹那の再会。

本の数分という短い間だけだったが、確かにアルカはアスナと再会を果たした。

ありがとうの言葉（後書き）

アスナ、メインヒロインじゃ無いんです、これで  
自分でもびっくり。

## 即バレ(前書き)

真名については独自設定です。

即バレ

駅前から全力で離れ近くの公園へ。眠ったままの明日菜と木乃香はベンチに座らせる。

イヴが急いで人払いの結果を張ると一般人は自然と公園から出て行く。これで公園内には表の人間はいなくなった。

「これで一般人の目に付く事は無くなった。しかしどうしたものか……」

親指の爪をギリギリと噛みながら悩みに悩むイヴ。

「アルカ……大丈夫ですか？」

「うん……大丈夫、ちょっとびっくりしただけだから」

ザジに手を握られたいぶ鼓動も落ち着いてきた。

おそらく一番驚愕したのはアルカだ。もう二度と会う事は無いと諦めていたお姉ちゃんに会ったのだから。

受けた衝撃はかなり大きい。

「くっそどうする……流石に魔法を使った事は誤魔化しきれん。私の立場、ひいては帝国、アルカの立場を悪くするわけにはいかない。どうすれば……いや、いつそ全部話せば良くないか？」

ベンチで眠る二人を心配しているアルカとザジの隣でイヴは妙案を思い付いたと言わんばかりの表情で大きく頷く。

「隠れているのは分かっている。出てくるがいい龍宮真名に桜咲剎那」

イヴに声をかけられ身を隠していた二人が姿を現す。

刹那は困惑半分怒り半分と言った表情。

「あなたが帝国からの留学生ですか……」

刹那がアルカを見る目は複雑だ。

アルカの境遇に共感していた。一方的な親近感も感じていた。

余り積極的に人と関わろうとしない刹那、それも相手が男の子なら尚更だがアルカには話しかけてみようかと決めていた。

自分と同じ暗い過去を持つ者同士仲良くできるのではないかと思っ  
ていたりもした。

「真意はともかく、お嬢様に手を出すとは……」

目つきを鋭くし、愛刀に手をかける。

実際には眠らせただけなのだが、それでも刹那は見逃せない。

アルカ、ザジはともかくイヴには手も足も出ないだろう。しかし、  
敵わぬと分かっているても何もしないわけにはいかない。

「事によつては……」

「熱くなるな刹那、冷静になれ。あの場ではしかたがないだろう。

何故か神楽坂が錯乱してたしな。それに私たちじゃあどうあがいても勝てる相手ではないし、相手は帝国のお偉いさんだ。お前の軽率な行動で戦争でも開始したんじゃないだろ」

真名に後ろから抱きしめられる形で抜刀は止められる。

「なっ!? ちょっと……この格好は……」



抱きしめられている刹那は照れているが真名は無視して話を進める。

「特にあの人は駄目だ、ザジはともかくとしてイヴさんにはどうあがいても勝てないだろうけど、真に敵対しちゃいけないのはあの方だ」

「イヴさん以上にやっかいな人なのか？」

真名の視線の先にはアルカがいた。

「失礼を承知で発言をさせてもらうよ？殿下」

「……何？」

真名の放った一言で場の空気が一気に張り詰める。

ザジとイヴは臨戦態勢をとり、アルカも纏っていた空気が変わった。

一触即発のそれに近い。いきなり戦場の空気になった事に刹那だけが戸惑っている。

「……何故僕を殿下と呼ぶ？ 僕たちは自己紹介もまだ済ませていない。僕の後見人は皇帝陛下だが僕は皇族でも何でもない。ただ偶々テオドラに保護された忌み子という情報以外知り得ないはずだが？」

「……私の片目は特別製でね、霊視などその他にも様々な力を有しているんだ。魔眼を発動すれば大概のものは？見える。イヴさんが天使である事も、ザジと刹那の正体も……ね」

ザジの正体という言葉に首をかしげるのは刹那のみ。

アルカ達はその能力の高さに感心していた。

「マンガには書かれていなかった情報だな」

「あくまでネギ先生視点での情報しか書かれてなかったですから」

未来知識があるとはいえ知り得ない事は沢山ある。

イヴとザジが話した通り、真名の魔眼の事などマンガには描かれていなかった。即ちネギが知らなかった情報と言う事だ。この先こういったマンガには描かれていない事が沢山出てくるだろう。

「だが、それでも僕を殿下と呼ぶのは解せない。僕の魂が既に人から外れてしまってる事を知ったのならまだ分かるが。我が友の名と加護を視たのだろうが、何故そこから殿下という言葉が出てくる？」

真名を睨みつけるアルカ。

対する真名はいつも通りといった表情だが良く見たら膝が震えている。

「そう睨まないで欲しいな。正直これでも恐怖していても、答えは簡単だよ、殿下は麻帆良では何て名乗るつもりだったんだい？」

「アルカ・ソロモン。そう名乗る事になっていた」

「なるほど、ソロモン王か。そんな神様じみた連中の加護を受けている貴方にはピッタリだね」

「質問に答えていないぞ？」

「だから睨まないでほしい。それでも私はクールで通っているんだがこのままじゃキャラ崩壊を起こしてしまいそう……でね！」

「うっ……！」

不意打ち気味に刹那の後頭部を殴り気絶させる。

突然の行動に呆気にとられる。

「え……と、なにを？」

先ほどまでの空気を散らせたアルカは冷や汗をかきながら真名に尋ねる。

「刹那に聞かれてはまずいだろう？ わざわざ名を偽ってまで麻帆良に来たんだ。何かしら事情があるんだろう？」

「そ、そうだけど……」

明日菜と木乃香と違い地面に転ばされているだけの刹那を見て、いいのか？ と乾いた笑いを浮かべるアルカ。

「……全開放は六年ぶりか……」

真名がそう呟くと彼女の姿が一変する。

髪の色が変わり、左目に色が変わり、背中には悪魔のような二枚の翼。

「君……その姿は……」

「私の事は真名で構わないよ、エンテオフュシアの王子様。見ての通り私は半魔族さ」

呆気にとられるアルカの前に片膝を付き礼をする。

「まさか同族でしたか。気がつきませんでした」

「それはお互い様だよザジ。ああその姿も中々可愛らしいぞ？」

そう言う真名の表情は強張っている。

ザジは真名と同じように魔族としての姿を曝した。

額からは二本の角が生え背中には真名同様悪魔のような二枚の翼。

真名の表情が強張っているのはザジが格上だと見抜いたからだ。

「なんだなんだ、お前も人外組みだったか」

負けじとイヴも純白の翼をこれでもかと大きく広げる。何だか楽しそうだ。

「……私は母方が魔族でねよくは知らないがアスモデウス様を祭る巫女的な家系だったらしい」

「アーたんの？」

「ふふ……かの色欲の大悪魔をアーたん呼ばわりとは、貴方には心底驚かされる。……私の両親は既に亡くなっているが、一応は私もその母の血を継いでいる。信仰する大悪魔の家族である貴方には敬意を払うさ。ましてや魔法世界の王族となれば尚更。後見人が皇帝だということも名を偽る事も納得がいく」

意外な事実だった。龍宮神社で巫女をしていることはマンガ知識で知っていたが、魔界の方でも巫女のような家系だとは知るはずもない事実だ。

「大体真名の事情は分かった。だが、僕の事を殿下と呼んだ答えにはなっていないよ？」

「ふふ……殿下の魂に刻まれている言葉をそのまま読み上げよう」

礼の体制を崩さず小さく笑いながら言う。

「ゴモリ、アスモデウス、アモン、ベリアル、バシン、ガアプ、ベルゼブブ、ペイモン、ネルガル、アスタロト、ルシファー、ウリエル、サタン、マルコシアス、マステマ、我らの名においてこの者我が家族、アルカ・テオゲヘナ・エンテオフユシアに手出しするこ

とを禁ずる。我が家族を害する者は我らを敵に回すと心得よ」

初めて聞かされた己が魂に刻まれた言葉。

感極まるほどに喜ばしいのだが……見逃せない言葉があった。

「まっつて、それなら真名みたいに特殊な眼をもっていたりしたら僕の本名つてバレバレなの？」

「その通りだね」

アルカは深いため息をついた。

## 即バレ（後書き）

真名もアルカ組に引き込むことになりそうです。

明日菜と明日菜（前書き）

饒舌に喋りすぎているかも……です。

## 明日菜と明日菜

どこかデジャヴュを感じる息がつまりそうな殺風景な部屋。  
そんな寂しい部屋で二人してベッドに腰掛け眺めている。

「どう？ 思い出してきた？」

「ううん……どうだろ？ まだよく思い出せないわ。というより夢だもん、思い出すもなにもないわよ」

「……大丈夫、少しずつ思い出すよ。少しずつ、少しずつ。ただの夢だと思っているのならそれもいいよ」

いつかと同じ夢の中。明日菜とアスナは語り合う。

「それにしても夢だからって何でもありね。まるで魔法みたい」

「……そう、言い得て妙。意識シンククの魔法に近い。でも、厳密には私達は繋がっているから……結局、これは私の過去、あなたの過去。思い出して、少しずつ、少しずつ。いかに私が不幸だったか……どれだけ私が幸福なのか」

ベッドに腰掛けている二人の目の前には二人の幼い子供がいる。

「小さい私と……あの子がアルカね？」

「そう、私の小さな太陽」

小さなアルカは庭園で摘んだ花で造った花冠をアスナの頭に乘せてにつこりとほほ笑んでいる。

アスナは無表情で感情は読めないが、それでもアルカは必死にアスナに語りかけている。



「可愛い子ね。いいんちよじゃないけど、ああいう小さな男の子もいいわね……」

「同意する。あの子は可愛い」

うんうんと頷き合う明日菜とアスナ。

二人が見ているのは過去の映像。

次々に映像は変わる。

花冠を贈ってくれた。色々外の話をしてくれた。こっそりとお菓  
子を持ってきてくれた。

アスナの為に、アルカは様々な事をしてくれた。この寂しい色の  
無い部屋に外の色を持ち込んだのはアルカだ。気が遠くなるほどの  
時間をただただ漠然と過ごしていた。人形のような生活。いや、人  
形だっただろう。何も想わず、何も感じずただただ何もせず生きて  
いるだけ。そんな人形を人間に戻したのが他ならないアルカだ。

小さな太陽とアスナは言うが、それは心からの言葉。アルカは、  
あまりにも眩しすぎた。

「ふふっ……微笑ましい光景じゃない。必死になっちゃって可愛いわ。  
必死にあんたの気を引こうとしてる。ちっちゃいのに罪な女の子ね  
？」

「……まだ夢だと思っっているならそう思っているといい。明日菜、  
もう一人の私……これは私の過去、必然的にあなたの過去。眼が覚  
めたらこの夢の事は忘れてる。でも、アルカが起爆剤になって私の  
記憶封印は綻んだ。あのアリカに似た人……イヴが上手く再封印処  
置を取ったけど、もう遅い。こうして私とあなたは繋がった……い  
ずれ私達は完全に混じり合って一つになる。その時今の発言を思い  
出して布団の上でバタバタと転げまわるといいよ」

「うん……よくわかんないな」

明日菜は首をかしげて苦笑している。本当に理解していない。

「私とあなたは言わばコインの裏表。決して交わる事は無いけど繋がっている。私から派生したあなたは私の別人格。もう私とあなたは別の意識を持っている。一つの体に二つの意識。普段私は眠っているから大丈夫だけど、あの子を見て私が完全に起きてしまった。だから混乱した、錯乱した。私の意識があなたの中に流れ込んだから……」

「待つて、何か難しい話をしてる事はわかるの！」

やはり明日菜はイマイチ理解しきれていないようだ。

そんな明日菜を微笑ましく思う。何故なら明日菜はアスナにとつての希望なのだから。理想なのだから。

「いいの。ゆつくりと同化は進んでいく。最短で一年ちょっと、多く見積もっても三年以内に私とあなたの意識は完全に交わり一つになる。アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアは完全に神楽坂明日菜に飲み込まれる」

「うん？ 私が？」

「そう、人格のベースはあなた。何故なら、あなたは私が欲しかったもの全てを持っているから」

アスナは小さく微笑んで明日菜を見る。

まるで子を見守る母親のような慈愛満ちる優しく温かな表情を浮かべて。

「喧嘩できる親友。騒がしくも居心地が良いクラスには沢山の友人。自分の意志で勉強し、遊び、労働に勤しみ幾ばくかの給金を稼ぐ。……なんて事ない日常。その何の変哲もない日常こそ私が欲

していたもの。皆が私に与えてくれようとしたもの。ナギが、ガトウさんが、詠春が、ジャックが、アルが、タカミチが、アリカが・・・そしてアルカが。遂に私は得ることはなかったけど、私から派生したあなたは全てを手に入れた。どうしてその幸福を私ができやばり横から奪うことができるの？ 私がここであなたを飲み込むとまた全てを失う。いいんちはあなたの親友であって、私の親友ではないの。・・・そんな顔しないで・・・あなた  
の幸せは私の幸せでもある。そして何よりの理由はあなたは向日葵のような温かな笑顔を浮かべることができる。・・・私は、笑えないから。あの子に笑顔で微笑み返すことさえできなかった」  
「あなた・・・」

先ほどとは打って変わり悲しみに満ち表情を浮かべるアスナを見て胸を痛める。

子供は笑顔でいてこそだ。笑えない子供・・・そんな不幸なことはない。

「そろそろ時間。目が覚めたらこの夢の事は忘れてる。イヴの記憶操作でアルカの事も忘れていると思う。なぜあの子がここに来たのかは知らないけど・・・あの子の事情は分からないけど、きっと私達は仲良くなれる。さあ、もう目が覚める頃。また夢の中で会おうね・・・明日菜」

「ちよつと・・・まだ私全然理解して・・・」

意識が遠のく。アスナの言うとおり目が覚めようとしている。

幼少期の自分との語らい。忘れ去っている過去の記憶。

聞きたいことは山ほどある・・・が、ひとまずはこれにて一端修了。また次の夢の中で。

「……ん？ あれ？」  
「あ、起きたん？」

見慣れた天井、見慣れたルームメイトの顔。

まだ頭が霞がかっているが、ここが自室だということは理解した。

「私……どうしたんだっけ？」

「また寝ぼけとるなあ。お昼のことはおぼえとる？ ザジちゃんといヴさんとカフェでお茶してきたんやえ。いヴさんにごちそうになった後、ザジちゃん達は例の転入生の子を迎えに行かないけんからって別れたんや。そして部屋に帰って二人で仲良くお昼寝したんやないの。実を言うとうちもちよつと前に目が覚めたばかりなんよ」

小さく舌を出して笑う木乃香。

言われてみればその通りだ。確かに木乃香の言うとおりなのだが……何だか釈然としない。

何とも言えない心のもやもやを抱えたままこの日一日過ごすことになる。

(ほんとにそうだったかしら？ 誰かに会ったような……大切な誰かに……)

一瞬頭をよぎる。

人なつこい笑顔。きれいな金髪。自分の同じオッドアイ。

一瞬頭をよぎる。

黒い髪に黒い瞳。中性的で思わず息が漏れるほどの美しい顔立ち。しかし何故か懐かしさをおぼえる。狂おしいほどの親愛と共に。

どこかオッドアイの男の子の面影を見てしまう。会ったことも無いはずの男の子の顔が、何故こつも頭をよぎるのか。

( わからないわ………寝ぼけているのかしら?)

何とも言えない違和感がぬぐえない。正直気分が悪い。

( 私ってばどうしちゃったのかな？ アルカは黒髪に黒い瞳じゃないはずなのに)

無意識にうちに思ってしまった『アルカ』という言葉に気がつかない。気がつかない。

この日、イヴによって操作された記憶が戻るのはだいぶ先の事となる。

アスナと明日菜が完全に混じり合い一つになる日まで、明日菜がこの日の事を思い出すことは無い。

## 明日菜と明日菜（後書き）

アスナ覚醒は見送りです。

しかし、中々良いタイミングで覚醒することになります。

メインヒロインは次話に出せそうです。

アスナはこれだけやってメインヒロインじゃないです。びっくり。

想像の斜め上に行く展開にしていきたいと思っております。

## 血族

「なんと・・・・・・・・それは仕方ないと思っていいかの」

学園長は深く考え込む。

学園長室にはイヴ、タカミチ、学園長の三人がいる。

イヴは魔法を使った事について弁明するために単身赴いた。真名には口裏を合わせて貰っている。彼女にはアルカの正体は知られてしまったが、アルカの仲間が持つ未来知識の事については話していない。しかし、何か事情があるのだらうと察してくれた。

「今言った通りだ。私を見た神楽坂明日菜は錯乱し駅前という大勢の目がある中泣きわめいてしまった。魔法で人目を反らした後に明日菜と木乃香を眠らせて近くの公園に移動、同時に人よけの結界を張る。すると木乃香に危害を加えられたと勘違いした刹那が刀を抜きそうになったので、彼女も眠らせる。そして三人の記憶を操作し、一連の出来事は忘れて貰った」

「賢明な判断じゃな」

「何しろ明日菜は私を見て”アリカ”と口走ってしまった。木乃香もそれを聞いている。今はまだかの偉大な救世の女王の名を知っているには不味いだらう」

イヴの意見に二人も同意する。

「でも記憶の封印が綻ぶなんて予想外だよ」

タカミチが苦笑しながら言うが、内心は少し喜んでいた。

アリカと似ているイヴを見て強い衝撃を受けたのなら、アリカは明日菜・・・・・・・・アスナにとって大切な人なのだらうと考えられ

るからだ。

少なくともアリカはアスナのことを大切に思っていた。道具として使われることを阻止できない自分の無力に嘆いていた。そんなアリカの事を知っているタカミチだから、明日菜の反応は正直冷や汗ものだったけど、同時に喜ばしい。

「そんなに私は陛下に似ているのか？ テオドラやラカンには似てる  
と言うがな」

「そうだね、似ているよ。強いて言うならアリカ様の方がもう少し  
大人っぽいかな？ 身長もアリカ様の方があるし」

「ふんっ、童顔で悪かったな老け顔め。だが、胸は私の方があると  
テオドラが言っていたぞ？ 私とテオドラは同じ浴槽で体を清めキ  
ャッキヤツウフフする関係だ。お前はロリなテオドラしか知らんだ  
ろうが、今のあいつはとても魅力的だ。まだあどけなさが残る顔に  
艶やかな長髪、長い手足、健康的な体に豊満なバスト。尻も良い形  
をしていて……」

「だから！ なんで君もザジ君もそっち方面で僕をからかうんだ！  
？」

イヴによるタカミチ弄り再び。

懸念していた帝国の立場が悪くなるようなことはなかった。

明日菜と木乃香、そして刹那の記憶の操作も完璧なはず。明日菜  
の記憶の再封印処置もとった。刹那は真名が連れて帰った。問題な  
いだろう。

（真名にアルカの正体が知られるというハプニングがあったが、問  
題ないだろう。当初の目的通り事が進めばいい。問題は来年の学園  
祭、世界樹発光の時……大きな分岐点だ。その時まで私達  
は動かない。どういう結末を迎えるのか。未来知識通りネギが勝つ  
にしても、それはそれで次点の策を執行するまで。突き詰めた話は



ゴールデンウィークに……だな)

ゴールデンウィークに開かれる会合。

それは魔法世界の今後を左右する大きな意味を持つ。

イヴのせいでシリアスな空気が壊れた学園長室。その中で一人、イヴだけが未来を思い考え込んでいた。

「うん、中々良い家だね。気になったよ」

「何よりです。急ぎよ用意して頂いたものですが、中々広くて立派です」

結果的に言うところアルカの女子寮及び職員寮の入室は認められなかった。やはり女子寮に男、職員寮に生徒というのはよろしくないのだろう。

代わりに家が提供された。エヴァは自分の住居であるログハウスから通学しているのでこれは問題ない。若い男女が一つ屋根の下という事になるが、書類上アルカとザジは従姉弟なので問題無い。少々古いがそれなりに広く造りもしっかりしている日本家屋だ。京都を訪れて日本の文化を気に入っているアルカは大変喜んだ。

「あゝ畳の良い匂い」

「ふふ、子供っぽいところは変わらないですね」

畳の上をごろごろと転がるアルカを見てザジは微笑む。唐突に見せるこの子供っぽい行動はアルカの魅力の一つだ。

「魔法世界では畳なんてもの無かったしね。それにこの和風の造り

はとても心を穏やかにしてくれる。ザジもおいで？」

甘えるようなアルカの視線を受け冷静を保ちつつザジもアルカの隣に寝転ぶ。丁度日の光があたりとても心地よい。

「うん……安らぎます。こうして横に並んで寝るのも久しぶりですね」

「そうだね……僕の感覚ではザジとは何年も会っていないから。うん、こうしてザジの温もりを感じるとやっぱり心が安らぐ」

「それは私も同じですアルカ。イヴから記憶を渡されました。あの真の強者と渡り合えるとは……強くなりましたね」

アルカの頭を胸に抱き、少々遅れたが久々の再開に歓喜する。従者の、姉弟の、家族の。

「知らせた通り京都に行ったよ。月詠が家族になった」

「はい、彼女はどれくらいの実力でしたか？」

アルカは月詠を家族と言う。従者の関係ではなく彼女はアルカにとって既に身内だ。

そしてザジはアルカが家族と言う者に対して疑いなど持たない。アルカの人の見る目は確かだ。そのアルカがそこまで信頼する相手に悪い感情など抱きようがない。

「実際に戦ってみた感じでは相当強いよ。でも、ザジよりは下だ。マンガでは桜咲さんと対等に渡り合ってた描写があったけど、相当手を抜いていたと思うよ。それに何より障壁無視の反則技を持っていた」

「なるほど……」

アルカを抱きしめたまま話を聞く。

月詠。ここで彼女がアルカの家族になったことは大きな意味を持つ。今後先の事を本格的に話し合わないといけないだろう。

「これからはどうします？」

「そうだね、まずはゴールデンウィークでの会合まではやる事はそれほどないね。でも、学園に通う事になったのは素直に嬉しいよ？しばらくは楽しく学生生活を送るよ。級友と共に学ぶのは初めてだから結構ワクワクしてる」

「そうですね。騒がしいですか皆素晴らしい人です。すぐに仲良くなれますよ」

他愛ない話は続く。

お互いの温もりと匂いを感じながら。

「……………今日はどうしましょう。あいにくここへの入居は急でしたので、家具や寝具はありますが調理機器や食材などは無いんです」

「ご飯が無いんだ。……………なら、あそこに行こう」

「……………もう、ですか？」

アルカの言うあそこに心当たりがある。

何しろアルカが麻帆良に行く決意をした原因の一つだ。

「彼女はザジから見えてどう？」

「この一年ばかり、それとなく観察はしていましたが。結果として魔力は感知できずです。マンガの知識が無かったらただ異様に頭のいい一般人という認識だったと思います」

「そう……………か」

ザジがそう言うのだから間違いないだろう。

何かしらの封印処置を施しているのか。それともマンガのアレはやはり魔力ないものに無理やり魔法を使わせていたのか……。

「やっぱり気になる。エヴァさんへの挨拶もこの際後回しでいいや。……会いに行こう」

アルカの眼は真剣そのもの。

起き上がるとアスモデウスから送られた魔王の指輪、アルカの魔法触媒に向かって言葉が発する。

「もしもし？ 聞こえる？」

『ええ、聞こえるわ。無事に付いたようね』

指輪から聞こえる声を聞きアルカの顔が綻ぶ。声の主はゴモリ。アルカの最愛の母だ。

「うん、ザジと久々に会ったよ。やっぱり家族と会って安心するね。そして……これから確かめに行くよ」

『そう……結果は私も同盟一同にも聞かせるのよ？ あの子は私達の間では手放しで称賛できるほど評価しているの。できる事なら、あの子も』

「わかってるよ母さん。それじゃあ」

『確かめてきなさい、私の可愛い坊や……』

ゴモリとの会話を終わると少々緊張した面持ちで再度外套を羽織る。

「一緒に行つてくれる？」

「お供します、どこまでも」

アルカが差しのばした手を取りザジも立ち上がる。  
そして目的地へ向かい家を出た。

客足は多い。店は繁盛しているようだった。  
学生に混じりちらほら大人の姿も見てとれる。その人達は例外なく笑顔。とても好印象を与える店だ。

「おやおや？ 珍しいお客さんアルね」

小柄な女性だった。褐色の肌に髪は両サイドで結んでいる。チャイナ服が良く似合う、口調が特徴的な女の子。

「こんにちは。忙しいみたいですね古非」

「……あいやー、驚いたアル。ザジに話しかけられるのは初めてじゃないアルか？ むむ、それに男連れとは予想外にも程がアルね」

超包子。それがアルカの目的地。

「彼は私の従姉弟です」

「こんにちはは、僕はアルカ・ソロモン。お見知りおきを」

「おお！ 私は古非言うアル！ ザジとはクラスメイトね！ 色々話したいアルが、残念な事に仕事があるネ……」

本当に残念そうな顔をする古非を見てアルカはとても良い印象を受ける。

感情がとても読みやすい。裏表無い性格なのだろう。こうした素直な人は珍しい。

「いや、仕事中にごめんね。話す機会はこれから沢山あるだろうからその時に」

「ん？ わかたね。今はこの点心を一刻も早くお客さんに届けなければならぬという重大な使命があるから……ではまた今度ネ！」

古非は小さく頭を下げると駆けだしていった。熱心な仕事姿に感心する二人。

「さて、行きましょう」

「うん、行くう」

超包子に来た理由は古非に会うためではない。

人に会う事が目的だが、それは古非ではなく別の人。

その目的の人物はすぐに見つけられた。

「んん？ これは変わったお客さんが来たネ」

古非と同じような反応をした。

これまた古非と同じような口調だが、彼女は古非とは違い黒髪に黒い瞳。

お団子ヘアが妙に似合っている、美人と言うよりは可愛いと分類されるであろう女の子。

一目見た瞬間分かった。

魂の共鳴とでも言うのか、半分悪魔になったために理解したのか……陳腐な言葉だが、魂で感じたという言葉が一番しっくりくる。

「ほう？ それも男連れとは見せつけてくれるネ。ザジさんも中々やる人ネ」

彼女が何か言っているがよく耳に入ってこない。

「私にも紹介して欲しいネ。これほどのイケメン麻帆良には居なかったはずヨ」

間違いない。嘘じゃなかった、真実だった。何もかも、彼女の言う事は正しかったのだ。

「……こんな奇跡があるだろうか？」

「ちよっ！ 急に何ネ！？」

思わず彼女の手を取る。アルカの予想外の行動に顔を真っ赤にしているが、気にしない。何より今はこの出会いに感謝する。

「君から直接名前を聞きたい。名前を教えて貰ってもいいだろうか？」

「わ、私は超鈴いうネ。それよりも恥ずかしいのだが」

超鈴音。

マンガで見た、学園祭編の言わばラスボス。

ネギの子孫を名乗り歴史改ざんのために未来からやってきた火星人。

しかし、未来からやってきた事は本当でもネギの子孫という事の証拠は無かった。

だが、今確認した。感じたのだ己と同じ血を。もつとも古く貴い血を。

ネギはアリカ・アナルキア・エンテオフュシアとナギ・スプリングフィールドの子供。その子孫と言う事は流れているはずなのだ。

アリカの血が……ウエスペルタティアの王族の血が。

「ありがとう。鈴音」

「うう……な、何なんだ 何アルかこの展開は……」

珍しく超がてんぱっている。

彼女も女の子だ。アルカほどの美男子に手を握られ微笑まれたら人並みに照れもする。

「僕も自己紹介をしよう」

しかしすぐに超の表情は驚き、固まり、そして絶句する。

「僕はアルカ・テオゲヘナ・エンテオフュシア。この度火星から麻帆良に転入する事になった。よろしく頼むよ、我が血族よ」



血族（後書き）

超です！ 明日菜じゃないのです！ 鈴音です！

圧倒的なヒロイン力を持つ明日菜ではありません。  
超鈴音がこのSSのヒロインになります！

これからに向けて

困惑から一変、超の顔から熱が一気に引き、冷静を保ちつつ頭をフル回転させ目の前の男を考察する。

（何者ネ……ここにきてイレギュラーカ？ 火星人を名乗る、それを冗談と切って捨てる事も出来るだろうガ…… 火星人でなお且つエンテオフュシアを名乗ったネ。火星から来たエンテオフュシア、ウエスペルタティア王家……その名を騙った者……つまり魔法世界の真実を知っているという事力？。名をアルカと言ったネ。私の世界の過去、そしてこの世界、必死で調べたガ、該当するのは一人だけネ。災厄の女王アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの双子の兄。しかし、アルカ王子は幼少期に患った病気が原因で既に鬼籍に入っているはずダ。それに年齢も合わない。年齢詐称薬？ ありえるガ、何故このタイミングで私に接触してきた？）

高速で思考を続ける超に投げかけられた言葉は、冷静を取り戻した彼女を再び混乱の渦につき落としした。

「カシオペア」

「なっ!？」

仮に、仮にだ。仮に眼の目に立つ男がウエスペルタティアの王族で魔法世界からやってきていたとしても、その言葉が出てくるはずがない。

カシオペアは超が持つタイムマシンだ。その事を知っているのは超以外には彼女の仲間である葉加瀬聡美だけなのだから。

「……何者ダ。どうしてカシオペアを知っている？」

「そう睨まないでよ。僕は敵じゃない。むしろ味方だ」

警戒を露わにする超を見て、その反応も仕方がないと苦笑するアルカ。

「詳しい話は今夜にでも。もちろん葉加瀬女史も交えて。他にはエヴァンジェリン殿も御招待するつもりだよ。明日の朝には麻帆良の裏関係の人間に僕の紹介がある予定なんだ。その前に君達には話しておきたい」

「……信用しろと言うのか」

「はは、確かに僕は怪しさ満点だ。でも、信用させてみせるさ。君は真正正銘、数少ない僕と血のつながった？家族だ。僕が家族にそうされたように、僕も家族を愛し慈しみ命を賭して守る」

「な、何を言ってる……」

超はまだ困惑していた。面と向かって家族と言われたり、愛するなど守るなど囁かれて再び顔に熱が集まってくのを感じる。

（何なんだ、この男は！？ 確かに私は魔法世界で生を受けタ。だが、エンテオフュシアに家族と言われるなど心当たりがないネ！）

そう言っ握っていた手を離して名残惜しそうに背を向けて去っていくアルカ。

「ではまた今夜に」

ザジは超に一礼してアルカを追う。

後には呆然と立ち尽くす超だけが残された。

「……そういえば食事に来たんだった。ザジ、どうしよう？」

「そうでしたね……客人を招く準備もしないといけませんし、手輕に済ませてしまいましょか……」

「あ！ それなら僕牛丼というやつが食べてみたいな！」

キラキラと目を輝かせるアルカをみてどうしたものかと悩むザジ。

「何事も経験と言いますが、やんごとなき血筋であるあなたにそのようなものを食べさせて大丈夫なのでしょう……」

なんだかんだ言って結局二人して駅前『早い！ 安い！』が宣伝文句の牛丼チェーン店で食事を済ませたのだった。

「ん？ なんだ貴様らもお呼ばれか？」

「ケケケ……ドウィットタメンツダ？ 珍ライシジャンエカ」

「超に葉加瀬、こんばんわです」

アルカとザジの新居に招かれた五人。偶然にもこの五人はアルカ邸の前で鉢合わせした。

時刻は午後十時。少なくとも女子中学生が出歩いていい時間ではないが、少なくとも？ 普通の女の子に当てはまらない彼女達はそんな事気にしない。

「私としても未だ混乱収まらない状態ネ」

「詳しくはえつと、アルカさんでしたっけ？ その人が説明してくれると思いますよ。……ちよつと待つて下さい、チャチャゼロさん動いてませんか？」

「そこには突っ込むな。頭が痛くなる」

頭を抱えて溜息を吐くエヴァ。頭痛の原因であるチャチャゼロは  
楽しそうにパタパタとエヴァの隣を飛んでいる。  
呼ばれた五人は知らない仲じゃない。

超と葉加瀬は茶々丸の生みの親で当然魔法の事も知っている。エ  
ヴァの正体もちろん分かっている。

何故このメンバーが呼ばれたのか疑問は尽きないが、それももう  
すぐ解決するだろう。

(フン、帝国の留学生か。大層にソロモンの姓を騙っているそうじ  
ゃないか？ そんなあからさまな偽名を使って……。だが、呼びつ  
ける形とはいえこの私に挨拶したいという心構えは認めてやらんで  
もないがな)

学生生活に退屈しきっていたエヴァは内心楽しみにしていた。  
アルカ。帝国からの留学生。忌み子として蔑まされた暗い過去を  
持ち、現在はヘラス皇帝の保護下に置かれている子供。ジャック・  
ラカンや何故かは知らないが変態超進化していたかつての自分の分  
霊体とも親しいという。これに興味をそそられないわけがない。

「まあいいさ、すぐにわかる事だろうからな。さつさと中に……ん  
?」

「どうしましたマスター?」  
「……な、んだ……この気配は……」

茶々丸が心配そうにエヴァの顔を覗き込む。  
エヴァの顔は蒼い。冷や汗を全身から垂れ流し鼓動も早くなる。  
全身泡立ち手先が小さく震えている。

抱いた感情は間違いなく恐怖。いる、何かが。この家の中に真祖

の吸血鬼を心底恐怖させる何かが。

「……御主人、ヤベエナ。ココマデヤバイ気配、生マレテコノカタ  
感ジタコトネエ……」

チャチャゼロもエヴァと同じ反応だ。他の面子は二人の言う気配  
が分からないらしく、首をかしげている。

「こんな馬鹿げた力、何故結界が反応しない!? ……なるほど、  
この家に結界が張つてあるな。魔力が外に漏れないよう遮断してい  
るわけか……」

一人納得するエヴァの目の前で扉がゆっくりと開いた。

突然の出来事に身構えるエヴァとチャチャゼロだが、扉から現れ  
たのはよく見知った顔だった。

「……やあ、よく来てくれたね。私だけじゃ不安だったんだ。よく、  
よく来てくれた……本当に」

「龍宮真名か……お前も呼ばれていたのか?」

思わず息を吐き安心してしまう。

扉から姿を見せたのは龍宮真名。呼ばれた五人同様裏に関係して  
いる魔法生徒だ。

「どうしたんですか? 死人のような顔をしていますよ?」

「ははは……葉加瀬、入ってみればわかるさ」

「龍宮サンがこんなになるなんてどういふ事ネ?」

真名の顔色は悪く酷く疲れている様子だった。

普段の彼女は絶対に見せないであろう弱々しい姿を見せつけられ

て一同に緊張が走る。一体中に何があるのか？

家の中に招き入れられて一同はテーブルに付いていた。

ザジ自ら紅茶を淹れ客人に振舞う。が、招かれた者は未だ一人としてカップに手をつけてはいない。

困惑しているのは超と葉加瀬と茶々丸。

エヴァ、チャチャゼロ、真名の三人は恐怖に震えていた。

「どうぞ遠慮せずに。我が故郷オスティアの紅茶は香りも良く味も深い。大変美味なので冷めないうちに」

「そうはいうがな……」

あのエヴァンジェリンが気圧されっぱなしだ。

招待主であるアルカは紅茶を勧めるが、優雅に紅茶なんぞ飲んでいられる状況ではない。

何もアルカが怖くて震えているのではない。そしてもちろんザジが原因でも無い。

ザジはアルカの左隣に腰掛けている。問題はアルカの右隣に腰掛け優雅に紅茶を飲んでいる壮年の紳士だ。

「……カカ、そう怖がるではない真祖よ」

「っ！？」

声をかけられただけで心臓が爆発しそうだ。

圧倒的力量差。格の違い、その全てが手に取るように分かる。

生を受けて六百年。技を磨いた、全ての悪意を撥ね退けるほどの

力を身に付けた。最強の魔法使いを自称している。何も自身の力を過大に誇張しているわけではない。

他の魔法使いを寄せ付けない力を手にした。古き知り合いの有害指定図書、かの帝国の守護龍である龍樹、大英雄ジャック・ラカン、姑息な罫に嵌められはしたが真正面から戦えばサウザンドマスターでさえ屠れるだろう。

だが、目の前の存在は違う。理屈じゃない、死の壁そのものだ。出会ってはいけない、関わってはいけない。できる事といえば無様に命乞いをするくらいだろう。

「ふむ、僕の力を感じ取るとは上出来じゃ。カカ、イヴの元となつた者じゃからそれも当然か。じゃが、貴殿の従者が怯えている理由は僕だけじゃないようじゃがの？」

すぐ隣のチャチャゼロを見るエヴァ。確かに怯えてはいるが……。

「御主人、コノ旦那も相当ヤベエガ、マジデ洒落ニナンネエノガアノ人ダ」

「……何故だ？」

エヴァには視えないが、イヴの手によって進化したチャチャゼロは見える。アルカの魂に刻まれた加護と名が。

「ふふ……しょうがない、本題を切り出そう。改めての自己紹介だ……」

アルカが口火を切り語り出すと同時に変化が起こる。

漆黒だった髪の色は鮮やかな金色に。同じく漆黒だった瞳の色は左右で瞳の色が違うオッドアイに。



一種の変身魔法、体の一部を変化させていた。髪の色と瞳の色。

「あっ！」

思わず超が声を上げる。

重なる、その姿が重なる。文献で見た魔法世界で禁忌扱いされている災厄の女王に。

超以外は変装か、くらしいの感想だったが、超には思いのほか衝撃を与えた。予め知っていた真名でさえも息を呑んでいる。

「我が名はアルカ・テオゲヘナ・エンテオフユシア。アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの双子の兄。今は無きウエスペルタイア王国の王子。そしてネギ・スプリングフィールドの伯父でもある」

スプリングフィールドの名に反応する超とエヴァ。

「ここに呼んだのは他でもない。どうか、僕に力を貸してほしい」

「そう言いアルカは躊躇うことなく頭を下げた。その行動に超達はさらなる衝撃を受ける。」

「カカ、さて……どうなる事じゃろうな」

そんな光景を見ながらアルカの友は紅茶を口に含む。

「未来がどう転ぶかはお前次第じゃアルカよ。どんな結末を迎えようとして、僕等は最後まで見届けようぞ」

これからに向けて（後書き）

超の『心当たりが無い』は仕様です。

## 目的

「何をしているんだあなたは！ アルカさん、それはいけない！」  
「オオイ！ 何ヤツテンダ！」

アルカが頭を下げたことで慌てたのは真名とチャチャゼロ。二人の取り乱しようは異常だ。大慌てでアルカに駆け寄り必死に頭を上げさせた。

「アルカさん、あなたは軽々しく頭を下げていいような人じゃありません。お願いだから自重してくれ。あなたの姿勢、態度はとても好ましいが、私の寿命が縮まる」

「ソレモコノオ方ノ隣デダナンテ悪イ冗談ダ」

会釈などの挨拶のレベルを超えていた。二人が言うように、本来ならアルカは軽々しく頭を下げていいような立場にいない。

アルカの立ち位置は複雑だがとても高貴だ。

正直エンテオフュシアの名はお荷物にしかない。いくら古く由緒ある血筋だろうが既に国は滅び、メガロメセンブリアの策略のせいでその名はアリカの名誉と共に地に落ちた。

領土も民もなにも持たない名ばかりの王族になんの価値があるだろうか？ アルカは何の価値も見いだせない。

「そんな態度を取らないでよ真名。そしてチャチャゼロさんは初めましてだね？」

「そうはおっしやいますが……」

「ハジメマシテダガ……今自己紹介ナンテ余裕ナイゼ」

どンドン口調が丁寧になっていく真名にちよっとげんなりした口

調のチャチャゼロ。

しかし、何故二人がこのような態度になっているのか招かれた客人達は分からない。

エヴァはアルカの隣の紳士、即ちベルゼブブに戦々恐々しているが、何故ベルゼブブではなくアルカにそうした態度をとるのか理解できない。

エンテオフユシアという家名の意味も理解できる。スプリングフィールドという気になる言葉も出てきた。だが、チャチャゼロが、自らの従者があのような態度を取るのには初めて見る。主である自分にもああいった畏まった態度は取らない。王族相手だろうが物怖じなど絶対にしないはずだ。六百年連れ添った家族だ、それは間違いないのだが……。

「不思議か？」

「……っ！ ええ、私にはまるで分からない」

急に話しかけられ冷や汗が吹き出るエヴァ。そもそもエヴァはベルゼブブの正体をまだ知らない。エヴァにはなにか途方もない力を持った強大な存在だという事は理解出来るのだ。しかし、超、葉加瀬、茶々丸に至ってはただの人の良さそうなおじさんくらいにしか思っていない可能性すらある。

「ふむ、実際に見せてみた方が早いかの？ 今この建物は儂が手を加えておる。この地にある神木、その魔力を司る広大な龍脈をいじりその魔力の一部をこの家屋に流し込み、その宝石に溜め込んでおる。アスモデウス秘蔵の宝石じゃ、見かけは小さいが溜め込む魔力はとてつもなく大きい。自己封印でかなりの力を落としたとはいえこの儂の本体を現界し留めておけるのだから。残念ながらこの家屋内のみという制限はあるが」

アスモデウスという言葉に目を剥くエヴァと超。葉加瀬と茶々丸はイマイチネームバリエーの凄さを理解できていない。

実際に存在しているかどうかすら分からない神話クラスの大悪魔。そんな大悪魔の名を軽々しく呼ぶなどは……一体何者なのかと嫌な汗が流れる。

「アルカ、都合の付く奴を何体か呼んでやれ。何なら僕が交代で還つてもいい。ペイモンが会いたいと寂しがっていたぞ？」

「モンちゃんが？ 声をかけてみるよ」

「自己封印状態で三……いや、四体は可能かの？ いやいや中々どうしてこの地の龍脈は上質じゃ」

くくくと笑うベルゼブブ。

アルカが何をするかを察して微笑むザジと青くなる真名とチャチャゼロ。

固唾を飲むエヴァと超。そして葉加瀬とチャチャゼロはやはり分かっていない。

「ふむ、交代かの。アルカ、ザジ、久々に楽しめた。良い時間を過ごせた事に感謝する」

ベルゼブブの体が淡く光る。送還されようとしているのだ。

「我が名はベルゼブブ。アルカの家族にして友、魔界では魔王の地位についておる」

予想を遙かに凌駕する超一級の霊核を持ついわば神クラスの悪魔。

いや、悪魔に墜とされる前は真正正銘の神だったのだ。知識だけであまり裏に身を置いていない葉加瀬やまだ感情が幼い茶々丸は今一ピンとこないみたいだが……。実際に裏に身を置き深く関わっているエヴァ、チャチャゼロ、真名、超の衝撃は計り知れない。事、既に存在そのものが既に神秘の域に達しつつあるエヴァでさえその霊核は足元にも及ばない。

かつてサタンに伯爵クラスの力を持つと言わしめたラカン、マステマに優秀と評されたイヴ。エヴァはイヴのオリジナルだ。イヴは本体は自分より数段強いと明言している。そしてそれは紛れもない事実。

そんなエヴァでさえ悪魔達の階級に当てはめるとラカンと同じく伯爵止まりだろう。文字通り次元が違うのだ。

「……………！ な、何アル!？」

「な、なんででしょうか？」

送還の光に包まれながらもベルゼブブは超と葉加瀬と握手し、不敵な笑みを浮かべた。

超と葉加瀬は困惑気味だが……。

「人の子よ。儂等は貴殿を深く尊敬し、称える。誇るがいい。貴殿は神の領域に足を踏み入れておる」

「は、はあ？」

ベルゼブブの言葉に何とか頷いて見せる葉加瀬。とてつもない高評価を貰っている事は理解したが、何の事やらさっぱりわからない。

「超鈴音」

「は、はい！」

思わずかきこまってしまっ超。いつもの口調も抜けてしまっている。エヴァや真名の怯えようから目の前の存在がかの高名な蠅の王である事を確信したために緊張度合が先ほどの比では無い。

「よう来たの。貴殿も人の範疇を超える大業を成して見せた。見事、見事じゃ。そう怯えんでもよい」

優しく超の頭を撫でる。

その予想などできるはずもない行動にしばし呆然としてしまう。

「そろそろか。アルカ、ザジ、久々の再開実に有意義じゃった」

「うん、僕も久しぶりに楽しかった」

「私もアルカと同じです。皆様方にもよろしくお伝えください」

「あいわかった。土産も買ったしの、奴らにお前達の近況を聞かせてやるとするかの」

不敵に笑うベルゼブブの手にはコンビニの袋。いわゆるコンビニスイーツがこたま入っている。お土産がそんなに安っぽいものでいいのかと思うが本人は存外気に入っているみたいだ。

「ではまた相見えようぞ」

ベルゼブブが完全に光に包まれると同時に新たに四つの光が出現する。

「う……………っ」

思わず声が漏れたのは誰だろうか。先ほどから一時も休める余裕

がない。

その四つの光のから感じられる濃密な魔力。またしてもエヴァ、チャチャゼロ、真名、が恐怖に戦く。

「ああ……みんな、久しぶり！」

「ご無沙汰しております」

アルカとザジは久々の友人との再会に顔を綻ばせ喜ぶ。

「久しぶりやな。元気しとったか？」

「しばらく見ないうちにずいぶん男らしくなつたみたいねえ」

「アルカ、ザジ、息災だったか？」

「背え伸びたね！ うん、健やかに育つてくれてボクは嬉しいよ！」

バシン、アスタロト、ペイモン、ネルガル。

知名度や霊核はベルゼブブより劣るだろう。

しかし、それでもその実力は次元違い。エヴァが束になつても敵わないだろう。

エヴァ達はまだ四人の名を知らないが、四人の持つ桁外れな魔力からその実力を察することはできる。

（何だ、何だ何だ何なんだ！？ 先ほどの次元違いな存在、それに近い実力を持つ者が四人も同時に現れた！？ 召喚……？）  
馬鹿な、このような存在を召喚するのにどれだけの対価を払わねばならないかと思ってるんだ！？ 龍脈の魔力を使って喚んでいるにしても、召喚には契約が必用。この四人、生半可な事じゃ契約など無理だ。術者は誰か？ 決まっている、あのアルカとか言う男だ。何者なんだ！？ 推し量れん……）



「うん？ お前はエヴァンジェリンか？」  
「……………私がエヴァンジェリンで相違ない」

強気な態度に出てみたが膝は笑っている。正直泣き出してしまっ  
そうだ。

「ほら、ペイモンは目が怖いからエヴァちゃんが怖がってるよ？」  
「む？ そんなに某は目つきが悪いか？ バシンはどう思う？」  
「そこでオイラに振るか？ ネルガルの言うとおり確かに目つき悪  
いときあると思うけどよ。何なん？ 近眼なん？ 何千年も近眼な  
ん？」

「ほらほらみんなしてペイモンを虐めないの！ 別に怖くないわ  
よねえアルカ？」

「ロツテの言う通りだよ。モンちゃんは可愛いよ？」  
「アルカ　！」

内輪ネタで盛り上がる。周りは置いてけぼりだが、エヴァはまる  
で金魚のようにパクパクと口を開け必死に空気を肺に送り込んでい  
た。

ペイモン、バシン、ネルガル、ロツテ、人物名で間違いないだろ  
う。

（ベルゼブブ、ペイモン、バシン、ネルガル……………どれもこ  
れも神話クラスの大悪魔。恐らく本物……………にわかには信じ  
られんが……………私がここまで怖気を感じるのだから間違いな  
いだろう。共通点は……………ソロモン七十二柱か！ とすれば、  
ロツテは愛称。よもやアスタロトか？

ソロモンという偽名……………納得した）

「皆様方、まずは席にお着き下さい。直ぐに紅茶を淹れます」

「あらあら、気を遣わせちゃったわねえ」  
「すまんなザジ。美味いやつ頼むわ」

そんな大悪魔とにこやかに談笑するザジも体外だとエヴァは思った。

普段通りに振る舞うザジを見て彼女のことが分からなくなってきた。学園長室でのザジの言葉が真実ならザジはアルカの仮契約の従者だ。よもやザジの正体は擬態した大悪魔なのではないかと一人想像し戦々恐々としてしまう。実際はとうの昔に感覚が麻痺したまま戻らないだけなのだ。

「ふむふむ、エヴァちゃん以外にはええと……そのノツボが龍宮真名、眼鏡の子が葉加瀬聡美、赤ん坊が茶々丸、ルシファ様の眷属がチャチャゼロで合ってるかな？」

ネルガルに名を言い当てられて驚く四人。

「そして貴殿が超鈴音か」  
「は、はい……」

ペイモンに見られ若干怯える超。口調はまだ直っていない。

「そう怯えなくても良いわよお？ 取って喰う訳じゃないしねえ？  
アスモデウスだったら食べちゃうかもしれないけどねえ」  
「ひっ……！！」

喰われる、という言葉に反応し恐怖する超だが、そのままの意味ではなく性的な意味だとは知るよしもない。

「怯えなくても良いって言うてるでしょう？ 安心しなさいなあ、

私達は無条件で貴女の味方よお？ アルカの家族は私達の家族と同意義。アルカの友は私達の友よお？ 私はあ、アスタロト。ソロモンが序列二十九位、A・O・Dが序列十位。七つの大罪が一つ怠惰を司っている魔王よお」

「え、えつと……」

慈しみに満ちた瞳で超の頭を撫でるアスタロトに戸惑う。

しかし何故か心安らぐ。とても怖い魔王のはずなのに、何故こんなに優しく接してくれるのか。

「さてと、アスタロトに習って自己紹介した方がいいかな？ オイラはバシン、大公爵やつとるわ」

「某はペイモン。地位は魔王だな。よろしくお願いする」

「ボクはネルガル！ 警察署長やつてるよ！ 地位は魔王だよ！」

かなり軽い感じの自己紹介だ。

しかし自己紹介された側はたまったものではない。

爵位級の悪魔一柱を倒すのに並の魔法使い数人必用だろう。

通常、人が個人で召喚できる限界は大体伯爵クラス程度だろう。

しかも通常の召喚、つまり本体ではなく分霊体の悪魔がせいぜい。そもそも完全召喚することが出来る術者自体が希だ。

完全な状態な伯爵クラスの悪魔の実力は分霊体を遙かに凌ぐ。ラカンをして伯爵レベルの力を持っているという発言は正しい。世界最高峰の本物の戦闘者であるラカンでさえ伯爵止まりなのだ。これは過小評価でも過大評価でもなく正当な評価。

人の身では届いても伯爵レベルがせいぜい。

それなのに何だ？ 大公爵に魔王が三柱など冗談でも笑えない。

「自己紹介も済んだところで本題にうつっていいかな？ さっきは

真名とチャチャゼロさんが慌てちゃったから本題に入れてないんだ」

「慌てるのは当然だと思いますが……」

「呼び捨てで構ワネエデスヨ」

引きつった笑顔を浮かべる真名と珍しく敬語なチャチャゼロ。

「単刀直入に言うよ。………鈴音」

「な、何アルカ………」

「僕は、僕達は………君の計画に乗りたい」

超と葉加瀬に衝撃が走る。

真名はリアクションがないので計画を知らされる前だったのかも知れない。

「それは………学園祭の事を言っているのですか？」

「その通りだよ葉加瀬女史」

アルカが頷くと超と葉加瀬の顔が強ばる。

計画のことはまだ誰にも知らせていない。情報など漏れるはずもない。アルカが知っているはずがないのだ。ありえない、そう、ありえない。

一体何者なのか、何を、どこまで知っているのか………。

「国の再興。妹の名誉の回復。アリカ、ナギを探し出す。ネギを見守る。そして………」

言葉を切る。

視線がアルカに集まっている。一呼吸、二呼吸、三呼吸分間を置き言葉を紡ぐ。

その言葉に驚愕するのは超のみだ。だが、その衝撃は大きい。

まただ、また知り得ないはずの情報を知っている。アルカに恐怖さえ覚えてしまう。

無意識のうちに自分で自分の肩を抱いてしまっている。分からない、本当に分からない。

「魔法世界の消滅を食い止める。だから君の計画に協力したいんだ。そしてそれは僕の願いにも繋がる。故に君たちの協力が必要なんだ。どうか力を貸して欲しい」

目的（後書き）

茶々丸喋ってないや・・・。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4406u/>

---

悪魔の御子

2012年1月2日02時45分発行